
正しい勇者の育て方

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい勇者の育て方

【Nコード】

N0754M

【作者名】

Rail

【あらすじ】

長閑な田舎を支配する魔王として就任して早三年。弱小魔王の”私”のところに勇者サマがやってきた。なんでも私を退治しに来たのだとか。面倒なので適当に追い返したのにまた来るし、しかも勇者サマの教育係って何事！？

がきんちよ勇者サマとものぐさで大人げない魔王の交流する多分ほのぼのギャグストーリー！。

第1戦 ガキンチヨ勇者サマ襲来

我が家にノックダツシュを繰り返していた子供をようやく捕まえた。十度目の正直だ。

私は子供の襟首をつかむと、思い切り拳骨を食らわせた。

「こら坊や！ 人の家にイタズラしちゃダメでしょ！」

私が叱ると、子供は涙目で私を睨みつけてきた。

「うるさい魔王め！ 僕が退治してやるんだからな！」

人々から魔王と呼ばれて早三年。

それが私と『勇者サマ』との初めての出会いだった。

さて、単なる有翼族と人間のハーフである私がなぜ人々から魔王と呼ばれることになったのか。これにはちよつとばかり込み入った訳がある。

といつても、八割方の理由は私の名前にある。

私の父は有翼族だった。女つたらしで有名なあの有翼族である。常に女は取っ替え引っ替え、同じ相手と一ヶ月続いたら槍が降るに違いないと言われるあの有翼族だ。

ご多分に洩れず、私の父も女つたらしだった。私の母と燃えるような恋に落ちた父はあつという間に冷めて、母から離れていつてしまった。冷たいとは思わない。しかし我が母ながら、どうせ恋するなら一生添え遂げてくれるという人狼族にしとけばよかったのにと

思わずにはいられない。

それはさておき、その短い期間に母は私を身ごもったというわけだ。

私の母は変わった人で、自称地球人で日本人で元大学生という人だった。ある日いきなりこの世界に飛ばされたのだという。母の話を聞く限り、母は『さまよう扉』をくぐってしまったようである。さまよう扉といえは、旅人の間では使われる『世界の扉』の亜種で、ごくまれに姿を現すというあれである。飛ばされる先がわからないというスリリングなものだから、酔狂な人以外は見かけてもまず使わないともっぱらの評判だ。母は知らずにそれをくぐり、数多ある星の中のシークに飛ばされたというわけ。母のいた地球という星には『世界の扉』が存在していなかったらしく、帰る手段もなかったんだそうだ。

まあそういつたわけで寄る辺もなかった母だが、意外や意外、たくましかった。父がいなくなった後も女手一つで私を育てた。シークで生まれた私だが、名前は日本人と同じである。名字は母と同じ空野。名前は真央。女の子が産まれたら真央という名前にしようと心に決めていたそうだ。

勘の良い方はお気づきだろう。この珍しい響きの名前は見事に勘違いを呼び、私は今やこのテストという星において、「空の魔王」という通称で呼ばれている。

なんだかんだで私も母を亡くして生まれ故郷の星を離れてしまいこの惑星テストに流れ着いたわけだが、魔王というのも意外と悪くない。私が支配している村の人たちとの関係も良好だし、衣食住は

保証されている。唯一心配されるのは魔王を倒す資格がある『勇者』だったが、幸いにしてこの三年、特にそういった人間が来たことはない。このノックダツシュ勇者サマが最初である。

「はいはい、それで？　なんで私を退治するのにノックダツシュなんてしてたのクソガキ」

勇者サマを正座させて問いただすと、彼は再びこちらをにらみつけてきた。

「うつせーババア！」

私は勇者サマを殴った。これは純然たる教育的指導である。

「お姉さんと呼びなさい。私はまだぎりぎり十代なんだから」

「うつせーババア」

再び教育的指導。勇者サマはもうポロポロと涙をこぼしている。

良心が痛まないかって？　だって私魔王だし。

「お姉さんが無理なら魔王様と呼びなさい」

あ、なんか私ってば昔母さんが言ってた女王様みたい。

「うつせー……魔王」

「よろしい」

なかなか素直だ。子供は素直が一番。

「で？　君はこの子？　見たことない顔だけど」

自慢じゃないが、村の子供たちなら顔を見ればどこの子か分かる。

私の問いに少年は黙りこくってしまった。

ため息をつきつつも私は少年を観察した。

年の頃なら十代半ば……より幼いか。十二、三歳？　いや、もしかしたら十歳ぐらいかもしれない。防具は布の服に皮の靴、といえば聞こえがいいが、要するに普通の格好である。山に入る際には大人も子供も大抵こういう格好だ。そして右手に木の枝、左手に鍋のふた、腰には何やら入っていきそうな皮袋を下げていて、首から下げているのは手作りのお守りのようだ。とりあえず思う。装備簡単過ぎるだろ。冒険ごっこか？　肉体派にも到底見えないし、これじゃあ弱いモンスターにだって負ける。

「とにかく、もう暗くなってきたるし送るよ。村の入り口でも大丈夫だよ」

さすがに暗い山道を子供に歩かせる訳にはいかない。仮にもこの村を支配している魔王としては将来の貴重な労働力が減ってしまうことは避けたい。

私が立ち上がると、勇者サマはびくりと肩をふるわせた。私は肩をすくめた。

「次に来るときはもう少しちゃんとした装備で来ることだね。せめてひのきの棒と皮の盾くらいは」

武器が木の枝っていうのは無理だろう。高度な魔法使いならともかく。

「……だもん」

少年が小さく呟く。

「これは聖剣だもん」

「よし、村に行くよ」

ガキの戯れ言に付き合っていない。普段なら用いない転移魔法で村まで一気にジャンプだ。

村に着くと、ちょうど大人たちがうろうろしていたので声をかける。

「ヤルン、この子どこの子か知らない？」

「ああ、魔王さん」

振り返ったヤルンは私の連れた少年を見てはつとした。

「みんな、オキがいたぞお」

彼が言えば、そろそろと村の人々が集まる。

「いやあ、ちょうどよかったです。今からみんなで魔王さんところ

く準備してたんですよ」

「何、魔王狩り？」

私が冗談で言っていると、ヤルンはいやいやと首を振った。

「その子、オキがね、魔王さんを退治するって言って山に入ってた子供たちが言ってるね。時間的にも危ないでしょう」

まあだからこそ私が送ってきたわけだが。大人たちが迎えに来るんならほっとけば良かった。魔力を無駄にしたな。それにしてもオキという名前は初めて聞いた。

私はオキを大人たちに引き渡した。様子を見るに、この後お説教大会が始まるのだろう。

オキが連れて行かれるのをぼんやりと見送っていると、突然彼が振り返った。

「次は絶対やつつけてやるからな！」

見事なまでの反骨精神だ。とても魔王当人に村まで送られた人間の言うこととは思えない。

「手土産持つてこないと追い返すから」

大人たちに叱られているオキに手をふってやると、彼はまだ何かわめいているようだったが、そのまま大人に連れて行かれた。

後に残ったのは私とヤルンだ。

「見ない子だけど、この村の子？」

「いや、隣村です」

ああなるほど。

「あつちに挑戦してたら確実にあの世行きだよね」

隣村の魔王といえば、大蛇魔王ミーミーヤンジャだ。あんな巨大蛇に木の枝だけで挑めば一飲みにされてしまうだろう。自分の村を支配している魔王ではなく、あえてこの一帯では一番弱い私に挑んできたあたり、ある程度の分別はあるようだ。

しかしああいった向こう見ずな子供にはもう少しきつくお灸を据えても良かったかもしれない。あの分じゃあと何度か挑んできても

おかしくない。面倒くさいことになりそうだ。

「今回は無事だったけど、次回もそうとは限らないんだからしっかり釘差しといてね」

私が言うつと、ヤルンは苦笑した。

「ええ、重々承知してます。とはいっても、あの年頃の子供は大人の言うつことを聞きませんから」

その言葉に私も苦笑する。私もあれくらいの年齢の時は母親となり喧嘩した。家を閉め出されたことも数えられないくらいあった。一晩木に吊された時は本気で泣きわめいたものだ。

「そういえば魔王さん、うちの女房が作ったパンのまだ温かいのがありますよ。持って帰りますか」

「うん、もらってく」

とにかく、問題に発展する前に解決して何よりだ。

魔王の私が言つのもなんだが、平和が一番である。

第1戦 ガキンチョ勇者サマ襲来（後書き）

PCのサイトからの転載です。

第2戦 今日もツキバ村は平和です

唐突だが、私の支配する村について説明しよう。

私が支配するツキバ村は、山に囲まれた緑豊かな村だ。有体に言うとうと田舎。気候は穏やか、人々も穏やか。というか大人しい。大体の村人は農耕と牧畜の両方で生計を立てている。テスハという星全体から見れば貧しい村かもしれないが、生活していく上ではそれほど苦しくもない。何より人の表情が明るいのがいい。

百ほどの家族が暮らす小さな村だ。村の人は互いに顔見知りで、一つの家族のような村である。

私との関係は至って良好。定期的に食物を献上してくれるし敬ってくれる。同年代では仲のいい友達も何人かいるし。

総合的に見て、大した力もない新人魔王が担当するには勿体ないくらいの好条件だ。もちろん、手放す気はない。石にかじりついてでも支配し続けてやる。規模が大きい街なんかだと、時々支配下の人間が反乱を起こすらしい。こっちは大したこともしてないのにいい迷惑だと知人の魔王がこぼしていたのを聞いたことがある。もしうちでもそういったことがあったら村長を人質にしてどうにかして逃げようと思う。いや、あのハゲは意外と人望が薄いから村長の奥さんの方が良いかもしれない。彼女は人格者だしグラマラスな美女だ。なんであのハゲと結婚したのかツキバ村で一番の謎だ。

まあとかく平和でいい村だが、昔っからそうだったかといえそうだったわけではない。

私がこの村を支配する魔王になった当初、この村はいわゆるハズレの地域だった。山の高台から荒廃した村を見下ろした時の、あのぞっとした感覚は忘れることができない。

何しろ森も山も荒れ放題、家屋は壊れていない方がまれ、村人は

私と目が合おうものなら全力で逃げ出した。

唯一違っていたのはハゲこと村長だけだった。

「トウイ様、その方が……？」

すぎるように言うハゲは、私の後見人である先輩魔王トウイに全幅の信頼を寄せているようだった。なぜトウイのような面倒くさがりで調子だけはいいい無精ひげを生やしたおっさんを信用するのか、私にはいまいち理解できない。

「ああ、こいつは空の魔王つつてな。弱いしヘタレだがお前らにはピツタリだ」

おっさん喧嘩売ってんのかと怒鳴らなかった私は賢明だったんだろう。あそこで破談になってたら今の安楽な生活はなかった。

ツキバ村は疲弊していた。私の前にここを支配していた魔王のせいだ。

トウイは簡単に説明してくれた。

曰く、「前の魔王が不治の病にかかってヤケになって暴れた」らしい。しかもヤケを起こしてから三年以上生きていたという。さらに言うなら不治の病って要するに水虫だったらしいんだけどなんでそれでヤケ起こすのか。っていつかなんで水虫で死ぬの先代魔王。傍迷惑すぎるだろう。

まあそんなこんなで壊滅的状况に陥ったツキバ村は平和を願った。そして求人票ならぬ求魔王票を魔王連盟に提出したのだが、一向にこれといった魔王が現れない。地理的に規模の大きい村や町に囲まれていたのも一因だったろう。周辺の魔王が強いと力のない魔王は肩身が狭い。わざわざ荒れた小さな村に行ってそんな気鬱な近所づきあいをしてやろうという魔王が現れず、魔王不在の期間が長く続いた。

一般に、勇者たちは魔王を倒して平和をもたらす英雄と考えられているが、魔王がいなければ平和、というのは間違いである。

魔王というのは確かに邪悪な存在ではあるが、それと同時に邪悪な存在を取り締まる役割もしている。要するにヤクザの元締め。魔王がいなければ野良モンスターが好き勝手に跋扈する。それを魔王サイドなりにまとめるのが魔王の仕事でもある。そこにいる村人たちが自力でモンスターを倒せる実力があるならともかく、ごく普通の村人たちなら魔王にモンスターを統括してもらった方が遥かに楽なのだ。

さて、魔王がいなくなつてひとまず危機は脱したものの、モンスターのせいでじわじわと衰退していく村に危機感を抱いていた村長は、知人のツテを頼ることにした。それがトウイであり、それに連れられて来たのが私だったわけだ。

今にして思えば、私が魔王になつてしまったのもトウイの策略だったんだろ。奴がいなければ私は魔王試験に合格することはなかったはずだ。私の魔王試験についてはいずれ話そうと思う。

まあそういうわけでトウイ曰く弱くてヘタレな私はツキバ村の魔王に就任した。

村長の奥さんであるリコが定期的に私に食物を持ってきたが、それだけだった。挨拶と事務的な会話しかなかった。先代の魔王のことであつてか、隠してはいるが私に対して怯えているのは明らかだった。それでも来ていたのは村長の妻という立場があるからだ。立派な女性だと思う。

村が貧しいこともあり、運ばれてくる食料もお世辞にも豪華とは言えないもので、用意された生活用品も粗末なものだった。いつても、村が荒れ果てているのも承知していたので私は何も言わなかった。

そこで一念発起してツキバ村の復興に手を貸せばまあ美談なんだろうが、残念ながら私はそんな献身的な性格ではない。とりあえず自分の身を守ることを最優先にした。

まずご近所の魔王に挨拶。これは重要だ。新参者が挨拶もなしだなんて生意気だ！ と反感を持たれてはかなわない。魔王連盟の取り決めで他の魔王の領地を侵略してはいけないというのが、嫌がらせならば黙認されている。その上近隣の魔王たちは力のあるタイプが多い。敵に回したら私が地獄を見るに違いない。私は断トツで最弱である。そういうわけで私は綿密なりサーチを重ねてから近隣の魔王の好物を引っ提げ挨拶回りをした。牛丸ごと一匹はともかく、新巻鮭は非常に入手が困難だったが、そこは気合である。トウイに頼んだ。これは丸投げではない。戦略だ。

そんなこんな挨拶回りは好感触で終わった。事前にリサーチしたのが良かったに違いない。例えばもしリサーチを怠って空腹のミーヤンジャのところに行ったものなら、私は確実に奴に食われていた。下調べって大事だ。

次に魔王試験に合格すると覚える特技とでもいうもので、村中のモンスターを配下に下した。強い勇者が来た時モンスターを盾にするためだ。私の号令一つで俊敏な動きをするように躡けた。お手やおかわり、取ってこいなんて序の口である。チームプレイ、暗号、結界、料理洗濯などの家事、マツサージ、なんでもできるようにした。特に私の安全を確保する行動と私の日々の世話を重点的に覚えさせた。後に様子を見に来たトウイに「こいつら本当にモンスターか？」と言わしめた程である。

そして仕上げに自分の住居である山を要塞化した。勇者に攻め入れられないようにである。魔王用の住居は先代のをそのまま引き継いでいるのだが、まあこれが荒れていた。住居の修理は当然モンスターにさせたのだが、ひどいのは住居の周りである。山の頂上に建設されているのだが、その山がすっかりハゲ山になっているのだ。当然だ、先代魔王が暴れたのだから。しかし木のない山の天辺にある住居など、格好の的である。大砲や遠距離魔法で集中砲火を浴びたらおしまいだ。

これは植樹するしかない。

思い立ったが吉日、私はハゲ山緑地計画に着手した。

私は植物系モンスターに召集を掛けると、「あんたたち木になれ」と命令した。わざわざ苗木から育てるなんて面倒くさいことはしたくない。手っ取り早く巨木サイズのモンスターを植物にしたら楽だし早いと思ったのだ。しかし当人たちから無理と言われた。一度モンスターになると植物には戻れないらしい。「あんたたち私の安全が脅かされてもいいのか!」とうっかり癇癢を起したのだが、奴らはオロオロするだけだった。使えない。

しかし三人寄らば文殊の知恵というのは本当だったらしい。奴らはしばらくこそそそと話し合った後、私に進言して来た。新しくモンスターを作りだしたらどうか? と。

どうやらモンスターを虐め倒して……じゃなかった、躰をしている間にレベルが上がっていたらしく、モンスター合成の技が使えるようになっていた。

と、いうわけで、私はモンスターを造った。その名もセイチヨウタスケルモンスター、略してセーター。ネーミングセンスがないのは百も承知だ。このモンスターはその名の通り、植物の成長を助ける能力がある。ついでに言うとうと植物の世話もやってくれる。なぜならば自分するのが面倒くさいから。こういうのを下僕にやらせるのも魔王の醍醐味だ。私はそのモンスターに頼んでハゲ山に植物を植えさせた。ほとんど果樹である。無論私が食べるためだ。下生えをすべてベリー系にしたかったのだが、足元がトゲトゲするので勘弁して下さいとセーターから言われて諦めた。根性がない奴だ。親の顔が見てみたい。しかし採れたての果物が食べたい私としてもトゲトゲの山を歩きたくはない。といっても野望を諦めたわけではないので、現在でもセーターに棘のない木イチゴを作らせている。しかし品種改良の道はまだまだ遠いとのことだ。

そついうわけで、あっという間に三か月が経過した。ハゲ山は多少貧相ではあるが、緑あふれる山となった。三か月では驚異の成長

つぷりだ。流石は私が作ったセーター。そのころにはセーターは仲間を増やしてセーター三十号までいた。そして奴らは妙にやる気にみなぎっており、うちの周りだけでなく村全体の山の世話をしだした。生みの親と違ってマメな奴らだ。なんにせよ、自然が豊かになったのは気分が良かった。

そして三か月目となって、小さな変化があった。

リコの態度が柔らかくなってきたのだ。食物を持つてくる際視線を合わせてくれるようになったり、挨拶をしてくれるようになったり、村の近況を知らせてくれるようになったりもした。

どういつ風の吹きまわしかと最初は首をひねったものだったが、友好的なら構わないかと思って気にしていなかった。

そして一つの転機ともいえるべき出来事が、魔王に就任して五ヶ月目に起こった。

数日、雨が降り続いていた。私は雨の日は外に出かけられないので、もっぱらモンスターに新しい芸を教え込むことにしている。趣味と実益を兼ねた素晴らしい時間の潰し方だと思う。モンスターたちは嫌がるが。

狸に似たモンスターに額に葉っぱを載せて化けるという様式美を教えていた時だった。私がウルフと呼んでいる狼型モンスターが勢いよく室内に入ってきた。様子が尋常ではない。

奴はひどく焦ったように報告した。なんでも、私の居城の北部にある山が土砂崩れを起こしそうなのだという。

しかし私は単なる弱小魔王である。土砂崩れを食い止める力など持っていない。しかも奴の言うあたりならば、私に被害はない。

「あっそう、じゃあみんなその辺には近付かないようにね」

私がそう言うと、ウルフは短く唸った。しばらく考え込んでいたようだが、やがて重々しく奴は言った。あそこが崩れたなら、新しく作った私のブドウ園は壊滅だろうと。

私はモンスターの召集をかけた。

十分としないうちに私たちは現場にいた。幸い崩壊には至っていなかったが、パラパラと小石が降って来ている辺り、秒読みなのだろう。少し崩れるくらいかと甘く見ていたが、詳しい報告を聞いてみれば山津波レベルになるだろうということだった。

そこからの私は頑張った。獅子奮迅の働きだったのではないだろうか。

まず植物系モンスターに命令して、土石流が押し寄せてくるであろう場所に根を下ろさせた。土石流を死ぬ気で止めろというわけだ。一部の植物系モンスターには山の上に行かせ、セーターと協力して根を張ってもらった。当社比五倍の成長速度になるはずだ。上から根っこを張っていくことで少しでも崩れる土砂を減らしたかった。

時間は限られていたが、やらないよりましだ。風を操るモンスターを複数使い、山に降る雨を四方に散らした。気持ち程度ではあるが、きつと効果があると信じたい。

力持ちのモンスターを使って、植物系モンスターの背後に土石流を止める堰を造った。即席なのでお粗末極まりないが。植物系のモンスターは自分たちの前に作ってくれと不満を言っていたが、あんたらが一番頼りになる堰だと言ったら何故か機嫌を直した。

そうして小一時間、不気味な地鳴りがした。私は鳥型モンスターに乗って上空へと避難した。飛べないモンスターたちも散り散りに逃げだしていた。

薄暗い中でも、山が崩れるのが見えた。上空から見たそれはひどく現実離れた光景だった。緑色の地面がずるずると移動し、茶色い地面が増えていく。緑色だったそれはやがて茶色に変わり、猛ス

ピードで斜面を下っていく。それまで地面にどっしりと生えていた植物も、圧倒的な質量をもったそれに抗えずなぎ倒され、飲みこまれていく。

これはもしかしたら下にいるモンスターは全滅するかもしれない、と怖くなった。

と、同じく空を飛んでいたモンスターが地面に向かって何体も下降するのが見えた。その背には別のモンスターが乗っている。

何か遠吠えが聞こえる。それと同時に地面から土の槍が突き出した。何体ものモンスターによって発動した呪文は、見事なチームワークでもって土石流の勢いの緩和に成功した。一斉に火の玉をぶつけているチームもある。モンスターたちは幾度となく土石流を追いかけてはその先に障害物を生み出し、少しずつその勢いを緩めていた。しかし止めるには至らなかった。

そして最後の砦、植物系モンスターたちの壁に土石流がぶつかっていった。メリメリという音が轟音の中からでも聞こえてきた。私は息を飲んだ。

結果だけ言うならば、土石流を完全に食い止めることは出来なかった。ブドウ園のほとんどが土砂に埋まった。植物系モンスターたちは瀕死なものもいたが、一体たりとも死なずに済んだのは不幸中の幸いだろう。事前に防御力を上げておいたのがよかったらしい。セーターたちは力の使い過ぎでみんなバタバタ倒れた。

私は疲れて自宅のベッドで寝ていたのだが、ウルフに顔を舐められて目が覚めた。

「私の眠りを妨げるとは……」

我ながら実に魔王っぽい台詞だと思う。

起こされた腹いせにウルフの耳をいじりまくってやろうと身を起こした私は外が騒がしいことに気がついた。

着替えて表に出ると、なぜか村人たちがたくさん来ていた。私が驚いていると、村長が近付いてきた。

「魔王様、村を救ってくださいありがとうございます！」

それを皮切りに村人たちも口々に謝辞を口にする。

何のことかさっぱり分からず、目が点になった。

聞けば、あのブドウ園よりさらに下ったところには村人の家が固まっていたのだという。もし私が土石流を食い止める努力をしなれば、土砂は多くの村人の命を奪っていただろう。

私は隣りで手柄顔をしているウルフの頭を一つ叩くと、何食わぬ顔で謙遜をしておいた。

それ以降、私に対する村人たちの態度はがらりと変わった。それまでの怯えた態度はなくなり、代わりに尊敬のまなざしを向けてくるようになったのだった。

それにしても思ってもみなかった。私が近隣の魔王と友好的になったことでそれまで一線を引かれていた他の村の態度が軟化したり、モンスターが私の躰けの成果を村で発揮していたり、ハゲ山や他の山々を手入れたことでそれまで頻発していた土砂崩れがなくなっていたりということになっているなんて。

すべては私の私による私のための行動だったのだが、村の人はそうは思わなかったらしい。そして極めつけの山津波だ。なんと私がモンスターを総動員して村に被害が行かないように駆けずり回ったということになっていた。なんでもお節介なモンスターが村人に避難勧告まで出していたんだそうだ。

私も人並みの良心はあるので、それ以降積極的に村の手伝いにモンスターを貸し出したりするようになった。

まあわざわざ貸し出さなくとも、私のしごきを嫌がったモンスターが自主的に村の手伝いに行っていたんだだけでも。

そういったわけで、別にしたくてしているわけではないがこの村の環境維持は魔王の管轄となっている。もちろん私は魔王なので配下に丸投げしている。

そんなこんなで私の配下のモンスターが村中を闊歩しているわけだが、

「……元の場所に捨ててきなさい」

私はセーター五十一号に向かって言った。しかし五十一号はぶんぶんと首を振った。可哀想なことを言わないでくださいと言う。モンスターの癖に情に厚い奴だ。

関係ないが、人語をしゃべれるモンスターは少ない。大抵のモンスターは人間の言語を理解できるが、モンスターの言語が普通の人間に通じることは滅多にない。モンスターの言語を細部まで理解できるのは魔王と魔物使い、それからレベルの高い勇者ぐらいなものだろう。ちなみにセーターは人語をしゃべれない。

私は五十一号と、五十一号が連れてきた人物を見てため息をついた。

「うちは迷子センターじゃないんだから、村に連れて行きなさい」
しかし五十一号は首を振る。私のところに連れて行けと駄々をこねられたらしい。

五十一号と仲良く手をつないだ少年を見て、私は再びため息をついた。

「勇者サマ、うちの部下に道案内させないでくれない？」

私が言うと、オキという名の少年勇者サマはギッと睨みつけてきた。

「うるさい、魔王の癖に！」

「勇者の癖にうちの山で迷子にならないでよ」

私が言い返すと、勇者サマは言葉を詰まらせた。あからさまに不

機嫌な顔になる。

大人げないと言っなけれ。魔王と勇者は仲が悪いと相場が決まっているのだ。そもそもこの勇者サマは恐ろしく礼儀がなってない。社会の常識というものを覚えさせる必要がある。

「道案内をしてもらったんならまず五十一号にお礼ぐらい言いなさい」

びしりと言うと、勇者サマは頬を膨らませた。五十一号がオロオロと私と勇者サマを交互に見ている。何やら勇者サマをかばっているようだが、知ったことじゃない。

「勇者サマ、良いことを教えてあげる。魔王の城に来るってんなら、しっかり準備をしてきなさい。情報収集と地図、それから装備品とアイテムをね。着の身着のまま体当たりで魔王に勝とうなんて百年早い！」

私がキツイ口調で叱りつけると、勇者サマの目が見る間に潤んでいった。計算通りだ。

私が見るに、勇者サマはどうやら泣き虫のようである。ちょっとしたつめに叱りつけさえすれば、泣いて逃げかえるに違いない。私は子供の相手をするつもりはない。

私が余裕綽々の顔で勇者サマを眺めていると、予想通り彼の双眸からはポロポロと涙があふれ出した。非情？ だって私魔王だし。泣きながらもこちらを睨みつけている辺り、意志は強いのかもしれない。にしてはモンスターを頼っているようだが。いい加減五十一号とつないだ手を離すべきじゃなからうか。

しかし私の予想を裏切る出来事が起こった。五十一号が泣いた勇者サマをあやすように抱きしめたのである。その目は私を責めている。

しゃくり上げる勇者サマを撫でる五十一号を見て私はため息をついた。モンスターの癖にお人好しな奴だ。ここは五十一号の心意気を汲んであげよう。

「お茶飲んだら村まで送り返してね」

こんなガキンチョ勇者サマに私が殺される心配はないが、彼の将来は心配である。こんなのでいいのか、勇者サマ。数年後に思い出してベッドの上でのたうちまわってそうだな。

その後勇者サマはモンスターたちに怪我の手当てをされ、出されたお茶を飲みほし、なおかつお茶菓子をがつつり食べ、手土産までもらって意気揚々と帰って行った。また来る、なんて言っていた気がするが気のせいだろう、うん。

勇者サマが帰ってから、私は五十一号に正座をさせられ説教をされた。

山の中で何時間も道に迷って泣いていた子供を保護しないとは何事か、あんな擦り傷だらけの子供を放っておくのか、あんな頭ごなしに叱りつけてはいけない、などなど。

なんで元一般人の私よりモンスターの方が人間っぽいんだろう。謎だ。

第2戦 今日もツキバ村は平和です（後書き）

この連載ではやたらとハゲハゲ連呼してますが他意はありません。
単に作者がハゲという語感が好きなのです。

第3戦 当人以外理不尽と思わない理不尽

困ったことになった。というか、うざいことになった。

私が自室でのんびりと『週刊魔王自身』を読んでいる時だった。勢いよく入口の扉が開かれた。

「魔王！ 今日も来てやったぞ、覚悟しろ！」

先日勇者サマだった。

「来るな、帰れ」

分かりやすく端的に断ったのだが、勇者サマは元気に部屋に入ってくる。というか、私の部屋まで通したのは誰だ。セーターか、勇者サマの後ろにいるセーターが裏切ったのか。そんな甲斐甲斐しく勇者サマにお茶だのお絞りだの出さなくていいから。ミルクちゃん（ウシ型モンスター）がお茶菓子まで出している。

「あ、ミルクちゃん、それ私にとっておきのお菓子じゃん！ そんなガキにやらないで！」

せっかく隣村から貰った貴重な菓子だというのに、こんな生意気なガキにくれてやることはない。

しかし勇者サマからお菓子を奪い返そうとした私はミルクちゃんとセーターからの冷たい視線を浴びた。理不尽だ。

子供相手に大人げないですよと彼女らは言うが、そもそも招かれざる客にお茶やお菓子を振る舞っている時点で間違っている。打倒魔王を声高に宣言している相手を歓迎してどうする。実はあんたち私のこと嫌いなのか？ っていうかなんで私が悪者みたいになっているのだ。確かに私は魔王だがそれとこれとは別である。嬉々としてお菓子を食べる勇者サマが憎い。

「なんだ、魔王も食いたいのか？」

勇者サマが私の目の前でお菓子を見せびらかした。一日限定30個のスペシャルブドウ饅頭である。

私が手を伸ばそうとした瞬間、一日限定30個のスペシャルブドウ饅頭は勇者サマの口の中に消えた。

これ、ヤっちゃって良いよね？

「……ふ、ふふふ、身の程を知らない人間が……！ その身に恐怖を骨の髄までしみこませてやるわ！」

大人げないと言っなかれ。食べ物の恨みは怖いのだ。それにこう
いう台詞は魔王の専売特許だろう。

と、いうわけで、空の魔王こと空野真央と勇者オキとの戦いの火ぶたが切って落とされたのだった。世界に魔王と勇者は数あれど、
こんなくだらない理由で戦い始めたのはうちだけじゃないだろうか。

バトルは鍛錬場で行うことになった。暇なモンスターが見物に来ている。コソコソしている奴らがいると思ったら、どちらが勝つか
掛けをしているらしい。オッズを聞いたところ、私は1・0001
倍、勇者サマが100倍だった。これ、掛けとして成立してないけれど意味があるのか？ それとも大穴に賭けるばかり打ちがいるんだろうか。

と、もうひとつ掛けをしているグループがあっただのでそちらものぞいてみた。そちらでは私が勇者サマをどうやって泣かせるかという掛けが行われていた。言葉攻めで泣かせる、睨みつけて泣かせる、

勇者が泣くまで殴るのを止めない、その他諸々。泣かせないという選択肢はなかった。流石魔王の手下。考えることがえげつない。とりあえずこいつらが私のことをどう見ているのか分かったので鉄拳制裁を食らわせておいた。

さて、私たちは鍛錬場の真ん中で向き合った。勇者サマは武器を構えていた。彼の持つ武器は、確かに前回の木の枝よりはましになっていった。ましにはなっていたが、勇者サマが持っているのはどう見ても麺棒だった。そう、台所にあるあれ。パンや麺を作るご家庭ならばよく見るあれ。勝手に持ち出してお母さんに怒られたりしないだろうか。子供同士の喧嘩ならともかく、普通の戦闘で使うには長さが足りない気がする。が、私にとっては好都合だ。

「魔王、今日こそ成敗してやるからな！」

武器（仮）を構えた勇者サマが高らかに宣言する。

「絶対泣かす」

私も対抗して宣言してみた。大人げないだのなんだのミルクちゃんと言った気がしたが気のせいだろう。

審判であるモンスターが合図を開始する。私は「どこからでもかかってきなさい」と言って悠然と構える、なんてことはしなかった。誰がそんな甘つちよいいことをしてやるものか。開始の合図とともに問答無用で勇者サマに飛び蹴りを食らわせる。年齢からくる体格差もあって、全体重をかけて蹴りつければ小柄な勇者サマは軽々と吹っ飛んでいった。起き上がれない勇者サマを見下ろして、私はにやりと笑う。

途端に味方のはずのモンスターの一部からブーイングやら悲鳴やらが巻き起こった。理不尽だ。あいつら誰の味方なんだ。

とにかく、勝負は勝負だ。私は勇者サマの上に馬乗りになると腕を振りかぶった。

これは食べられなかったブドウ饅頭の分！ これは勇者サマのせいで足がしびれるくらい説教された分！ そしてこれは、前回お土

産として勇者サマにいつの間にか渡ってしまったロールケーキの分だ！

もちろん私は鬼畜というわけではないので、手加減しつつ殴っている。

二発目で勇者サマが泣いていた気がするが、気のせいだろう。

さらに四発目を食らわせようとした時、セーター五十一号に止められた。こいつはどうやら前回のこともあつて勇者に情が移っているようである。何やら怒っている気がする。怖いよ五十一号。あれ、その手に持つてのって茨の鞭じゃない？ そっちで賭けに勝って歓声上げてる奴ら、ちよつとこつち助ける。

「ま、まあ待つて落ち着いて五十一号！ これは勇者サマが私を倒す、なんて無謀かつ失礼なこと言っていたことに対して私の強さを誇示するために必要な行為で、そうでもしないとこのクソガキは違う魔王にも挑むからね？ 身の程を弁えさせるために必要不可欠なの！ よ、弱い者いじめとか憂さ晴らしとかじゃないんだからっ！」

私は早口でまくしたてる。語尾をツンデレっぽくしてみたが、私が言つても全然可愛くなかった。というかうっかり本音が漏れてしまった。

気がつけば、私の下からしゃくり上げて泣く声がある。勇者サマだった。観戦しているモンスター（メス）からの視線が痛い。あいづら無駄に母性本能豊かだ。同じ女でも私は勇者サマが不憫には思えないので彼女らの気持ちは全く分らない。

しかし視線が痛いので私は仕方なく勇者サマの上から退くと、彼を立たせた。軽く服の埃を払ってやる。しかしひどい顔だ。男なんだから数発殴った程度で泣くなよ。

私がため息をこらえていると、何体かのモンスターが駆け寄ってくる。勇者サマに向かつて。そして勇者サマを取り囲むと、みんな手に飴だのチョコだのを手に、勇者サマを慰めていた。差別だ。というかそもそも、

「ここつて普通、『流石は魔王様です！』って私を褒め称える場面

じゃないの？」

曲がりなりにも勇者に圧勝したんだからそれくらいはあっていいと思う。なんて理不尽な連中だ。

何やらウルフが鼻で笑ったので、奴の尻尾を思いつきり引つ張っておいた。今度奴が寝ている間にリボン型首輪をつけておこう。

その後、モンスターに手当てされた勇者サマはずっと泣きじゃくっていたが、やがて泣き疲れて寝てしまった。まさにガキだ。

ソファに寝かされている勇者サマを眺めながらため息をついた。このまま山に捨てたいところだが、セーターたちが怒るのは目に見ている。送り返すのが無難だろう。

とはいえ、この勇者サマは隣町の勇者である。いくらなんでも私の配下のモンスターが勇者を送り届けるのはまずいだろう。日ごろ食事以外にはさして関心のない大蛇魔王のミーミーヤンジャでも快く思わないに違いない。手間ではあるが、この勇者サマが寝ている間に村に送るとしよう。まだ日は明るいし面倒だし配下のモンスターに送らせるか。今からなら夕方までには村に着くはずだ。ついでに手紙でも書いて、あのハゲに文句を……いや、隣村の村長に直接言った方がいいのか。それともこのオキとかいう勇者サマの親御さんに連絡をした方が良さのだろうか。

そこまで考えて私は気付いた。私はこの勇者サマのことをほとんど知らない。よく考えたら彼とはほとんど話もしていない。初対面はちよつとだけ叱って終了したし、さつきも会話らしい会話もなかった。私が知っていることと言えば、彼がオキという名で、泣き虫

な勇者ということぐらいだ。あと弱い。しかし知っているのはそれだけで、彼の親の名前も家の在り処もどいう素性かも知らない。

私はしげしげと勇者サマを見下ろした。

十歳ちよつとの少年は、先ほど大泣きしたせいですっかりまぶたが腫れ上がっている。私が殴ったせいで頬も少々赤く腫れているようだ。子供相手に三発はちよつとやりすぎだったかもしれない。次回からは二発ぐらいに減らそう。むしろ次からはボディ狙いでいこうそうしよう。殴らないなんていう選択肢は私の中に存在しない。

さて、私は観察を続けることにした。飾り気のない服も、茶色くて短い髪も、このあたりではありふれたものだ。同年代の子供と比べていささか小柄で色が白い。一言で言うならもやしっ子っぽい。こんなのがどうして勇者なんてやってるんだろう。

今さらだが、勇者について説明しておこう。

勇者というのは、魔王と同じで職業の一種だ。ただし魔王と違って試験を受けるものではない。ある日いきなり認定されて『勇者』という職業になるのだ。誰からか、なんていうのは私にも分からない。不思議なことに、魔王が爆発的に増えれば勇者も爆発的に増え、魔王の数が横ばい状態ならば勇者の数も然り。別に魔王連盟がわざわざどこかに知らせているわけでもないのに、自然とそうなる。言うなれば天の意志だ。

私の母曰く、この事象は地球には存在しなかった『不自然法則』らしい。レベルや職業による特殊スキルなんていうのもそうだ。地球では職業につけば勝手に覚える特殊な技なんていうのも、目には見えないが感じられる経験値やパラメーターもなかったらしい。魔法を使える人もいなかったというのだから驚きだ。そもそも母のいた地球には魔王も勇者もいなかったんだとか。その上モンスターといえバクッキーを貪っている奴やポケットに入るものぐらいしかいなかったのだとか。151種類しかいなかったというが、それだけ

いればたくさんいると言つて過言でない気がするのだが。

閑話休題。勇者という職業に任命されたものは、それ以外の職に就くこともできるが、基本的に勇者の仕事をすることになる。モンスターを倒したり、魔王を倒したり、あとは災厄が訪れた際に原因を究明して解決したり、などなど。それらには知識と腕っ節が必要なので、オフシーズンの勇者は自らの鍛錬に時間を費やしている。場所によっては勇者を集めて雇っているところもある。基本的に勇者は優遇されるが、冷遇されることはまずない。

なぜ勇者が優遇されるかと言うと、その職業特有の特殊スキルにある。

世の中には魔王が数多くいるが、魔王を倒せるのは勇者だけだ。勇者に任命されていない人間が魔王と戦つても、なぜか止めを刺すことが出来ない。せいぜい虫の息にするぐらいだ。しかしその場合、復活した魔王が怒り狂つて報復する可能性が高いのであまり推奨されていない。ちなみに弱ったときに封印をするだけならレベルの高い魔法使いたちが協力すれば可能だ。しかしそれでも危険な賭けである。

そして原因不明の災厄。これにも勇者が対策班に加われれば、そうでない場合に比べて圧倒的に早く解決する。それはもう天のお導きとしか言えないくらいにいくつもの偶然が重なるのだ。

そして往々にして、勇者は目覚ましい成長を遂げる。二十日大根もびつくりな成長っぷりだ。鍛えれば鍛えるほど強くなり、心強い存在となる。

そういつたこともあって、どの地域でも万が一の災厄に備えて常に勇者を一定数確保してあるのが現状だ。

この勇者サマも勇者であるなら、この幼かろうとおバカさんであ

ろうと問答無用で隣村の管轄下で過ごしているはずである。その割には随分とひよろひよろしているし、そもそも近隣では評判の優良魔王の私を倒そうと考えているのがおかしい。年齢から考えるに、任命されたばかりなのかもしれない。

そういえば思い出した。確か現在隣村ではツキバ村と同様、勇者がいなかったはずである。一か月ほど前に、うちの村は勇者がいないくて不安だと話しているのを確かに聞いた。ということは、この少年はそれこそここ数週間の内に任命された勇者サマなのだろう。待望の勇者到来に喜んだ村人からおだてられて舞い上がってしまったに違いない。そういえば若干同情の余地も出てくる。

そこまで考えて、私は首を振った。こんなガキのことを考えてもしょうがない。時間の無駄だ。これだけ痛めつけて力の差を見せつけたのだから、この勇者サマも金輪際うちに来ようとは思わないだろう。とつと送り返して縁を切ろう。そうすれば二度と煩わせられることもない。

そうして私は近くにいたモンスターを呼びつけると、勇者サマを村まで連れていくように命じたのだった。さらばだ勇者サマ、永遠に。

勇者サマとの対決の翌々日、客が訪れた。ハゲことうちの村長と、隣村のうすらハゲ村長だった。

ハゲが来ること事態は珍しくない。リコと夫婦喧嘩をしたとかで

愚痴りに来たり、娘に「お父さん臭い！」と言われて愚痴りに来たり、あとはまあ村についての真面目な話をしに来たり。ちなみに最後以外はすべて追い返している。とはいっても、面倒見のいいモンスターが愚痴を聞いてやっているらしい。そういった意味ではハゲと仲が良いのはモンスターたちだろう。

対してうすらハゲとの交流は私もモンスターたちもそれほど深くない。季節の便りを交わしたり（もちろんモンスターに書かせる）たまに顔を見せに行ったりする程度には交流があるが、うすらハゲが私の家まで来るのは珍しい。大規模なモンスターの貸し出し要請だろうか。

「さっさと用件済ませてね」

私はストレートに言った。昨日モンスターたちとカードゲームを夜更けまでやっていたので眠いのだ。あいつら魔王相手だと言うのに接待ゲームができないらしい。連敗して意地になった私がモンスターたちが音をあげるまで勝負を挑み続けていたのだ。寝不足のせいで頭が多少ぼんやりしている。

それにしても、ハゲたちはやけに機嫌が良い。何かあったのだろうか。

「実はうちの村の勇者のことなんです」

うすらハゲが言う。確かこいつの名前はカミウスだったがアタマウスだったか、そんな名前だったはずだ。最初に聞いた時、見事なまでに名が体を表しているなあと感心した記憶がある。

「知ってる。少々無謀な子供のようだけど」

まあ将来性があると言えばある。何しろあの勇者サマは成長期を控えているフレッシュマンだ。今はチビでひ弱でも、数年後には驚異の成長を遂げるかもしれない。

「そちらにご迷惑をおかけしたそうで、申し訳ありません。何と言ったらよいか……」

アタマウス（だったと思う）が深々と頭を下げた。どうやら先日

の件のお詫びに来たらしい。ご苦労なことだ。

「こちらはお詫びの気持ちです。どうぞお納めください」

そう言くと、アタマウスはおもむろに包みを取り出した。どうせ適当な菓子折りかタオルセットでも持ってきたのだろうと高をくくっていたが、中から出てきたのは隣村の名物大蛇饅頭と、見るからに高級そうな茶葉、そして綺麗なティーセットだった。どうしてなかなか、私の好みの品である。

「うん、ま、あの勇者サマはまだ子供だし、私もちよっときつく対応しすぎたかも知れないからお互い様ってやつだよ」

私は鷹揚に言くと、嬉々としてお詫びの品を受け取った。アタマウスがホッとした顔で再び謝辞を述べた。

と、それまで黙っていたハゲが口を開いた。

「聞きましたよ、魔王様。なんでも勇者を一喝して、魔王の威厳を見せつけたとか。流石魔王様です」

するとアタマウスも大きくうなづく。

「ええ、オキが赤子の手をひねるように簡単に負けたとか。流石です」

褒められて悪い気はしない。うん、こいつらなかなか分かってい

るじゃないか。

「当然」

私はお茶を飲みほした。

「魔王様にとつては、勇者の相手など朝飯前ですね」

アタマウスが言う。

「当然」

あんなのに負けるわけがない。他の魔王からはヘタレだの弱いだの言われる私だが、流石にあれに負けたら大人として駄目だろう。

「当たり前だろう、カミウス。うちの魔王様を甘く見るんじゃない」
ハゲが厳しい声音でうすらハゲに言う。あれ、アタマウスっじやなかったのか。うっかり間違えていた。どっちにしろ薄いことは確かだし、口に出してないからセーフセーフ。

「うちの魔王様なら勇者を一流に育てることだって簡単なことだ。そうですよね、魔王様」

「当然」

「おお、ではご依頼の件を引き受けて下さるんですな？」

「当ぜ……ん？」

何やら雲行きが怪しくなってきたぞ。

「ありがとうございます、魔王様！ これでうちの村も安泰です！ カミウスが何度も頭を下げる。待て待て、何か嫌な予感がする。

「流石は魔王様、なんてお心の広い！」

ハゲも言う。

「ご、ご依頼の件って何だ？」

「ちよつと」

私が尋ねようとすると、隣りからすつと手紙が渡された。ミルクちゃんだった。読めということだろうか。

手紙を開いて内容に目を通す。

読んでいる最中から、眉間にしわが寄るのが分かる。懇切丁寧な口調で書かれてはいるが、要するに面倒くさいことこの上ない依頼だった。今の今まで私にこの手紙を渡さなかった辺り、ミルクちゃんたちはこうなるのを狙っていたに違いない。本気で頭を抱えなくなった。

依頼というのは、つまるところこういうことだ。

「魔王様にオキの教育を引き受けていただけるなんて光栄です！」

顔を輝かせた両村長の顔がキモい。手紙によると、私が勇者サマの教育を引き受ける代わり、勇者サマは両方の村の所属の勇者となるそうだ。それでうちのハゲまで来たというわけだ。

「ありがとうございます！ これからもオキのことをどうぞよろし

くお願いいたします！」

満面の笑みを浮かべる二人に言われ、今更違うと言えない。というか、今気付いたが柱の陰からこちらをうかがっていたモンスターたち（主にメス）が狂喜乱舞している。あいつら、どんだけ勇者サマにほだされてるんだ。

引きつった笑みを浮かべる私に、カミウスたちは今後のことについて一通り説明して帰って行った。

魔王になって早、三年。私は勇者サマの教育係となったのだった。

第3戦 当人以外理不尽と思わない理不尽（後書き）

やたらとハゲハゲ連呼してますが以下略。

第4戦 魔王の天敵登場

頭輝くシャイニングブラザーズに頼まれたので、私は勇者サマの面倒を見ることになった。といっても、勇者サマが通いで来るのが条件としている。村長たちには「毎日山を登ってくることで足腰を鍛える」と言ったが、実のところ毎日の山登りにうんざりしてとつと音を上げてくれないかと期待している。

頭がまぶしい二人組が帰ってから、私は考えを巡らせた。

いくらお子様の勇者サマとはいえ、三日ぐらいは通ってくるだろう。面倒だが私は彼を立派な勇者にするため、面倒だが、かなり面倒だが、とてつもなく面倒だが、少なくとも数日は指導する必要がある。

勇者サマは子供だ。子供に必要なのは運動と勉強だ。

そして私は運動が嫌いだ。

よし、座学中心にしよう。

そう決めた私は勇者サマの勉強を補助するモンスターを合成することにした。教材の準備や授業を押しつけるためだ。繁殖能力は低くていいが、高性能である必要がある。

余談だが、大抵のモンスターはつがいであれば繁殖可能である。

獣型モンスターはその代表だ。私の作ったセーターは一応人型なので、これまた繁殖可能である。確か十四号などは三角関係の末に、生まれた時期が同じ幼馴染の十三号を振って、年下の生意気ボーイ二十三号とくっついて子供を作っていたはずである。十三号は直後に失踪したが、それから割とすぐに村の南の山に謎のバラ園ができたらしいので恐らくそこにいるのだろう。モンスター間でもこういうたドロドロがあるのがなんともやりきれない。

閑話休題、なんかかんやで上手くいき、新しいモンスターが生まれた。

ベンキョウジョシユモンスター、略して、

「ベンジョ、でいいか」

私が呟くとモンスターが猛然と首を横に振った。ベンジョという名前が嫌らしい。生まれた直後から創造主に逆らうとはなかなかの反骨精神だ。こいつは将来いっぱしのモンスターになるに違いない。とにかく、周囲のモンスターの同情交じりの反対もあり、名前は別のものに変えることにした。ベンジョというのもある意味レトロで非常に親しみやすい名前だと思うのだが、モンスターたちはそうは思わないらしい。生まれたモンスター自身が最終的には殺気混じりで睨んできたので私が折れることにしたのだ。

結局、モンスターの名前はジョシユになった。助手ではない、ジョシユだ。アクセントに違いがある。その辺はジョシユ自身に何やらこだわりがあるらしい。眼鏡をかけているから博士とかにしたらよかったと思わないでもない。

さて、セーターも人型だがジョシユも人型である。見た目的にはインテリ眼鏡、もしくははやし。オプションの眼鏡は私が与えた。その方が頭が良さげに見えるからだ。ジョシユは私が作ったモンスターの中で一番人間に近い形をしている。大変頭が良く、珍しくも人語を話せるモンスターである。

前回圧勝だったあの勇者サマとの戦いで私のレベルが上がっていた。子供をいじめただけでレベルが上がるというのもなんとなく罪悪感がないでもないが、喧嘩を売ってきたのはあちらなので深く考えないことにしている。

それはさておきレベルが上がったので、合成したモンスターの能力も上げることができたようだ。主に能力のパラメーターを知能に振ったため、頭はいいが武ばったことには向いていないモンスターである。ついでに言えば、現在生まれたてのジョシユは頭はよくと

も持っているのは基本的な言語能力だけ、他の知識はゼロの状態なので、先代魔王の蔵書でも読ませて勉強するように命じた。私が作りだしたモンスターが私の知らない知識をあらかじめ持って生まれるというのはあり得ないのである。そのところ、非常に不便だと思う。とかく、地下の図書館は先代から引き継がれてかなりの量の蔵書がある。カビ臭くも膨大な知識の蓄えられたそれらを、私は面倒くさいから自発的に読む気はしない。こういうのは勉強ができる奴が読むべきなのだ。

翌日の勇者サマとの勉強会の準備を任せた私は、さっさと寝ることにした。モンスター合成って疲れるんだよね。

翌朝、鳥のさえずり以上につるさい声が私の眠りを妨げた。

「魔王ー！ 来てやったぞー！ とつとと起きろー！」

どんと寝室のドアを叩く音がする。言わずもがな、勇者サマだ。

日々の二度寝が日課の私は朝から機嫌が急降下していた。宵っ張りの朝寝坊で構わないじゃないか。二度寝最高。勇者なんていくらでも待たせてやる。だって私魔王だし。

と、思っていたら寝室の扉が開いた。入ってきたのはジョシュだった。

「魔王様、おはようございます。あなたには勿体ないくらいの気持ちの良い朝ですよ。そんな寝ばけた顔でぐずぐずしてないでとつと起きて下さい。だらしのないあなたのせいで私の仕事が始められないじゃないですか」

一瞬何を言われたのかさっぱり分からず私はジョシュを呆然と見つめていた。一朝一夕ほどもない、たった一晚でどうしてこうなった。言葉は一応丁寧語だが慇懃無礼、むしろ表面上の敬意すら払ってもらってない気がする。なんでいちいち言葉の中に私に対する悪口が混ざっているのか。なんでだ。敬語キャラで勉強ができる奴といたら気が弱い優男だって相場が決まってるんじゃないのか。眼鏡か？眼鏡キャラだから腹黒っぽくなってるのか？敬語と眼鏡の組み合わせが悪いのか？

私が悶々と悩んでいる間にジョシュはさっさと部屋のカーテンを引いて窓を開けている。

ジョシュはすたすたと私のところに歩み寄ってくると、無表情に私を見下ろした。

「なに間抜けツラさらしていらっしやるんですか？時間の無駄ですから早く顔を洗って準備してくださいね。お客様を待たせるなんて大人にあるまじき行為ですよ」

無表情で言うな無表情で。怖いだろうが。

「そーだそーだ！」

戸口のところにいる勇者が同調する。クソガキめ。っていうか時間を指定しなかった私の手落ちか？いやしかし散々ボコってから間もないのにまさか魔王の居城（というほど城っぽくないが）に朝っぱら来るなんて誰が想像できるものか。

「分かった。準備するからあんたたちは出て行きなさい」

なんとかそれだけ言うと、ジョシュを戸口の方へと押し出す。

扉を閉めようとすると、

「くれぐれも我々を追い出してから二度寝しないでくださいよ？」と釘を刺された。

人の思惑を読みやがった。これだから頭のいい奴は。

十数分後、用意を整えた私は部屋を出た。いつもの私のくつろぎ空間では勇者サマが椅子に座って朝食を待っているところだった。

「魔王、遅いぞ！ ご飯が冷めちゃうだろ！」

私に気付いた勇者サマが言う。いやいやいや、おかしいだろう色々々。

「なんで勇者サマと一緒にご飯食べなきゃいけないのよ」

頭痛をこらえて言えば、勇者サマは胸を張って言う。

「そんなの、僕がご飯を食べてきてないからに決まってるだろ！」

「胸を張って言うことじゃないからそれ」

こんちくしょう、親の顔が見てみたい。なんだこの強引グマイウエイな子供は。

「明日からは来る時間を決めておいたほうが良いでしょう。魔王様の準備もその時間に合わせてさせますし、食事をなさるなら準備も必要ですからね」

くいつと中指で眼鏡を押し上げながらジョシュが言う。その表情はトコトン無表情だ。っていうか、さつきさりげなく準備をさせるって言わなかったか？ 仮にも私は魔王、つまり上司のはずなんだから。

「ジョシュ、一晩の間にあんたの身の上に何が起こったのさ」

私が啞然として言えば、ジョシュは再び眼鏡を押し上げる。

「地下の図書室で勉強してこいとおっしゃったのは魔王様でしたが、もうお忘れですか？」

嫌味ったらしい言い方だ。しかしその際それは置いておくとして、

「最初に読んだ本のタイトルは？」

「馬鹿犬のしつけ方、という本でしたが」

それが何か？ とでも言うようにジョシュが私を見る。問題大アリだ！ っていうか先代魔王はなんでそんな本を持ってたんだ。犬飼いたかったのか？ というか、

「私は馬鹿犬と同列か！？」

こんちくしょう、最初の本だけでも私が選んで渡せばよかった！

『偉大なる魔王賛歌』みたいな。あるか知らないけど。

ちなみにこの時私は知らなかったのだが、その次にジョシュが読んだのは『駄目な上司のスパルタ操縦法』という本だったらしい。先代魔王の蔵書目録を一度確認する必要があるそうだな。っていうか先代魔王がその本を読んだのか？

「はは、まさか魔王様が犬と同列なわけないじゃないですか。犬よりは多少ましだと思ってますよ」

ジョシュが無表情に声だけで笑う。っていうか犬より多少って魔王どころか人間としての尊厳も危ないじゃないか。

「おい、魔王。腹減ったんだから早く席に着けよな！」

私たちの会話がなかなか終わらないことに痺れを切らした勇者サマがフォークの柄でテーブルを叩いた。

次の瞬間、ピシッと鋭い音がした。

「痛っ！」

勇者サマが手を押さえて悲鳴を上げる。

「テーブルを叩いてはいけません。お行儀が悪い」

ジョシュの手には、先ほど勇者サマの手を叩いたであろう鞭が握られている。いつの間にそんなもの持ってたの、ジョシュ。

「あなたを立派な勇者として教育するのが私の務めです。厳しくいきますので、そのつもりで」

その宣言はものの見事に有言実行、それから勇者サマに対するジョシュの厳しい指導が始まった。

……そしてなぜか私も立派な魔王になるべく厳しく指導され、かなり後悔することになるのだった。

モンスター合成は計画的に。

第4戦 魔王の天敵登場（後書き）

魔王の天敵登場。勿論ジヨシュのことです。

第5戦 まずは基本の勉強

朝、私はゆっくりと身を起こす。

枕元にあつた糊のきいた服に袖を通す。皺ひとつない、綺麗な服だ。髪もきつちり櫛を通す。

身支度を整えると、自室を出る。近くにモンスターがいたので私は笑いかけた。

「おはよう、いい朝だね」

おはようございますと頭を垂れるモンスターに、私は鷹揚に笑った。

「そんな改まらなくていいよ、顔を上げて。むしろいつも世話になっている私がお前たちに頭を下げなければならんだから」

モンスターが感極まったように私を見つめている。私は微笑み返してから歩き出す。

食堂につく。勇者サマが来ていた。ぴしりとしたシャツにベスト、髪もしっかりと整えている。

「おはよう、勇者サマ。いい朝だね」

「おはよう魔王。ああ、爽やかな朝だ。今日もあなたに会えて光栄だよ」

「はは、私こそ未来ある勇者サマと朝食を共に出来るなんて光栄の極みだ」

私たちは笑顔を交わすと、対面の席についた。ほどなく、湯気の立った食事が運ばれてくる。美味しそうな食事が山ほど出てきた。

「お前達、先に食べなさい」

皿をじっと見ていたモンスターに私は言う。

モンスターは遠慮したが、私はにこりと笑う。

「私はいい。お前たちが幸せなら私も幸せ。一人で食べるよりもみ

んなで分けて食べた方がおいいでしょ？」

しばらくモジモジとしていたモンスターたちだったが、勇者サマも一緒になってすすめたのもあって食べ始めた。

「皆で食べるご飯はおいしいねえ」

「あはは、確かにそうだな、魔王」

私と勇者サマは明るく笑みを交わした。

ああ、なんて平和なんだ。

なんて思うわけがない。

「……悪夢だ」

私はガバリとベッドから身を起こした。

どうやらジョシュのスパルタな勉強に影響されておかしな夢を見てしまったらしい。

あんなもん、悪夢以外何物でもない。あまりの気色悪さに鳥肌が立っている。

と、ドアの外から喧しい声がする。どうやらまたぞろ朝駆けしてきた勇者サマがやかしてジョシュに教育的指導を食らっているらしい。

魔王だが私も人の子、鞭を食らいたくないのですささと身支度を整えて部屋を出た。

「おはよう、ジョシュ」

私は声をかける。ジョシュは鞭を片手に勇者サマを正座させて説教をしていた。勇者サマは涙目だった。腕にいくつかミミズ腫れができている。

昨日といい今日といい、どうして泣きそうな目にあうと分かって

いて来るのか、このお子様は。このちんちくりんの勇者サマはよっぽどの鳥頭なのか、そうでなければどMなのだろう。

そもそも勇者は日々辛い修行に耐え、荒野やら洞窟の中やらさまよいながらモンスターと戦い、拳句多くの人の期待やらを受けて失敗の許されない使命を全うしなければならいんだからそれぐらいの性格でなければ務まらないのだろう。なぜか死ねないし。ついつい人の家のタンスやら壺の中やら漁らなきややってられないくらい荒むのもうなずける。なんとも嫌な職業だ。面倒事は部下にすべて押しつけ、やることと言えば日長一日暇つぶしという魔王とはえらい違いである。あれ、もしかして魔王って超優良職業？

「おはようございます、魔王様。今日は昨日よりはましな時間ですね。少しは真面目にする気になりましたか？ 明日からもこの調子でお願いしますね。でもそのみつともない寝癖は直して下さいませんか、見苦しいですよ」

こんちきしょう。殴りたい。相変わらず表情が欠如した面をすごく殴りたい。多分私負けけるけど。宵っ張りの朝寝坊、基本的に食っちゃ寝しかしないぐーたら生活魔王の弱体化なめんな。

髪を撫でつけながら私は食事の席に着く。私が来たことで勇者サマに対する説教が終わったらしく、勇者サマも真っ赤な顔で席に着いた。

食前に感謝の言葉をそれぞれが言う。勇者サマは神に対して、私は食物自身に対して。

そしてそれぞれ食事を食べ始める。モンスターに分け与える？ そんなことするわけがない。そもそもこれは私用の食事であって、他人というか他モンスターに与えるなどと言語道断。

食事の最中もジョシュの目が光る。やれ姿勢が悪いだのやれピーマンをより分けるなだの、やれよく噛んで食べるだの口うるさい。私の母より厳しい。といっても、私の母の場合私が少しでも残そうとしたら皿ごと没収して自分で食べていたのだが。おかずは大抵一

品しかなかった。その後は主食のパンのみかイモのみ、時々米を食べることとなる。うちは貧乏だったのだ。ひもじい思いをしたくなくて、私は嫌いなものでも頑張って食べた。現在の私が食い意地が張っているのもその辺に起因すると思う。

勇者サマの食べっぷりを観察してみる。好き嫌いがあるらしく、ニンジンをしめつ面で食べていた。やはり子供だし、野菜が苦手なんだろう。まずそうに飲みこんだあとはベーコンを嬉しそうに食べている。勇者サマは嫌いなものと好きなものを交互に食べて誤魔化す口らしい。それをハラハラと見守ってるモンスターたちは暇なのか。暇なんだな？ 仕事押しつけてやろうか？

それはさておき、うちはいつも私が起きてくるのが遅い上に寝起きが良くないために朝食は軽いものになっている。が、今日は勇者サマが来るということでモンスターが張り切って準備をしたせいでもより三割増量である。増えた三割は野菜だ。勇者サマ、頑張れ。これはきつとモンスターからの愛の鞭。私はピーマン以外は好きだからいいけど。頑張れば食べられない量じゃないし。あ、でもあとセロリも嫌い。

さつさと食事を食べ終えた私だが、勇者サマはもたくさとまだ食べていた。どうやら思ったより嫌いな食べ物が多かったらしい。それにしても作ったモンスターが気の毒だからあんまりはつきり態度に出してやるなよ。

と思つたら、厨房の方から雄叫びが聞こえてきた。昼食こそは！
みたいなことを言っている。

「何かあったの？」

ジョシュに目を向けて見ると、相変わらずの真面目腐った表情で答えてくれた。

「子供の好き嫌いをなくするのが大人の勤め、だそうですよ」

「……料理人魂に火が着いたわけね」

何回目になるかは分からないが、やはりこいつらは勇者サマに対して過保護すぎると思った私だった。

朝食の後はお勉強である。不本意ながら私も参加している。

「はい、では昨日の続きから始めましょうか」

ジョシュが教師然とした調子で言う。

私たちは勉強部屋と呼ばれる部屋にいた。この勉強会が始まるまで、私は一度も来たことがない。というか、存在すら知らなかった。だって私勉強しないし。勉強部屋は黒板と机があり、うずたかく積まれた資料やら地図やら様々なものが置いてある部屋だ。

「まず、レベルを上げるにはどうしたらよいですか？」

「はいっ！」

勇者サマが勢いよく手を上げる。無駄に元気だ。

「修行する、モンスターを倒す、人を助ける！」

「その通り」

ジョシュがうなづく。

「勇者だけでなく、一般人や我々モンスター、それに魔王様でも経験値を貯めることはできます。修行は堅実ですが経験値が低く、強いモンスターを倒せば高い経験値が得られますが命の危険があり、人助けの場合は突発的なこともあり内容によって経験値にムラがあります」

淡々とした声音でジョシュが解説をする。

「私の場合、倒さなくても経験値が入るけど？」

モンスターを虐め倒した……じゃなかった、躰けたときにレベルが上がったのだ。

ジョシュは眼鏡を押し上げた。

「それは魔王様にとっては修行にカテゴライズされたのでしょうか。また、倒すと言っても種類があります。相手を消滅させると、気絶させること、降参させることと様々です。もちろん経験値

にも反映されます」

要するに、相手を殺せば高い経験値が、そうでなくてもある程度の経験値が得られるわけだ。どんな経験も無駄にはならないってか？ 何の訓話だか。

「なあ、モンスターって死んだらどうなるんだ？」

お気楽お子様ノー天気な勇者サマが尋ねる。私は顔をしかめた。

「モンスターに死ぬという表現は似つかわしくありません」

ジョシュは眉ひとつ動かさない。大した鉄面皮だ。

「じゃあ死なないのか！？」

勇者サマが目丸くして驚く。無神経な奴だ。

ジョシュは一瞬考えたようだが、やがて眼鏡をくいつと押し上げて喋り出した。関係ないけどこいつのこの癖、なんかむかつく。

「モンスターは一定の条件を満たせば消滅します。逆を言えば一定の条件を満たさなければ何度でも甦ることが可能です。しかしその場合、それまでの記憶の蓄積は消えた上に弱体化しますので、新しく生まれ変わると考えていただいて結構でしょう」

ジョシュはモンスターの生死の仕組みについての明言を避けた。

賢明だろう。

モンスターには核というものが存在する。モンスターによって存在する場所が異なるが、人間で言う心臓のようなものだ。しかし人間と違うのは、モンスターには核とは別に心臓が存在するということだろう。心臓が破壊されればモンスターは活動を停止する。脳を破壊されても同様。そうするとモンスターの体はまるで石のように硬化し、砕け散る。これが世間一般の考えるモンスターの死だ。

しかし、実はこの時点でモンスターは完全に死んだわけではない。核が無事ならば、それに内蔵する魔力を使って復活するのだ。核にはモンスターの遺伝子とでも言うべきものが刻み込まれており、同

じ種族のものが再び誕生する。文字通り、同じ種族のモンスターが誕生するのであり、一度死んでしまったモンスターが生き返るわけではない。

逆を言えば、モンスターの核を破壊されてしまえば一発でアウトである。モンスターは一瞬で消滅し、復活も出来ない。

さらに言うならば、核の中に復活するだけの魔力が残ってないと復活できない。復活しようとした核はエネルギーを放出しきり、砕け散ってしまうのだ。そのため私なんかは弱ったモンスターにちよいちよい魔力を与えたりする。戦力が減るのは防ぎたい。また、核だけの状態でも魔王が魔力を注げば即座にモンスターは再生する。

ちなみに考えたくないが、魔王が死んだ場合は問答無用で消滅する。復活なんて芸当ができるのはほんの一握りの強大な魔力を持った魔王だけだ。私のような弱小魔王が復活できるわけがない。そのため私は日々死なないようにしているのである。

ふと違和感に気付く。勇者サマの雰囲気が変わったのだ。

「どうかしましたか？」

ジョシュが声をかける。勇者サマはうつむいていた。しばらく勇者サマは黙っていたが、やがて小さな声で呟いた。

「……人間は死んだらどうなるんだ？」

私とジョシュは顔を見合わせた。

なんでこんなことを私らが教えなきゃいけないんだ。こういうのは普通親が教えるもんだらう。

ジョシュはしばらく勇者サマを見ていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「死んだら終わりです」

実に簡潔かつ明瞭な答えだ。

「ジョシュ、あんた子供相手なんだからもうちよつとオブラート包

めば？」

私が呆れて言えば、ジョシュはしばらく考えたようだったが、「死んだ人間で生き返ったのは勇者だけです。他の人が生き返ったという話はありません」

包む気ゼロのようだ。勇者サマの体がびくりと震えた。

「……勇者は生き返るのか？」

恐々とした調子で勇者サマが顔を上げた。なんだ、そんなことも知らなかったのかこのガキンチョは。

「魔王様はご存知ですよね？」

まさかここでお鉢が回ってくるとは。思わず腰を浮かせて逃げの体勢をとった。

「私に言えと？」

「ええ、お願いします」

言い方こそ丁寧だが、面倒だから私に押し付けたいに違いない。

「たたく、とんでもない性格だ。一体誰の影響なんだか。」

ノーコメントを貫き通したかったが、ジョシュの無言の圧力に耐えられなくなった私は口を開いた。

「普通の人間の体は死んだら朽ちる。止まった心臓が動き出すことはないし、祈っても起き上がったたりしない。でも勇者の場合、体が朽ち果てることがない」

これは知り合いの魔王に聞いた話だ。

「死んだ勇者の体は不思議な光に包まれ、魔物が害をなすことはできなくなる。その状態の勇者は周囲の力を吸収するから魔物の傍に置くのは邪魔。だから魔物たちは棺桶に勇者の死体をつっ込んで街に送り返す」

そういえば、棺桶に突っ込まれた状態で洞窟の奥深くに閉じ込められたり土に埋められたり水に沈められたりする勇者も結構いるらしい。それでも時間が経てば復活して出てくるんだとか。本当に人間なのか、勇者サマ。

知り合いのオカマ魔王は言っていたものだ。

「もーすつごいのよ！ 一度怖いもの見たさで放っておいたんだけどねー、バンバンこっちの力吸われちゃうのよー。それでも我慢してたのよ、アタシ。でも怖くってー。アタシちゃんとダーリンの腕もいで食べちゃったのに、徐々に生えてくるのよ！ トカゲのしっぽじゃないのよ、人の腕！ 人の腕が生えてくるんだから！ ダーリンは人間なのによ！ それ見てたらさすがにダーリンでも怖くなっちゃって、急いで街に送り返しちゃったわよ。アンタも勇者やっちゃったたら、変なこと考えずに街に送り返しちゃった方がいいわよー」

ダーリン、というのは彼にしょっちゅう挑んでくる勇者のことである。連戦連敗らしいが、懲りずに挑むあたり勇者どM説の裏付けになりそうだ。

「お、送り返された勇者はどうなるんだ！？」

おや、勇者サマが食いついてきた。なんだか顔色が悪いぞ。なんだかこういう純真な子供に嘘を吹き込みたいと思ってしまふのは大人の性だろう。

私はにやりと笑った。

「送り返された勇者はね、バラバラになった体を縫い合わされて、足りない部分は粘土で補って元の形に戻すんだよ。それから祭司が三日三晩祈って生贄の子羊ささげて生き返らせるの。生き返った勇者はしばらく激痛のせいで動けないんだけど、その状態で直るまでくらい教会で祈りをささげられるんだよ」

「う、うそだっ！」

勇者サマが青ざめた顔で叫んだ。

「嘘じゃないよー。勇者サマも心当たりあるんじゃない？ 突然教会の説話が中止になったり、立ち入り禁止になったことない？ あれは勇者の体を縫い合わせたり生贄の子羊の血を掛けたりしてるんだよ。死ねば死ぬほど体が土粘土になっっていくんだってさ」

私が言えば、勇者サマは言葉を詰まらせた。教会の件で心当たり

があるのだろう。怖がつてる怖がつてる。いい気味だ。

「そ、それじゃあ俺もいつかは粘土になるのか！？ 粘土だったら水に溶けるだろ！？」

「そうそう、だから一度死んじゃった勇者はお風呂に入れなくなるんだよね」

「お風呂にも入れないのか！？」

勇者サマの悲痛な声が響く。

「そう。雨に降られても解けちゃうしね」

と、空気を切り裂く音がした。

「いったっ！ ジョシュ、何すんの！」

私の手にミミズ腫れが出来ている。ジョシュの鞭を食らったのだ。「魔王様、悪ふざけが過ぎますよ。いたいけな子供をいじめる自分が情けなくなりませんか？ それとも魔王様はそのなりで中身は彼と同じくらい幼いのですか？」

冷ややかなまなざしを向けられて私は不満げに肩をすくめた。ちよつとくらいいいじゃないか。

「や、やっぱり違うのか！？ 違うよな！」

勇者サマが勢い込む。ちつ、もうちよつと楽しみたかったのに。

「……魔王様が言ったことはすべてが嘘だというわけではありませんん」

「え……？」

勇者サマがピシリと固まる。なんだ、ジョシュも人が悪いな。知ってたけど。

しかしここの蔵書にはそんなことまで記した書物があるのか。侮りがたいな、先代魔王。

「勇者が死ぬ時は、大抵ひどい状況です。その体が損壊していることも少なくありません」

首が千切れそうになってたり腕がもげてたり皮膚が焼け焦げてたり内臓出てたりね。

私は未だかつてこの生意気なガキンチョ勇者サマ以外に挑まれた

ことがないので分からないが、他の魔王の話を書く限りそんな感じらしい。二度と刃向わないように魔王に対する恐怖を骨の髄まで叩きこむのだそうだ。勇者と違って一度死ねば終わりの魔王は必死である。私はそれほど強くもないし、グロテスクなのは好きじゃないからひたすら敵前逃亡で行こうと思う。

「しかしそれを粘土で補ったりはしません。棺桶に入れたまま教会の棺桶に入れられ、生き返るまで安置されるだけです。一日に一度くらいの頻度で祭司が祈りを捧げますが生贄はありません」

粘土でないというだけでも安心したのか、勇者サマがほっと息をついた。

「勇者の傷が八割直ると目が覚めると言われています」
そう言うと、ジョシュは一つ咳払いをした。

「ただ、我々モンスターと違って勇者の復活の条件は分かっています。ごく稀に復活できず朽ちていく勇者もいるそうですが、何が原因なのかというのは確定されていない状況です」

その言葉に勇者サマの体がこわばる。この勇者サマは本当に分かりやすい。

「ま、命は大事にしましょうってことだね」
私は簡潔にまとめた。ジョシュは深々とうなずく。

「その通りです。無謀な挑戦も結構ですが、死ぬほどの苦しみを味わいたくないのならば自重することです」

その言葉に勇者サマはすっかり怯えてしまったようで、私の方をちらちらと見ている。このガキ、さっきまで散々好き勝手してのびのびしてたくせに今頃怯え出すか普通。この勇者サマ、もしかなくとも底抜けのおバカさんだ。最初から知ってたけど。

私はため息をついた。

「私に子供を殺す趣味はない」

その瞬間、勇者サマがぱっと表情を明るくした。まるで犬のような反応をされ、悪戯心が沸いた。

「でも子供をいじめる趣味はある」

途端に勇者サマが震え上がった。何これ面白い。

「生意気なガキにキツイお灸据えるって楽しいよねー……」

私が不気味に笑うと、勇者サマがさっとジョシュの後ろに隠れた。だからなんで勇者サマはそんなにうちの部下に頼るんだ。そいつら私の部下だから。魔王の部下だから。

勇者サマを見下ろしたジョシュは私の方を見ると大きなため息をついた。

「魔王様、今年おいくつでしたっけ？ ああ、数えることもできないくらい幼くていらっしゃるんですか？ それとも若者をいじめることにしか生き甲斐を見いだせないような高齢になられたんですか？」

この性悪嫌味野郎め。

「魔王ならこれくらい性格悪いのが当たり前でしょうが！」

私が膨れて言えば、ジョシュは鼻で笑った。

「まだ幼い子供にこういう意地悪するのは性格悪い、ですか？ それを言うなら子供じみた性格でしょう。魔王様は語学の練習もする必要があるかもしれませんね」

ジョシュと私の間にバチバチと火花が散る。私とジョシュとの一時間に及ぶ舌戦の始まりだった。

ちなみにそもその原因だった勇者サマはミルクちゃんがお茶とお菓子を持ってきたのでそちらへ行つてくつろいでいた。

私があることに気付いたのは勇者サマが二人分のお菓子をすっかり食べてしまったあとである。

第6戦 新たなる軽めの試練（前書き）

今回は短めです。

第6戦 新たなる軽めの試練

陰険眼鏡との戦いの幕が明けてから二週間。

予想外に勇者サマは毎日やってくる。そして私のおやつは日に日に減っていく。そのうち私のおやつがなくなるんじゃないかと心配だ。

さて、ある程度予想していたがついにこの時がやってきた。

「せんせー、勉強ばかりでつまんない！ もつとどばーっとレベル上げたりとかかけーのはないの？」

子供が学校でもないのに二週間も座学で我慢できりや上等だろう。私だったら三日と経たずにトンスラしてる。

ジョシユは眼鏡を押し上げながら答える。

「勉強も修行の一種です。確実に経験値は上がっていますし、能力も上がっていますよ」

「やー、でもそろそろ体を動かすのでもいいんじゃない？」

勇者サマの肩を持つわけではないが、私も言う。

ぶっちゃけて言うならば、一週間も座学に付き合わされてかなり疲れているのだ。他でもない私が。居眠りしたら鞭で叩かれるし、答えを間違えれば冷たい目で見られる上にお小言を食らう。いや、教えてもらってる立ち場としちゃ当り前なだけどさ。でも私は勉強したいなどと言った覚えは一度もない。

そして何より面倒くさいのだ。だって私は元々宵っ張りの朝寝坊、自分がしたいことだけをする魔王。机に向かってノート取ってる奴なんて魔王じゃない。

どうせやるなら勇者サマが実技でひいひい言っているのをソファにでも寝転がりながら腹を抱えて笑いながら見ていたいのだ。だって私魔王だし。

「若いうちは体も鍛えやすいつて言うしさ」

私が言えば、ジョシユは実に胡散臭そうに私を見た。

「ものは言いようですね」

どうやら私の思惑はすっかりお見通しらしい。これだから頭のいい奴は。

しばらく考えていたようだが、やがてジョシユは厭味つたらしく咳払いをした。ちつ、陰険な奴だ。ハゲろ。

「とはいえ、お二人の言うことも一理あります。そろそろ実践も混ぜた方がいいでしょう」

その言葉に勇者サマが小躍りする。

部屋の後ろにはセーターやミルクちゃんたちがいてその様子をほのぼのと眺めている。どこの授業参観だ。お前ら仕事しろ仕事。

「ただ仕込みが必要なので、実践は明日からです。今日の内に準備しておきますよ、魔王様が」

「……………は？」

私がぽかんと口を開けると、ジョシユは無表情に私の目を見た。

「言いだしっぺは魔王様でしょう？」

いや勇者サマだろう。

「よろしくな、魔王！」

魔王によりしく頼んでいいのか、それでいいのか勇者サマ。

翌日に備えて勇者サマは早めに帰らせた。私とジョシユは簡単な打ち合わせをして、勇者サマの実技に備える。といっても、ジョシユの出した企画が面白そうだったのでそのまま私がお膳立てしただけだ。

少しばかり余所の人に協力を仰ぐ必要があったため、方々に文を飛ばす。もともと私が勇者サマを育成しているというのは周辺の村にはすっかり広がっていたため相手も事情を理解するのが早く、ノリノリで私の要請を引き受けてくれた。今日もテストは平和だ。

そして私は仕上げの仕事、モンスター合成を始めた。といっても、

今回は一から作るわけではない。既存のモンスターに魔力をぶち込み、バージョンアップを図るのだ。普通に合成するよりは楽である。

細工は流々、準備万端整ったところで私は眠りについた。明日は長い一日になりそうだ。

翌日、意気揚々と勇者サマがやってきた。

そんな彼にジョシユはいくつかのアイテムを与えた。

一つは手紙、一つは木の棒（武器）、もう一つは瓶に入った酒。おまけとばかりに地図も渡している。

「これをアリギ村のヤトさんに届けてください」

てつきり「おつかいかよ！」とか勇者サマから突っ込みが入るかと思ったが、幸いにして勇者サマは他のことに気をとられたらしく突っ込みはなかった。勇者サマはいささかばかり不安そうにジョシユの顔を見上げている。

「アリギ村？ バークーロじゃなくて？」

「それじゃあまり意味がありませんからね」
と、ジョシユはうなずく。

ここで、ツキバ村周辺の地理関係について説明しよう。

私の支配しているツキバ村の周囲には三つの村と一つの町がある。それらがツキバ村にそれぞれ接しているのだ。

バークーロというのは勇者サマの住んでいる隣村のことだ。山に囲まれたツキバ村だが、バークーロまでの道はしっかり整備されており、人やモノの行き来も一番活発である。他の村に行くのに比べて道がなだらかというのも、また歴代の村長同士の仲がいいのも理由だ。当代のうちの村長とバークーロのカミウスも仲がいい。ハゲ同士気が合うのだろう。ツキバ村で隣村といえば、このバークーロのことを指す。

そして隣村とツキバ村の両方に接しているのがアリギ村である。こちらはうちと違って溪谷や岩山の多い地域だ。二つの村をつなぐ道はもとの険しさもあり、少しか荒れている。言うなれば勇者サマの家からうちに来るまでは散歩道、うちからアリギ村への道は登山道なのだ。ちなみに私は徒歩では絶対行かない。筋肉痛になるから。

たしか隣村とアリギ村は隣り合っているが、行き来は少ないはずである。こちらやはり間に険しい溪谷が横たわっているのだ。二つの村をつなげているのは古い橋である。両村の子供たちが勇気を試すためにその橋を一人で渡るというのだから、どれほどボロいかわかるというものだ。

まあそういったわけで、いかにも臆病っぽい勇者サマがアリギ村に何度も行っているとは思えない。つまり、勇者サマにとっては慣れない不安な土地というわけだ。

「アリギ村までの道は体を鍛えるにはもってこいですし、そろそろこの薬用酒を届けなければならぬですよ」

そう言ってジョシユは勇者サマの持つ酒瓶に視線を落とした。魔

王印の薬用酒である。

「薬用酒？ 酒が薬になるのか？」

勇者サマは不思議そうに首を傾げた。

酒について説明させるなら私をおいて他にいまい。

私が意気揚々と説明を始めようとすると、傍にいたセーターが慌てて口をふさいできた。

こら、不敬だぞ。

「……魔王様が酒のことを語ると日が暮れる、と他のモンスターから聞いています。ここは私が説明しましょう」

やれやれといった調子で言うジョシュにカチンと来たが、しかし実際酒についてモンスターに対して語りに語って夜が明けたことがあるので今回だけは大人しく引き下がった。

「薬用酒とは薬草をつけた酒です。いくつかの薬草を配合すること、それなりの効果が得られます。テスハではまだまだ主流ではありませんが、他の星ではそれなりに使われています」

その言葉に勇者サマは目を丸くした。

「まずくないか？」

「それなりに飲める味ですよ」

何がそれなりだ。私の薬用酒はテスハ一うまいっつーの！

不満たらたらではあるが、未だにセーターが私の口をふさいでいるので発言することは叶わなかった。

その後、勇者サマはいくつかの注意をジョシュから受けてアリギ村へと向かった。

ちなみにジョシュからの注意というのは、

一つ、知らない人にはお菓子をあげると言われてもついて行かないこと

一つ、危険な場所には近付かないこと

一つ、寄り道はしないこと

一つ、野犬には気をつけること

どう見ても普通に子供のおつかいの時の注意事項だ。

が、お子様勇者サマにはちょうどいい。彼はモンスターに見送られながらさしたる疑問もなく魔王城（ってほど豪華でもないけど）を出発していったのだった。

第6戦 新たなる軽めの試練（後書き）

次回はなーにがでーきーるーかなーの話です。

第7戦 行きはよいよい

勇者サマが出発した後、私は部屋のソファにふんぞり返っていた。ソファの前には大きめのローテーブルが置かれており、その上には丸い水晶が鎮座している。紫色のベルベットの土台に設置されたそれはどこか占い師が使うそれを連想させる。まあ私がそう作らせたのだけど。こういうのは雰囲気が大事だと思うのだ。モンスターたちの共感を得られなかったが。

さて、現在その水晶から映像が浮かび上がっている状態である。私が両手を広げたくらいの大画面のそれには、モンスター特製のお弁当と魔王印の薬用酒の入った袋を背負った勇者サマの様子が映し出されている。

実はこれ、今水晶の隣りに座っている小さな鳥型モンスターの特殊能力なのである。

この鳥型モンスター、私はカメと呼んでいる。鳴き声が「カメーカメカメー」というへんてこな鳴き声だからだ。当初カメカメと呼んでいたが何度か舌を噛んだので省略することにした。

このカメというモンスター、変わった習性がある。オスがメスに求愛するときに自分の見た映像と音声を思念で送るというものだ。一番メスが気に入ったものを送ったオスが求愛に成功する。

で、その習性を利用したのがこの遠隔映像投射機というわけだ。モンスターのオスを目的地に飛ばし映像をリアルタイムに送信させ、メスに受信させる。メスが受信した映像を魔力を込めた水晶を媒介にして、外部からも分かるように投射する。これにより遠隔地

の映像でもリアルタイムで見ることができなのだ。以前のままだとさほど力が強くなく、近い距離でしか映像を飛ばすことができなかったが、今回私が強化したことにより中継できる距離を延ばすことができた。またこの水晶は別のモンスターの加工により、映像を記録しておくこともできる。

ちなみに実験と称して私の朝起きてからの行動を記録されていたため（そして油断してだらけていたため）ジョシュにかなり嫌味を言われた。どのカメラが記録したか知らないが、覚えとけよ。

さて、私は目の前の幻像に目を向けた。まだ出発したばかりということもあって、この山すら下りていない状況のようだ。普段見慣れた景色のはずだが、視点が違うので僅かに新鮮である。

この時点では勇者サマも元気である。さすがに毎日通ってきているだけあって、下りる足取りに迷いはない。

勇者サマの足がどれくらいかは知らないが、アリギ村への分かれ道まで行くのにあと二時間くらいはかかるだろう。とりあえずお菓子でも食べておくか。

私はモンスターに言いつけようと振り返り、絶句した。

私は居間のソファに座っていたのだが、その背後にはびっしりとそりやもう天井から床までびっしりとモンスターたちがいた。正直キモい。

「……あんたたち、仕事はどうしたの」

なんだろう、頭痛がする。背後にひしめいているモンスターはメスだけじゃなかった。勇者サマを可愛がっているモンスター全員が狭い室内に集合しているんじゃないだろうかという状況だ。

勇者サマは勇者の癖にモンスター受けが良かった。魔王である私にボコボコ（というほどひどくはないと私は主張する）にされてもジョシュに叱られてもめげずに通ってきていることや、（私以外には）素直なところなどが気に入られているようだ。勇者サマが来て以来モンスターからのお小言が増えたりおやつが減った私としては勇者サマは間違いなく疫病神である。

「ああ、仕事なら今朝夜が明ける前からみんなで総動員して済ませていたですよ」

ジョシュがしれつと告げる。私はさらに頭痛がひどくなった。

まあもともと仕事なんて大したものもないんだけどさ。それでも釈然としない気分になるのはなんでだろう。

とにかく、私は深くは気にしないことにした。近くにいたモンスターにお茶とお菓子を持つてくるように言う。

お茶が来たことを確認すると、私は少し早目のティータイムへとしゃれこんだのである。

流れる映像を見ながらジョシュは何かしら手に持った手帳に書きつけている。

「ジョシュ、あんたそれ何書いてるの？」

私が興味本位で覗きこもうとしたが、ジョシュはその前にそれを閉じてしまった。

「今後の参考に気付いたことを書いています」

「なんで隠すのよ」

「知ったところで魔王様は下らないことにしか使わないでしょう？」
図星ではあるが、指摘されて一番腹が立つのが真実というものである。

「勇者サマの教育任されてるのは私なんだから私にも見る権利あるでしょうが」

「駄目です」

くそう、けちんぼめ。こうなったら実力行使だ。

私はジョシュの持っていた手帳を掴むと自分の方に引き寄せた。

ジョシュも負けずと自分の方へと引き寄せよる。

ぐーたら魔王と教育係の勝負は、お互い筋力がないため拮抗した。五秒も引つ張り合いをすればお互い腕が震えている駄目っぷりである。体を鍛えよう。明日から。

なにはともあれお互い負けず嫌いなため諦めるということとはしなかった。五十歩百歩の勝負は背後にいるモンスターたちから「画面が見えないからどいてほしい」という苦情が出るまで続けられたのだった。

なんか最近部下に軽んじられてる気がする。

さて、ジョシュとの攻防によっていらない汗をかいた私はお茶を淹れなおしてもらい、再びソファに身を沈めた。

疲れた。無駄に疲れた。

画面の中の勇者サマは意気揚々として歩を進めている。

アリギ村まで行って帰って、子供の足でも朝に出れば夕方までには何とか帰ってこれるはずだ。順当にいけば、の話だが。

さて、勇者サマは一体どれくらいで戻ってこれるだろうか？

勇者サマが出発してから三時間、勇者サマが村の境に近付いた時のことだった。

画面に映り込んだ影に私は首をひねった。

「2カメに切り替えて」

一応念のためカメは三匹用意してある。それぞれ1カメ2カメ3カメと区別してあるのだ。

私が目の前のカメに言うつと、画面に流れる映像が変わる。そしてそこに映ったものに頭を抱えなくなった。

元気に歩く勇者サマの背後からコソコソと尾行している影、どう見てもうちのモンスター、セーター（五十一号）とミルクちゃんだ。彼女たちはモンスターの中でも特に勇者サマに対する過保護が過ぎるからうちにいるようにと釘をさしておいたはずなのだが。

というか、出発後にちゃんといるかどうか確かめたのに、なぜ？ 私は背後を振り返ってそれまでいると思っていた二人を探し、頭の痛い事実に気付いた。どちらも良く似たモンスターを替え玉にしていたのである。替え玉を務めているモンスターたちは冷や汗を流していた。どうせ彼女たちの鬼気迫る説得に負けたのだろう。

「ほんとと過保護！」

私は頭を抱えた。

勇者サマが分かれ道で足を止める。その背後からセーターとミルクちゃんがハラハラした様子で見守っている。

勇者サマが正しい道を選んで歩き出すと、あからさまにホツとした様子で再び行いく。

時には勇者サマに先回りして悪戯された看板を直したりもしていた。

勇者サマが倒木に腰かけて水筒の水を飲んでいるのを影からそつと見守っていたりもする。

勇者サマが北へ行けばついて行き、南に引き返せば慌てて戻る。

小さな子供の後をつけていく様はどう見ても不審人物である。モンスターだけだ。

駄目だこいつら、早くなんとかしないと。

カメを使つて様子を見ている私が人のことを言うのもなんだが、この二人はどうしようもない。

が、私の背後で見守ってるモンスターたちだって似たようなもので、勇者サマの行動に一喜一憂してるしもう本当にどうしようもない。

「帰ったら絶対説教食らわせてやる……」

腐つても魔王、あいつらの上司だ。可愛い子には旅をさせよというし、試練を乗り越えてこそ強くなるってもんである。そこんことをしっかりと分かせないとね。

途中で蝶々を追いかけて道を外れるというハプニングがあつたものの、セーターが即席で作つた看板によって事なきを得た。

ぶっちゃけそこで迷子になって勇者サマが泣きだしたら面白かつたのと思う。それこそいい経験になると思うのだが、それをすっかりこぼしたらやはりモンスターたちから冷たい目で見られた。

さて、昼を少し回つたところに勇者サマは無事アリギ村に着くことができた。

勇者サマは村の入り口を過ぎ、現在は一本道を歩いている。ここまですればもう目的地であるヤトの家までもう一息である。

やれやれと息をついていた私だったが、

「よう、坊主。おつかいか？」

画面に映った路傍の石に腰かけたジジイを見て、飲んでいたお茶を勢いよく嘖き出した。

「そうだぞ！ ヤトさんの家まで行くんだ！」

声を掛けられた勇者サマは意気揚々と答えている。

「そうかそうか、偉いなあ、坊主。ほら、じいちゃんがアメちゃんやろっ」

そう言ってジジイが差し出すのを勇者サマは嬉々として受け取っている。

あの馬鹿勇者！ 知らない人にももの貰っちゃいけないってジヨシユが注意したらだろうが！

っていか人ですらないんだけどそいつは！

私は画面に映るジジイを睨みつけながら思いつきり叫んだ。

「手を出すなって言ったのにあのジジイ！」

画面の向こうで好々爺然として勇者サマと相対しているのは私もよく知っている、アリギ村の魔王だったのである。

第7戦 行きはよいよい（後書き）

いまさらですが、魔王は女の子の割に言葉遣いが乱暴です。

第8戦 見守る魔王、手を出す魔王

魔王というのは別に超レアな存在というわけではない。ぶっちゃけて言くと、魔王試験に合格さえすれば誰でも魔王になれるお手軽な職業だ。しかも辞めるときは魔王連盟にちよろつと辞表みたいなを書いて出せばいいというかなりいい加減な仕組みである。それに対して勇者という職業は自分の意志ではなれないし辞められないというから大概ひどい職業だ。

まあそもそも魔王試験を受けに行つてなおかつ合格するというのが難しいらしいのだがそこはそれ。

とかく星の数ほどとはいかないが、魔王の数もそれなりにいると
いろんな魔王がいるわけだ。

「ほほほ、ツキバ村から来たんか。難儀じゃったろう」

一見単なるひよろつこい老人に見えるこのジジイは、こう見えて魔王連盟全体から見てもかなりの実力を持つ魔王なのである。このジジイが本気になれば村の一つや二つ、簡単に消せるぐらいレベルの高い魔王なのだ。

「全然！ 僕、強いから大丈夫だ！」

胸を張つて言う勇者サマは、自分が誰に向かって話しているか気付いていないようだ。人は見た目で判断すんなって教わらなかつたのかこの勇者サマは。っていうか勇者なんだから相手が魔王だって気付け。

「そうかそうか、将来が楽しみじゃなあ」

ニコニコとした顔で言われて、勇者サマは照れたようだった。僅かに顔を赤くして、しきりに頭をかいている。

「魔王様、あの方は？」

ジョシュが私に尋ねる。そういえば、ジョシュを周辺の魔王にお披露目してなかったな。連日勉強漬けだったし。

「ああ見えて隣村の魔王だよ。若い者をからかうことこそ年寄りの至上の娯楽つつつて、しょっちゅう人間に擬態しちゃあちこち徘徊してんの」

むしろ人間の姿の方が本性じゃないのかと時々思ってしまうくらい人間の姿が板についている。

「……………ボケてませんよね？」

「若干色ボケ」

ボンキュッボンな美人が好きだと豪語していたジジイである。一番最初に手土産に酒を持って挨拶に行ったら美人な姉ちゃん連れてこんかいとか抜かしたジジイである。思わず勢いで殴ってしまい青くなったのだが、なぜかそのまま気に入られて今に至る。いやあ、生きてて良かった。

「魔王様は事前に連絡を入れ忘れたのですか？」

ジョシュが非難めいた視線を向けてくる。失礼な。

「ちゃんとジジイには手紙送ったってば。ちよっくらそっちに勇者サマがおつかいに行くけど、邪魔しないでねって」

しばらく考え込んでいたジョシュだが、

「アリギ村の魔王をされている方は若い人をからかうのが娯楽なんですよね？」

「そうだけど？」

私が答えると、ジョシュは確認するように呟く。

「……………なら、邪魔すると言ったら邪魔するに決まってると思いますんか？」

あ。

しまった、盲点だった。っていうかよく考えたら当たり前である。あのジジイが素直にこちらの要求を飲んだことがいまだかつてあったらどうか。いやない。ケーキが食べたいと言ったら石のごとく硬いせんべいを用意するようなジジイである。手を出すなど言えば手を出すに決まってる。大方こちらが勇者サマの様子を伺っていることもお見通しなのだろう。

しまった、失敗だ。

頭を抱えている私を見て、ジョシュは小さくため息をついた。

「まあすでに出会ってしまったものは仕方ありません。あとは彼がどれくらい仕事を全うできるかです」

それが一番心配なんだけどね！

「のう、坊主。ちょっとじいちゃんとオセロをせんか。ちょっとした戯れに、のう」

何故かジジイは勇者サマにオセロの勝負を挑んでいる。何がちょっとした戯れだ。私は舌打ちをした。

「オセロの一局ぐらいは問題ないのでは？」

ジョシュが首を傾げている。そう思ってるならジョシュ、周りにいるモンスターに聞いてみたらどうだ。こいつらですらオセロという言葉にうんざりした表情を見せてるぞ。

「あのジジイとオセロするなら二時間はかかるのよ……」

私はげっそりとした気分になった。

「単なるババ抜きですら、あのジジイとやったら一回勝負するだけ

で小一時間かかるんだから」

後ろにいるモンスターたちがうんうんとうなずいている。

「しかも考え込むくせにめちゃくちゃ弱くてさー」

オセロで四隅取らせたのに私が勝っちゃったときにはいつぞ感心してしまったものだ。

その上、

「弱いくせに負けず嫌いで、負けてもすぐに勝負挑んでくるんだよねー」

なんか背後で魔王様もそこは同類でしょうとか言ってるモンスターがいたのでそちらを見ずに攻撃魔法（威力的にはチョーク投げつけたくらい）を放ってみた。本当のことなのにひどいと言ってるが知ったこっちゃない。

「とにかく、勇者サマが勝負を受けちゃったら日があるうちに帰ってこれるか怪しくなるってこと！」

その辺よく分かっているモンスターたちは、勇者サマの様子を固唾をのんで見守っている。

さて、ジジイの提案に首をひねって考え込んでいた勇者サマだったが、

「うーん、今は止めとく」

思いのほかきっぱりと断った。

「残念じゃのう。なんでじゃ？」

ジジイがややしょんぼりした風に言う。これはジジイのお得意の演技である。ちょっと弱った老人を装えば優しくされるということを知っているのだ。なんとも嫌なジジイだ。

勇者サマはジジイの様子に罪悪感を感じているようだったが、それでも意見を変えなかった。

「僕、ヤトさんに薬用酒届けなきゃいけないんだ。これ、酒なんだけど薬なんだって。もうすぐなくなりそうだから届けなきゃいけないんだ」

勇者サマはぐつと拳を握った。

「薬ってすごく大事だろ？ なくなったら怖いからな！ だから僕はヤトさんに届けなきゃいけないんだ！」

おやおや、意外なことに勇者サマは使命感に燃えていたようだ。

勇者サマの雄姿を見て、モンスターの一部が感激の涙を流している。お前ら涙腺弱すぎるだろう。さらに一部では勇者サマに向けて拍手喝采を送っている。どうやらモンスターの間で勇者サマの株が急上昇しているようだ。

カメラが映した映像の端っこにいるセーターやミルクちゃんも目元をぬぐっていた。こいつらはマジで勇者サマに甘すぎる。勇者サマに向けるその甘さを半分でいいから私に分けてくれ。思いつきだらけるから。

……もしかしてそういう考え方をするから私には甘くしてくれないんだろうか。

「そうかそうか。あい分かった。それじゃあ気をつけて行くんじゃないぞ」

ジジイの言葉に思わず私は目を丸くした。こつもあつさりジジイが勇者サマを解放するとは思ってなかったのだ。何か裏があるんじゃないだろうか。

「うん！ ありがとなじいちゃん！ また会ったらオセロしような！」

勇者サマは元気に言うと、ずんずん歩き出した。

ジジイはそれを見送りながら手を振っている。勇者サマが見えなくなる直前に振りかえり、大きく手を振っていた。

「……さて」

勇者サマが見えなくなるとジジイが小さく呟いた。小さく手を動かしている。

するとジジイの前に円形の亜空間が現れた。直後に私の目の前にも同じものが現れる。通信魔法である。

「出歯亀とは、嬢ちゃんは趣味が変わったんかの？」

亜空間からジジイの声が流れ出る。映像を見てみれば、ジジイは一匹だけ残した3カメに目線を合わせていた。予想はしていたが、すっかりばれているようだ。

「事故が起きても対処できるように見守ってるの！」

私が亜空間に向かって言えば、ジジイはほほと笑った。

「たかだか隣村に行くだけのおつかいに傍づきのモンスター二体に加えて空の魔王直々に見守るたあ、随分と期待された勇者じゃのう？」

「モンスターは勝手についていったの。まあ私は期待してるっちゃ期待してるけどね。多分ジジイと同じ意味合いで」

ジジイは再び笑った。

「ここに来るまでに道しるべを入れ替えたり落とし穴を仕掛けたりちゅうのに全部直しおってからに。楽しみが減ったわい。つまらんのう。」

「ああ……さつきミルクちゃんが落ちた落とし穴はそういう……」

「なんだが頭痛がするよ、お母さん。」

セーターたちが奮闘しなかったら今頃は到着すらしてなかったわけ、そういう面で見たら彼女らの独断専行が功を奏したわけだが、そもその原因が隣村の魔王。つくづく勇者サマは魔王サイドに縁がある気がする。まあ勇者だからしょうがないんだけどさ。

「ってか、邪魔するなって言っただじゃん」

「山あり谷ありの方が面白いじゃろう？」

それは同意見なのだが、フォローする方の方身にもなって欲しい。フォローしたのセーターたちだけだ。

「まあ嬢ちゃんのところのモンスターの慌てっぷりも見れたからよしとするかの」

つくづくいやなジジイである。どこから見えていたんだか。

「今度遊びにいくから、ちゃんと準備しとくんじゃよ」

「はいはい。適当に用意させとく」

私が脱力しながら言えば、ジジイがポンと手を打った。

「そうそう、大事なことを忘れとったわい」

「何？」

私が画面に目をやると、ジジイはいつになく真剣な顔をしていた。私だけでなく、周囲にいるモンスターの顔も引き締まる。

「嬢ちゃんが今使っておるモンスターのことじゃ。遠くの景色が見れるんじやろう？　いくらかうちに寄こしてくれんかのう」

あれ、なんかくくでもない予感がする。

「なんで？」

なるべく感情を消して言うと、ジジイは二へつと笑った。

「そんなもん、若い娘の湯あみを見るために決まっとるじやろうが」
まあ予想はしてたけど、言わせてもらおう。

「このスケベジジイが！」

さて、ジジイとの通信を無理やり終了した私は映像を1カメに切

り替えた。

私とジジイが世にもくだらない話をしている間にもしつかり進んでいたらしく、ちょうどヤトの家の扉を叩くところだった。

「ごめんください！」

元気よく扉を叩いている。一生懸命背伸びしながらノッカーを使っている様子を見たメスモンスターの一部が身もだえしていた。

大丈夫かな、うちのモンスター！

しばしの沈黙ののち、軽い足音が戸口に近付いてきた。

「はい、どちら様？」

「バークーロのオキだ！ 薬用酒届けに来たぞ」

年上の知らない人の家に行くんだから、敬語ぐらい使ったらどうなんだ勇者サマ。まだ子供だからギリギリ許容範囲と言えなくもないが。

勇者サマの元気な返答に扉が開く。

「あらあら、あなたが真央の言ってた勇者様ね。いらっしやい。遠くまで大変だったでしょう？」

ニコニコと笑顔で勇者サマを迎えるのは私の友人、ヤトである。

ヤトは私の二つ年下の友人で、このアリギ村で年の離れたお兄さんと一緒に暮らしている。いつも明るい金茶の髪をお下げにしている、大きな青い瞳と白い肌、そして華奢な体格も相まって、清楚なお嬢さんといった風体だ。事実、ヤトは清楚なお嬢さんである。元来のおっとりした性格に加え、小さいころに両親からしっかりと礼儀作法を学んだこともあり、気取ったところはないものの上品で、実にお嬢さんらしいお嬢さんだ。

ただ体が少しばかり弱く、村の外に出る機会が少ない。家の外に出ることも少ないくらいだ。

そしてその数少ない外出の機会に道に迷って行き倒れた私を家に

連れ帰って介抱してくれた類稀なるお人好しなのである。

ヤトが勇者サマを家の中に招き入れた。

「はい、ヤトさん。届け物だぞ！」

勇者サマは背負った袋から酒瓶を取り出してヤトに渡す。

「ありがとう、オキ君。ちょうど切れかったところなのよ。助かったわ。ふふ」

「どういたしまして！ 勇者だから当然だ！」

とは言いつつも勇者サマは非常に嬉しそうな表情だ。

「あらあら、偉いわね。今お茶を入れるからちよつとこっちで座っててね」

ヤトは微笑ましげに勇者サマを見やるとお茶の準備をしに部屋の奥に引っ込んだ。

勇者サマは少しばかり緊張した様子で椅子に座っている。

「他のモンスターからは聞いていましたが、魔王様とはずいぶんタイプの違う方ですね」

ジョシュが感心したように言った。

「まあね。私の自慢の友達だし」

「おや、ご自分はヤトさんとは違うタイプだと自覚されてるんですね」

ああもう、なんで私の周りにはこう厭味ったらしい奴が多いんだろうか。類は友を呼ぶ？ そんなバカな。

「当たり前でしょ。だって私、魔王だし」

私がそう言っていると、ジョシュは大仰なため息をついた。こんにやろう。

しばらくして、トレイにお茶とお菓子を載せたヤトが戻ってきた。

「お待たせしてごめんなさいね、オキ君。退屈じゃなかった？」

「全然！ 僕、ちゃんと待ってたぞ！」

「あらあら、偉いわねえ」

胸を張る勇者サマを見てヤトは微笑ましげに笑った。

「オキ君はバークーロの子なんでしょう？ アリギ村にはあまり来ないんじゃない？」

「うん。いつもはツキバ村にしか行かないんだ。魔王の城に行つてやつてるからな！」

誰も来てくれ頼んでないぞこのガキンチョめ。

「そうなの。真央のところにいくまで山を登るから大変でしょう？」
お茶を飲みながらの会話で、ヤトはいつも以上におっとりしているようだ。

勇者サマが首を傾げた。

「そういえばさっきも言つてたけど、真央って誰だ？」
ヤトは目を丸くした。

「真央は真央よ。ツキバ村の魔王の。オキ君も知ってるでしょう？」
すると今度は勇者サマが目を丸くした。

「魔王って、空の魔王って名前じゃないのか？」

忘れられがちだが、私の名前は空の魔王ではなく空野真央である。
しかし残念なことに私の本名を知っている人の数は少なく、さらに言うなら本名で呼んでくれる人は数えるほどしかない。

まあ、魔王様と呼ばれようと真央様と呼ばれようと大差はないからもう気にしてないけど。

「それは通称ね。魔王になった時に大々的に宣伝しちゃったからそ
ちの方が有名なのよね」

ヤトはころころと笑う。私にとつちや笑い事でもないのだが。未だに「よう、空の魔王」とか挨拶されるこっちの身にもなつて欲しいもんだ。

その後も他愛のない世間話を二十分ほどしていた二人だが、帰りの時間もあるだろうと言うことでお開きになった。

「これ、お土産にどうぞ。みんなで食べてね」

そう言つてヤトはクッキーらしきものが入った袋を勇者サマに渡した。

「それからこっちは帰りにお腹がすいたら食べてね」

そう言つて、簡易の携帯食糧らしきものを手渡している。ヤトがつくるお菓子や携帯食糧つて美味しいんだよね。ちよつとうらやましい。

「ヤトさん、ありがとな!」

元気よくお礼を言つてから、勇者サマがもじもじとします。なんだ、トイレにでも行きたくなつたか?

「……あ、あのな。また僕、ここに来てもいいか?」

先ほどまでとは打つて変わつて自信なさげな態度に私は目を瞬かせた。これは一体どうしたことか。もしかして勇者サマ初恋か、初恋なのか。もしそうなら私の全精力を傾けて全力で妨害するぞ。

「ええ、いつでも遊びに来て頂戴」

相変わらずの笑顔でヤトが言う。そんなこと言つて勇者サマが本気で毎日押しかけたらどうしよう。殴つてでも止めるか。

ヤトの返答に勇者サマは顔を明るくさせた。

「うん、来る！ 絶対に来るからな！」

ヤトの家を出る勇者サマを見ながら私はため息をついた。

これで今回の勇者サマの任務は完了したわけだが、家に帰るまでが任務である。しかも勇者サマがいるのはあのジジイのテリトリー。ちゃんと帰ってこれるかはなはだ不安だ。

というか、嫌な予感しかない。

その予感が当たっていると知るのは、それからわずか一時間後のことだったりする。

魔王の手記（前書き）

勇者サマの登場しない番外編の話です。

魔王の手記

私が勇者サマの教育係を引き受けたと知ったトウイから、嫌がらせじゃないかと思うくらい紙や本を貰った。

せっかくなのでこれを機会に、思いつくままにつづった手記というものを書いてみようと思う。

日記にしようかとも考えたのだけど、絶対三日で飽きると断言できる。だから手記だ。思いついた時にだけ書く。

先日ツキバ村の方から新しく出来たお酒が献上された。味見をして見たが、なかなか美味しい。ただもう少し寝かせた方がまるやかになりそうだ。

今年は果物の出来が良かったらしく、果実酒も葡萄酒もどちらも美味しい。私としては大満足だ。このまま酒造りが盛んになってくれたらよいと思う。

何を隠そう私の生まれ故郷は酒の名産地だった。しかも純粋な酒でなく、果実酒や薬用酒、その他諸々とにかく酒を加工しては楽しむのもかなり一般的だった。

が、なんとテスハはそういった酒を楽しむ文化がない！葡萄酒以外の酒は飲まないと聞いた時はめまいがしたものだ。

私の生まれ育った惑星シークでは子供が十歳になると成長の祝い

として酒を飲み、それ以降自由に飲めるようになる。うちは貧乏だったが、それでもお祭りや祝い事のときには何かしらお酒を飲んだものである。

リンゴ酒も桃酒もどぶろくも麦酒も飲めないなんて！ と一時は絶望した私だったが、魔王の権限を活用して村の人に掛け合い、酒を作るようにした。で、一般的な嗜好品としての酒造りは認められないが、祭事や薬用としての酒ならば作ってもよいと言われて今に至る。あとは私への献上用。しかし現時点では技術的にも人手としても量産は難しいということもあり、生産量はわずかである。もしこれで大量生産か、もしくは良質のものが出来るようになればツキバ村の名物となると思う。

現在ではセーターの作った果実で果実酒を、そしてともに薬草の調査を得意としたモンスターと協力して薬用酒を村の職人が作っているのだ。ヤトに持っていく薬用酒もこれだったりする。

そうそう、村の職人と言えば、村一番の酒造の腕の持ち主であるココナ爺が最近後継者育成に力を入れ始めたそうだ。ココナ爺の後継者はヘンファーとかいう気の抜けそうな名前の十代半ばの少年である。

そのヘンファーが先日泣きべそをかきながらうちに相談に来た。ココナ爺についていけないのだという。

そんなに指導が厳しいのかと同情していたのだが、どうもそうではないらしい。ヘンファーは大真面目な顔で言ったのだ。モンスターの言語を分かるようにはどうしたらいいのか、と。

モンスターの言語と一口に言っても、実に多種多様である。動物

の鳴き声と同じようなもの。発声の器官に違いがあるから発する言語も違う。同じ意味の言葉でも「にゃー」だの「くるつくー」だの「もー」だのと種族によって異なるのだ。ただ言語は違えどもモンスター間でのかなり正確な意思疎通は可能である。その辺はフィーリングだとしが言いようがない。魔王や一部の勇者、モンスター使いなどもフィーリングでモンスターの言葉が理解できる。

そう言えば、世の中には偏屈な人間がいて、モンスターの種族ごとに違う言語を解読して意志疎通を図れる人間がいるのだとか。モンスター爺さんだったか婆さんだったか忘れたが、ご苦労なことである。その労力を魔物使いになるために使ったら手っ取り早かったのではないかと思う。まああの職業は才能が物を言うらしいけれど。

とにかく、一般人がモンスター言語を理解しようなんて無理な話だ。身ぶり手ぶりでなんとか理解してもらうしかない。幸いにして酒担当のモンスターたちはボディランゲージが得意な連中である。

私はヘンファーにそう話したのだが、彼は実に悲壮な表情をしていた。しまいには泣き出してしまい、お茶を替えに来たモンスターに私が冷たい目で見られた。泣かしたのは私じゃないのに。全く、あいつらときたら私のことを弱い者いじめする魔王だと思っているに違いない。

それはさておき、このままじゃ埒が明かれないと思った私は村の酒造の様子を見に行くことにした。なんととっても後継者君に逃げられては今後の私の楽しい酒ライフが遠ざかってしまう。結構重要な問題だったのだ。

村の酒造現場を見学に行つて、ヘンファアの言葉の意味が分かつた。

「だから！ 配合は1：1：3の方がいいって言つてんだろーが
バーロイ！」

「……！！」
「む……そりやたしかにそうだが、前の通りにやつたつて同じに
かならねえじゃねえか」

「……！！」
「しかし今回は前に比べて純度の高いもんを使つてんだからよお、
量も多いしちつたあ冒険する方がいいんじゃないじゃねえか？」

「……」
「よし、じゃあ今回の配合は2：1：3でどうだ！」
「……！！」

ココナ爺と酒担当のセーターががっしりと握手を交わした。どう
やら無事話し合いがまとまつたようである。

セーターは一応人型だが、人語は喋れない。一般人からすれば、
モニヨモニヨと意味不明の言葉を発しているようにしか聞こえない
だろう。

にも関わらず、ココナ爺はセーターの言葉を正確に読み取つて会
話しているのである。

そりやヘンファアだってついてけないわ。

「ココナ爺……」

私は酒に用いる果物の選定をしているココナ爺に声をかけた。

「ん？　なんでえ、魔王の嬢ちゃんか。どうしたんでえ？」

御歳七十を超えたはずの老人は私を見てちよつとばかり目を瞠った。

「いや、あの、ココナ爺。なんでココナ爺はセーターの言うこと分かるの？」

するとココナ爺は心底不思議そうな顔で言ったのだ。

「ああん？　酒造りに関しちやお互い妥協を許さない職人同士だ。分からんでどうする」

「いやいやいや、普通分からないから」

思わず突っ込みを入れてしまったが、もしかして職人には何かしら相通じるものがあるんだろうか。

が、振り返ってみたらヘンファーが首を横に振っていたので違うっぽい。

そこにもう一体モンスターがやってきた。こっちはスリムな熊みtainな姿のモンスターで、薬草の調合を得意とする。薬用酒担当のモンスターだ。

「」

「おう、そうか。分かった。こっちが片付いたらすぐにいくから用意しといてくれ」

「」

「いや、今回は果物が腐る前にせにやいかんかな。少なめでいい」

「」

モンスターは私とヘンファーに挨拶をしてから去っていく。これまた完璧なコミュニケーションが取れていた。

……………これはあれだな、うん。

私はヘンファアの肩を叩いて言う。

「頑張れワカゾー」

大事なのはフィーリングだから。

その後、本格的にヘンファアが泣き出したのは私のせいではない
と想いたい。

そういえば、酒造りをモンスターに丸投げしてから私が通訳に行
ったことは一度もない。ということは、最初からココナ爺はモン
スターたちと意思疎通を図れたということか。

職人ってすごいんだなと実感した日だった。

魔王の手記（後書き）

魔王が珍しく常識人に見える話です。

第9戦 勇者サマ迷走

部屋の中にいるモンスターは息を押し殺していた。誰も一言も発しない。とてつもなく重苦しい空気だ。

私は重苦しい空気の発生源であるジョシュを盗み見る。

相変わらずの鉄面皮で表情は変わらないのだが、問題はそれ以外だ。

私はジョシュの顔を見ないようにして言う。

「……………ジョシュ、無言で高速貧乏ゆすりするの止めてくれない？ 怖いから」

その途端、残像が見えるほどの高速で動いていたジョシュの足が止まった。同時にそれまでジョシュの振動に同調して小刻みに跳ねていたローテーブルも動きを止める。先ほどからカチャカチャとうるさかったティーセットも静かになった。

「……………失礼しました。ですが魔王様も先ほどからソファのひじ掛けを指でうるさいほど叩いていますね。御止しになっては？」

こいつは何か一言私に嫌味を言わないと死ぬ病気にでもかかっているのか。

かなりむかつとしたが、自分が無意識に指を動かしていたことを指摘された気まずさもあり、反論するのを止めた。

先ほどから画面がめぐるしく入れ替わっている。が、そのどこにも勇者サマは映っていない。

「つたく。どこ行っただか…………！」

もうすぐ日が沈むというのに、勇者サマを発見できていない。私は歯噛みした。

発端は一時間ほど前にさかのぼる。

ヤトの家を出た勇者サマはツキバ村の私の家、要するに魔王城に向かって歩き出した。

お茶を飲んでリフレッシュしたのか、気分上々のように鼻歌まで歌っていた。それを背後から追いかける二体のモンスターがほのぼのと見ている。

もしや帰り道にジジイが待ち受けているのではないかと心配していたのだがそんなこともなく、勇者サマはごくごく普通にアリギ村を出ようとしていた。

が、勇者サマがぴたりと足を止めた。はっと道の脇を見ている。

どうかしたのかと私は首をひねる。1カメから3カメに切り替える。

微妙に位置が変わったことで、それまで拾えなかった音が拾えた。ぐるる、ぐるると低い声で動物が唸っているのだ。

さらに2カメに切り替える。道の茂みの奥に爛々と輝く瞳があった。

これはヤバい。

勇者サマは弾けるように走り出した。途端に茂みから薄汚れた野犬が飛び出して勇者サマを追いかけはじめる。

画面を見ていたモンスターたちが悲鳴を上げた。

ツキバ村や周辺の村で何が一番危険って野犬が一番危険なのだ。私含めこの一帯の魔王は人間とは不干涉、または共生をモットーとしているため、モンスターに人間を襲わないように指令を出している。

厄介なのは自然動物だ。モンスターの一部や魔王の一部は彼らと意思疎通を図れないこともないのだが、命令に従わせることができない。なぜならば単なる動物だから。自然動物はモンスターよりも知能が低い上に、魔力をほとんど持っていないため魔王独自の強制力が働かないのだ。ある程度モンスターが自然動物を従えさせることはできるのだが、それでもないよりましという程度だ。動物たちは動物同士でのコミュニケーション能力も低い。

そのため、この辺りで人間を襲うものといったら野生の自然動物なのだ。中でも微妙に人に慣れている野犬の被害は多い。

恐らく勇者サマの持っている食料の匂いに惹かれてきたのだろう。

しかしそんな暢気に考えている暇はない。

セーターとミルクちゃんが大急ぎで勇者サマを追いかけている。
カメたちも急いで彼らの後を追いつ始めた。

ふと不穏な空気を感じて私は振り返り、ぎよつとした。

「ちよつと、あんたたち、ウルフのせいじゃないんだから八つ当たりしちゃダメでしょ！」

周囲のモンスターがウルフに白い目を向けていたのだ。ウルフはぺたりと耳を伏せている。

「ですが、犬系は彼の管轄ですからねえ」

珍しくジョシュが論理的でないことを言う。

「あの辺はまだアリギ村でしょ。アリギ村の野犬までウルフが手を出したらジジイに何言われるか分かったもんじゃない」

絶対代償だなんだと何かしらとんでもないものを要求されるに決まっている。あのジジイは転んでもタダでは起きない、むしろわざと転んで法外な慰謝料を要求するジジイなのだ。

「というかそもそも、腹を空かした野犬に命令を聞く理性があるかどうかも謎である。」

私がきつぱり言い切ると、ジョシュは小さくため息をついた。ジョシュにしては珍しく、弱ったようなため息だった。

「それもそうですね。皆さんもそう怖い目で睨まないで上げてください」

ジョシュがそう言うと、モンスターたちも気まずげな様子でウルフを睨むのを止めた。

……私が言っても睨むの止めなかったくせに。何、もしかしてジョシュの方が私より偉いの？ 威厳？ 威厳が足りないのか？

まあそんなことはどうでもよくないけど後で考えよう。

私は画面に目を戻した。

高いところから見下ろしているらしい1カメは、森の中を目茶苦茶に走り回る勇者サマを捉えていた。野犬を撒こうとしているらしいが、相手は犬で勇者サマは人間だ。武器用に持たせた木の棒は勇者サマの腰に刺さっているのだが、本人は忘れているのか逃げるのに夢中で気付かないのか、使っている様子がない。何のために渡したと思ってるんだ、勇者サマ。

それにしても思った以上に勇者サマが素早い。木々のせいで勇者サマの姿がとぎれとぎれにしか見えないのだが、かなりの速さで移動しているようだ。

背後で声援を送るモンスターたちはちよつと黙ってる。

2カメ、3カメは頑張つて森の中を飛んでいるようである。切り替えてちよつとばかり見ていたが、画面がぐるぐる回るので途中で気持ち悪くなってしまった。モンスターの一部もドロップアウトした奴がいた。

画面がめまぐるしく変わること気分が悪くなる現象……これはきっと母が昔言っていた『ぼけもん現象』とやらに違いない。地球にいた結構な人数の子供がこの『ぼけもん現象』にやられたというさもありなん。気持ち悪いことこの上ない。

とりあえず1カメに切り替える。視界がある程度安定したので落ち着いて見ることができた。やれやれだ。

が、そこで予想外のことが起こった。

勇者サマが一瞬画面から見えなくなった時だった。何か妙な音が

したと思ったら勇者サマが消えたのである。

「は？」

間抜けな声が漏れる。予想外過ぎてよく分からなかった。

慌てて他のカメでも確認してみたが、やはり勇者サマは見当たらない。それまで勇者サマを追いかけていた野犬も途方に暮れたようにうろろ歩きまわっていた。

鼻の鋭い野犬がすぐそばにいた獲物を見失うだろうか？

木の上に上ったのかと思ったが、周囲にそれらしき木はないし、カメが映した画像にも勇者サマは見当たらなかった。

勇者サマは手品のように私達の前から忽然と姿を消したのだった。

それからまず私達はカメの記録の検証をした。勇者サマが最後に確認された時点の記録を再生する。

しかし、

「見事に映ってませんね」

ジョシュが言うとおり、ものの見事に映ってなかった。

勇者サマが消える直前の1カメの映像は私達も見ていた。一瞬木の枝の影に入って見えなくなったのだ。

2カメは森の中で勇者サマの左翼側にいたはずだが、ちょっと前に飛んでいる最中に木に激突して地面に墜落していた。アホだ。

3 カメは勇者サマの右翼側でしっかり見ていたのだが、ほんの刹那、3 カメの視界をひらひらと舞う落ち葉が一瞬視界を遮った後には勇者サマは姿を消していた。

私は勇者サマが消えた理由を悟った。

離れたところにいる人物を一瞬で消すとなったら手段は限られている。

可能性の一つとして消えたように見えただけ、つまり穴に落ちたとかそういうのがあるが、野犬が見つけないというのも変な話だし、周囲を探っているカメに見つからないというのはおかしい。

考えられるのは勇者サマが何者かによって転移させられたということだ。とはいえ、離れた場所にいる人間を転移させるのは至難の業だ。はつきり言ってしまうえば魔王や高度の魔術師以外不可能だ。

私は通信魔法を使ってジジイにコンタクトを取った。私はヘタレゆえに未だ通信魔法を長時間維持できないのだが、受信側がその気ならばつなぐことは容易だ。

「ジジイ、あんた勇者サマどこにやったの!？」

私が尋ねると、ジジイはおかしそうに笑った。

「そんな殺気立たんでもいいじゃろ。ちよつとばかり助けてやっただけじゃろ」

「やったことは誘拐と紙一重でしょうが! 心臓止まるかと思ったわ!」

つついっい怒鳴ってしまったのだが、ジジイはますます面白そうに笑っただけだった。

「まあ落ち着くんじゃな。うちの犬っころに嬢ちゃんこの勇者が何かしたら問題になるから助けただけじゃ。心配せんでもちよつとばかり北の道に戻しただけじゃよ」

その言葉に私は息をついた。周囲のモンスターもホツと胸をなでおろしていた。

しかしせめて転移させた直後に連絡をしてほしかった。どうせ私達がやきもきするのを期待していたんだろう。期待通りの反応をしてしまったことが悔しい。こんちくしょう、意地悪ジジイめ。

カメ達に街道の方へ行くように指示を出す。ついでにカメたちにミルクちゃんたちにもメッセージを伝えてもらった。ジジイはおやつを食べに村の人の家に遊びに行くと言って通信を切った。

当面の危機も去ったし一安心だと思った私は送られてきた映像に固まった。

長く伸びる道は上空からしっかりと見渡せた。

そのどこにもあの小癪な勇者サマの姿は見えない。

ジジイに一杯喰わされたかと思ったのだが、ふと見知ったものが落ちていのに気付いて頭を抱えた。

勇者サマが腰にぶら下げていた水筒が道の端っこに投げ出されていたのである。先ほどまで勇者サマの腰についていたはずだ。

すなわちそれは、勇者サマがこの道に転送された後、道以外のどこかへ行ってしまったことを示していた。

「どうやら本格的に見失ったようですね……」
ジョシュの言葉が重く響いた。

第10戦 勇者サマ発見せり（前書き）

以前書いたもので勇者の一人称が「俺」になっていた話がありました。正しくは「僕」でした。間違えていたところは訂正します。

今回はシリアスっぽい話。

第10戦 勇者サマ発見せり

日没まで探し回ったものの、勇者サマを見つけることは叶わなかった。子供の足だからそう遠くへはいっていかないはずなのだ。

勇者サマを見失った時点でウルフ以下鼻のきくモンスターを現場に送ったのだが、まだ到着していない。

だんだん暗くなっていく様子に、私はじりじりとした焦燥を感じた。

カメは鳥型モンスターだ。モンスターゆえに多少自然の動物よりはましたが、暗くなると視界が利かなくなる。カメは夜目が利く鳥ではないのだ。

「どうなさいますか？」

ジョシュが私の判断を促す。

勇者サマが迷子になったのはアリギ村とツキバ村の境界あたり。ジジイの許可を貰っているとはいえ、うちのモンスターを多数出動させることはよろしくない。余所の魔王が支配するところに配下のモンスターを多数動員すると魔王連盟の取り決めに違反することになるからだ。

となると、少数精鋭を行かせるしかない。つまりすでに行かせている分以上の増員はできないのだ。

この時ばかりは広範囲の探索魔法を使えるようになっておけばよかったと思う。現在私の使える探索魔法は部屋の中のどこかにある鍵やら耳かきやらを探す程度の能力しかない。便利だが範囲が狭いのだ。

映し出される画面はすでに影絵状態となっており、カメも森の中を飛び回れない状態だ。

「あと十分探して、見つからなければ私も搜索に行ってくる」

私は勇者サマが迷子になれば面白いとは思っていたが、それはあくまでこちらが把握した上の迷子を期待していた。さすがに私は一人で子供を森の中に放り出すような鬼畜ではない。娯楽に他人の命をかけてどうする。

焦りつつも画面を切り替えていると、モンスターのうちの一体が制止を掛けた。2カメの時に勇者サマの声が聞こえたというのだ。言われたとおりに2カメ切り替えると、確かに子供の泣き声が微かに聞こえた。

私は2カメにそちらに向かうよう指示を出した。

映し出される画面はほとんど黒で埋め尽くされている。得られる情報は音声ぐらいなものか。

しかし画面が真っ暗なのは暗いからというだけでなく、勇者サマがいる場所にも原因があった。

なんと勇者サマは地面の裂け目に落ちているらしい。子供が登るにはちよつと難しい深さだそうだ。

「うつ……うつ……」

暗闇からすすり泣くような声が聞こえる。不気味だ。
「もう、泣くなよ！ 男だろ！」

……ん？

「だって……だってえ……！」

「僕が大丈夫だって言ってるから大丈夫なんだ！」

一体どういう状況なんだろうか。

「どうやら誰かと一緒にいるようですね」

ジョシュが眼鏡を指で押し上げた。先ほどの威圧感が嘘のように消えている。やれやれだ。

「一緒にいるのも子供みたいね」

驚いたことに、泣きじゃくっている子供を励ましているのが勇者サマなのである。てつきり勇者サマが真っ先に泣き出すと思っていたのだが。

ともかく、発見できたのはありがたい。しばらく様子を見て、適宜フォローしよう。

私は聞こえてくる会話に耳を傾けた。

「でも、おいらのせいで兄ちゃんまで落っこっちゃって……ごめんね、ごめんね」

子供が泣きながら謝っている。

「僕、勇者だからな！ 困ってる人を助けるのは当たり前だ！ 気にするな！」

ああ、きつと勇者サマはいつものごとくふんぞり返るように胸を張っているんだろう。いつも通りの生意気なガキンチョに少しばかり安堵した。

「でも、おいらたち助かるのかなあ」

不安そうな声が響く。

「大丈夫だ！」

根拠もなく勇者サマが言う。いや、一応あるのか。

勇者サマは私のおつかいでアリギ村を訪れた。となると、帰ってこない勇者サマを私が探しに来るという可能性はすぐに思い当たるだろうから。

が、勇者サマは私の予想斜め上をいった。もちろん、悪い意味で。「明るくなったら僕がちゃんと上まで登って引つ張り上げてやるから！」

なんでそうなる。

あれか、あの常々鳥頭の勇者サマは自分が魔王からのおつかいでここに来たということも忘れているのか。っていうかせめて普通に大声出して助け求めろよ。もしかしたら通りかかった人が助けられるかもしれないだろ。いや、結構森の奥深くらしいから難しいだろうけど。

でも、なんか腹立つ。

子供は大人しく大人に頼れっての！

しかしここは迷うところだ。

すでに日は落ちている。そして勇者サマがいるのは結構人里離れた場所みたいだ。街道からも離れている。ということは、一般人が通る見込みはないと見ていいだろう。助けを期待するのは止めといった方がいい。

ならば人を呼ばせるべきか？ しかし今勇者サマの近くにいるのはモンスターののみ。たとえ常日頃モンスターに襲われていないアリギ村の人たちだって、いきなり知らないモンスターが尋ねてきたらびつくりするし、怖くなるだろう。モンスターが来たら歓迎する上に食べ物を与えるなんてツキバ村くらいだ。うちの村民はどっかずれてると思う。ちなみにこのことはうちのモンスターであるウルフが太ったことから発覚した。あの食いしん坊め。っていうかツキバ村の人はモンスターが怖い怖くないの以前に、狼が怖くないのだろうか。うーん、ウルフが犬っぽいからかもしれない。あいつ狼としての威厳ないし。

ともかく、人を呼ばせる案は却下だ。そもそもこの場所からだとなりのいる場所は遠い。アリギ村もツキバ村も。なにしろ人が住むには適していない場所だから。ってか、仮に呼んでも来るのに一苦勞

するだろう。

「どうしよう。セーターに救出に行かせようか？」

私はジョシュに相談してみた。セーターたちは割と近くにいるはずだし大丈夫なはずだ。

「……………もう少し、様子を見た方がいいかもしれません」

ジョシュが何か考え込むようにして言う。

「そりやまたどうして？」

私が尋ねると、ジョシュは眉間にしわを寄せた。

「すぐに助けに行けば、こちらが様子を見ていたというのがばれるかもしれませんが、彼の男としてのプライドというのがありますか……いえ、なんでもありません」

中途半端にジョシュは言葉を濁した。

男のプライド、ねえ。

確かにそれは厄介だ。下手に傷つけると変に歪んでしまう時があるし。過去、幾度となく男のプライドをズツタズタにしたことのある私からすると非常に面倒くさい。最近で言えば、ヤトとおしゃべりしているときに「真央はうちの兄さんよりも男前ねえ」と言われているのを聞かれ、ヤトの兄がマジ凹みしていた。申し訳ない。

困難な状況にあっても、人間なかなか自分のプライドを捨てることは難しいものである。子供であれ、というか子供だからこそ勇者サマには難しいだろう。

となると、プライドを捨てざるを得ない状況、すなわち状況が絶望的になるか、はたまた勇者サマが悟りを開くか、勇者サマと一緒にいる子供がのっぴきならない状況になるのがいいのかもしれない。そうすれば、勇者サマは助けられることにプライドを傷つけられることもないだろう。

個人的には、あの傲慢とも思える勇者サマの鼻っ柱を一度へし折

つていてもいいと思う。己の出来ることの限界を知れば、今後の成長にもつながるだろう。何しろ奴は勇者。無限の成長の可能性を秘めた存在だ。

そうでなくとも、一晩くらいは放っておいて勇者サマがどう行動するか見てみるのもいいかもしれない。困難に立たせてこそ人は成長すると言っし。それに彼は一応真正銘の勇者。困難な事態の解決が通常の人間よりも楽にできるという勇者特有の謎の能力がある。なんとかなるかもしれない。

そこまで考えて、ふと私は思った。

もしかしてジョシユも似たようなことを考えたんじゃないだろうか、と。

現在の勇者サマを見るに、彼を立派な勇者にするには一度手痛い失敗をしてそれを乗り越えて成長する必要があるように思える。ならば今回のことは絶好の機会だ。

が、そのことを口に出せばどうなるか？ 周囲にいる勇者サマに対して過保護かつ甘いモンスターたちは文句を言うことは火を見るよりも明らかだ。ひどいだの何だの言われるはずである。

下手に身内で争うよりは、勇者サマのためという建前を押し出しておくのが無難だと判断したのだろう。

……しかし、教育係なんだから憎まれ役ぐらい買って出るよ、ジョシユ。私は憎まれ役なんてご免こうむるけどね。

とにかく、私はジョシユの言い訳をまるっと引用し、現場にいるモンスターたちに伝えた。セーターやミルクちゃんたちは不満そうではあったが、ジョシユが口八丁で丸めこんでしまった。さすがは腹黒。ちよつと意味違うかな？

モンスターたちは勇者サマたちが野犬に襲われないよう、寝ずの番をすることになった。モンスターが自然動物に警戒するっていうのもおかしい話だが。

勇者サマに意識を戻す。彼らの頭上での状況は変わったが、地面の裂け目の底にいる彼らの状況は変わっていないようだ。

子供が解決するには難しい状況で、自分以外の人間がいる状態。

さて、そんな状況で勇者サマは一体どんな活躍を見せてくれるのだろうか。

第10戦 勇者サマ発見せり（後書き）

勇者サマは地面の裂け目に落ちた後、しばらく気絶していた模様。

第11戦 任務完了

私は考えた結果、彼らを一晚放置することにした。

といつても、助ける手段を一つも残さないというほど鬼ではない。セーターに指示を出し、勇者サマ達が落ちた割れ目の斜面の一部に上から下まで届く丈夫なツタの植物を生えさせたのだ。子供の体重ぐらいならば耐えうるはずである。明るくなれば勇者サマもそれに気付くに違いない。

季節は初夏。さすがに夜は冷え込むが、それでも凍死するほどじゃないから大丈夫だろう。

当初はずつと泣いていた子供も泣きやみ、勇者サマ達は星明かりのもとで語り合っていた。ここだけ見るとなんかロマンチックな響きだ。

「兄ちゃん、怪我してない？」

「僕は大丈夫だ。鍛えてるからな！」

「兄ちゃんは勇者なの？」

「そうだぞ。アリギ村とツキバ村の勇者だ」

「え、二つの村の勇者なんだ。強いんだね」

「うん。僕は勇者だからな」

「モンスター倒したり、魔王倒したりするの？」

ポンポンと質問に答えていた勇者サマが、初めて言葉に詰まった。

「……………悪いモンスターは、僕が退治してやる。魔王もだ」

その言葉にはどこか、不機嫌な感情がこもっているように思えた。

「意外だわ。勇者サマなら『どんな奴でも僕がケチヨンケチヨンにしてやる』くらい言いそうなのに」

それはもう、普通の恩義なんてきれいさっぱり忘れて。

ジョシュは小さくため息をついた。

「いくら彼が幼いとはいえ、三食おやつ付きの至れり尽くせりの状況でモンスターを遠慮なく倒すという風には思わないでしょう」

そうなのだ。あのガキンチョ勇者サマはうちに早朝から来て夕方まで残る。そのため三食プラスおやつという破格の待遇を受けている。正直、勇者がそれでいいのか疑問だ。一度勇者サマを夕食前に追い出したことがあるのだが、怒ったモンスターにより私の夕食が抜きとなった。私は魔王のはずなのに。

とはいえ、ある程度妥協してしまえば悪いことばかりではない。あいつら勇者サマに甘いから、特におやつが今までにないくらい手の込んだものになってきているので私もちよつとだけ嬉しい。しかし同時に勇者サマにおやつを奪われる可能性もあるというもろ刃の剣。

食べ物の恨みは深いんだぞ勇者サマ、覚えとけ。

まあ食べ物以外でも勇者サマはかなり甘やかされているところがある。この前など食べすぎでお腹が痛いと言っていたのだが、モンスターたちがあれやこれやと世話を焼いていた。世間一般では人間に害をなすと恐れられているモンスターたちが小さい子供のために薬を調合して飲ませたりお腹をさすってやつたりと甲斐甲斐しい世話を焼いていたのである。世の勇者が見たら卒倒しそうだ。

「至れり尽くせり、ねえ。それを当然と受け止めてる節があるようにも見えるんだけどね」

勇者サマは当初、お礼を言うという簡単なことすらできていなかった。私に対してだけといのなら、まあ腹は立つが納得はできなかった。しかし彼はモンスターたちに対してすら当初はお礼を言わなかった。ジョシュに注意された時にはきょとんとした表情をしていたっけ。

私が苦虫をかみつぶしたような顔をしているのを見て、ジヨシユは何かを言おうと口を開いたようだったが、結局何も言わずに口を閉じたのだった。

「お前はどこから来たんだ？」

唐突に勇者サマは話題を変えた。

「おいらはアリギ村に住んでるんだ。父ちゃんが鍛冶屋で、母ちゃんが機織りしてて、おいらは父ちゃんの手伝い。妹は母ちゃんの手伝いしてる。兄ちゃんは？」

少年は無邪気に尋ねた。

「へ？」

勇者サマは短く変な声を出して言葉に詰まった。しかしすぐにそれを誤魔化すように咳払いをする。

「ぼ、僕は」

ギルギルギル、と大きな音がした。

私にとっては馴染みのある音だ。

「ごめん兄ちゃん……」

少年が情けない声で呟く。

「おいら、おなか減った……」

ま、本来の夕食の時間はとっくに過ぎてるわけだし。

「そりゃ腹も減るよねー」

空腹であろう勇者サマたちの会話を聞きつつ私は夕食を優雅に味わっていた。今日のメインは鶏の香草炒めだ。

人でなしとか冷たいとか言っなかれ。腹が減っては戦は出来ぬ。っていうか、私が食べないと勇者サマにいいことがあるわけだし。

もしもの時に万全な対策を取るためにも夕食は必須である。

私の名誉のために言っておくと、ちゃんと勇者サマの分の食事は確保してある。勇者サマが帰って来た時すぐに食べられるようにだ。まあ一部モンスターは欲しがりません勝つまでは状態で勇者サマが帰ってくるまで食事を我慢するつもりなのもいるようだが、その辺は好きにさせている。よくまあそこまで義理堅くなれるものだ。

さて、勇者サマはちよつとばかり苦悩していたようだが、やがて何やらごそごそしだした。

「ほら、これやる」

「え、いいの!？」

少年の声がぱつと明るくなった。

そういえば、おつかいの帰りにヤトが勇者サマに食べ物や土産を持たせていた気がする。

「うん。ヤトさんに貰ったんだけど、お前にやる。大事に食べよ」

「ありがとう、兄ちゃん! ……でも、兄ちゃんはいいの? おなか減ってないの?」

この子いい子だな。お礼もちゃんと言っているし気遣いもしっかりできている。なんて出来た子だ。勇者サマとは大違いだ。この子の爪の垢でも煎じて勇者サマに飲ませたやりたい。

「僕はここに来る前にたっぷり食べてきたからな。全然お腹すいてないから大丈夫だ」

勇者サマはえへんと威張るように言った。

さすがの勇者サマも、自分より小さい子供の前ではやせ我慢をするらしい。

私を感じしている後ろで、モンスターたちがまたぞろ感涙していた。駄目だこいつら早くなんとかしないと。

こつちのことはさておいて、少年は逡巡した末に一つの提案を口

にした。

「兄ちゃん、半分こしよう?」

私は感嘆した。

「偉いなあ、この子。まだ小さいだろうに」

勇者サマを兄ちゃんと呼んでいるということは、勇者サマよりさらに幼いということだ。声から判断するにしてもせいぜい十歳かそこらだろう。

「魔王様なら確実に一人占めするでしょうね」

ジョシュもうなずきながら言う。

「失礼な。こういう素直なよい子にはあげるわよ。……自分の分を確保してから」

勇者サマにだったら確実にあげたりしないが。

理不尽と言うなかれ。世の中には優しくしてあげたい相手と優しくしたくない相手がいるのだ。

予想外の提案をされた勇者サマはしばらく挙動不審な感じにああだのううだのうめいていたが、

「わかった。半分こだ」

と、怒ったみたいな声で言った。

うーむ。自分の提案が通らなかったから怒ってるのか? それとも……照れ隠し? お子様だし、あり得ないことじゃないよなあ。実際問題、大人でも照れ隠しで怒る奴いるし。

「うん! 一緒に食べると美味しいんだよ!」

この子供、なんとも育ちがいい。素直で優しい子供だ。勇者サマは素直だが、可愛げがない。

しばらく二人でもしやもしや食べているかと思っただが、その時間は短かった。

それもそのはず、ヤトが渡したのは勇者サマ一人分の食べ物、しかも時間的に考えて夕食の邪魔にならない程度のおやつだろう。そんなものを二人で分けたたらずぐになくなるに決まっている。

ま、一晩ぐらいならなんとかなるでしょ。

それからもぽつぽつと二人は他愛のない話をしていたらいいのだが、お腹が膨れた私はうつかりうたた寝をしてしまったために一切合財聞きそびれてしまった。モンスターたちに爆笑会話はなかったかと尋ねたら白い目で見られた。ちえ。

私が目が覚めたところに夜もとつぷり更けており、良い子はとつくに寝ている時間だった。ソファで寝たせいで微妙に節々が痛い。

いつの間にやら掛けられた毛布をどかし、私は依然として黒い画面に意識をやる。物音らしい物音はしていない。背後を振り返れば、モンスターたちも寝入ってるようだった。うちのモンスターは夜行性の奴が極端に少ない。モンスターの癖に早寝早起きなのである。ゆえに本能故でなく怠け癖で遅寝遅起きの私はモンスターたちに小言を食らう。くそう。宵っ張りの朝寝坊は引きこもりの特権なんだからな！

とかく、観察対象が寝ている以上、起きてまで見続ける意味はないだろう。今度はしっかりとソファに横になると、再び毛布をかぶって眠りについた。

朝、仏頂面のジョシュに起こされた。

「あと五時間……」

寝ぼけながらの願いは当然のごとく却下された。

どうやら勇者サマたちも起きて、急斜面に根を張ったツタに気付いたらしい。明るくなったのでカメの視界も回復し、映し出される画面には二人がうんしょうんしょと登っている姿が見える。ふと後ろを見ると、モンスターたちが横断幕やら旗を持って勇者サマを応援していた。あんたたち、いつ作ったのその応援グッズ。

途中ちよつと足を滑らせた勇者サマにひやりとしたが、二人は無事に地上に帰ることができた。

二人は登頂記念ではないだろうが、思い切り万歳してから地面にへたり込んでしまった。さすがに疲れたらしい。

「ごめんね、兄ちゃん。迷惑かけちゃって」

少年が申し訳なさそうに言う。朝日の中で見れば、どうしてなかなか、柔和な顔つきをした可愛い子供だった。金色の癖っ毛で色が白く、見ようによつては女の子にも見えるぐらいだ。

今にも泣き出しそうな少年の方を、勇者サマは豪快に叩いた。

「気にするな、失敗なんて誰にでもあるんだから。お前は僕に感謝すればいいんだ！」

何その超理論。

しかし少年は何やら感じとるものがあつたようで、ふわりとほほ笑んだ。

「うん、ありがとう兄ちゃん」

少年の素直な謝辞に、勇者サマは顔を赤く染めた。やたらと頬を掻きながら視線をあちこち彷徨わせている。

「う、うん。大したことないぞ！」

どこかほにかみながらもしつかりと威張るところは威張るようで、勇者サマはえへんと言わんばかりに胸を張っている。

少年は楽しそうに笑った。

「おいら、ピールって言うんだ。兄ちゃんの名前は？」

驚いたことに、この二人は互いに自己紹介をしていなかったらしい。一晩語り合ってたんじゃないのか。奥手だな勇者サマ。

「僕はオキだ！」

どちらともなく差し出した手を硬く握り合っている。なんかモンスターたちが後ろでハンカチやら手やらで目元拭ってんだけど、そんな感動的な場面なのか？

この時の私は知る由もない。

このピール少年こそ、勇者サマの生涯で無二の親友となる人物であるということ。

昼前に勇者サマはうちに帰ってきた。

「戻ったぞ、魔王。ちゃんとヤトさんに届けてきたからな！」

勇者サマは多少汚れてはいるが、元気いっぱいだった。

私はあくびを噛み殺しながらうなずく。

「そう。御苦労さま。何か変わったことはなかった？」

日帰りで戻ってこれる距離なのに日付が変わっているのだ。どんな言い訳を言うのだろうとほくそ笑んでいたのだが、

「友達が出来たぞ！」

返ってきたのはそんな言葉だった。もっと切実な問題があったと思うんだけど。やはりあれか、鳥頭だからか。喉元過ぎれば熱さ忘れるってやつか。はたまた勇者サマにとっちゃ穴に落ちたことも野犬に追いかけられたことも大したことじゃないのか。

全力で突っ込みを入れたかったのだが、特に一部メスモンスターから脅迫染みた視線を向けられたので止めておいた。ここで下手に突っ込んで泣かせたら後が怖い。

「そう。他には？」

スルーして尋ねると、勇者サマははつとしたように自分の荷物を探った。

中から取り出したのは、昨日カメの映像で見たものだ。

「これ、ヤトさんが魔王たちにとって！」

中身はクッキーかと思いきや、パンケーキだった。彼女の十八番だ。

私は中身を取り出して、おやと思った。

ヤトからお菓子を貰うことは珍しくないのですが、特に彼女の十八番のお菓子などはすっかり見慣れている。このパンケーキの場合、型を使って焼いているので、サイズが決まっているのだ。大きさが変わっていれば気付く。

恐らくヤトがあらかじめ切っておいてくれたのだろう、綺麗に分けられているパンケーキは一切分だけなくなっていた。

勇者サマが帰ってくる時はずっとカメを通して観察していたし、食べたとしたら昨日の内だろう。

私は軽く息をついた。

「せっかくのヤトの心遣いだし、みんなで食べようか。勇者サマもね」

気のないふりをしながらもチラチラとパンケーキを見ていた勇者サマの頭を軽く叩く。

勇者サマはしばらく目を白黒させていたが、やがて怒ったような口調で言う。

「魔王がそこまで言うなら食べてやってもいいぞ！」

なんともはや、分かりやすい子供だ。

私が呆れる横で、セーターやミルクちゃんを筆頭にモンスターたちが勇者サマを甲斐甲斐しく世話している。もはやこれが日常風景として定着しつつあるのだから恐ろしいものだ。

いつもならばつい目くじらを立てるそれらも、今日だけは許しておこう。何しろ勇者サマは初めてのおつかいをどうにかやり遂げたのだから。

その寛大な気分は私の分のパンケーキを勇者サマに取られた時点で消え失せたのは言うまでもない。

第11戦 任務完了（後書き）

いつの間にやらお気に入り登録が100件に！ ありがとうございます！

8・19追記 単語のミス直しました。ご指摘ありがとうございました。単語間違いのせいですっかり魔王城が大惨事になってるどころでした……

第12戦 希望を無視したトントン拍子

勇者サマが初めてのおつかいを成功させた翌々日。
私は頭を抱えていた。

「どうしたんだ、魔王？」

勇者サマが不思議そうな顔で私を見ている。

どうしたもこうしたもあるか！

「うちは子供の遊び場じゃない！」

私が吠えると勇者サマでなく、彼が連れてきた少年が身をすくめた。

「ご、ごめんなさい……」

「君じゃなくて謝るべきは勇者サマでしょうが！」

私が再び言くと、少年ことピールがますます困り顔になった。勇者サマに助けを求めるような視線を向けている。

いつもより遅めにやってきた勇者サマは、なぜか先日的一件で友達になった少年をうちに連れてきたのである。

事の原因はまったくもって悪びれた様子がない。

「別に謝ることなんてないぞ！」

言いながら仁王立ちする勇者サマの頭を私は叩いた。

「あんた自分が何しにここに来てるか分かってないでしょ！」

っていうか、曲がりなりにも魔王の住処に友達連れてくるなよっ

という話。食われても知らないぞ。食う奴いないけど。

「分かってるぞ。勉強しに来てるんだ！」

「お、オキ兄ちゃん……」

自信満々な勇者サマとは裏腹に、ピール少年はオロオロしている。どいう風言われて勇者サマにここまで連れてこられたのか気になるところだ。

ああもつ、頭が痛いつたらない。

しかし私の態度とは裏腹に、モンスターたちは歓迎ムードである。歩いてきて疲れているであろう二人にジューズを渡したりお絞りを渡したりしている。窓の外ではモンスターがピール少年用の子供椅子作ってるし。あんたたちすでにこの子供が常連になるのは決定事項なのか。

とりあえず勇者サマを木から吊るして反省を促すか、と考えていると、意外なところから仲裁が入った。

「いいんじゃないませんか、魔王様」

いつもの無表情が微妙に企み顔に見えるジョシュが言う。

「一緒に学ぶ友達がいればやる気も上がるでしょう。切磋琢磨させてみては？」

なるほど、一理ある。勇者サマは絶対に負けず嫌いだろうし、競う相手がいれば伸びること間違いなしだ。勇者教育と言っても勉強以外に体術なんかもあるし、組み手の相手には同年代の子供は打ってつけだろう。

でも、ちょっと待て。

「この子にも都合つてもんがあるでしょうが。おうちの手伝いとか学校とか！」

このテスハという星では、ある程度田舎でも学校に通っている子供がいる。一応貴族から農民まで大体学校に行っているのだが、頻度や時間が違う。金持ちになればなるほど学校に通えるが、貧乏人は短い時間で簡単な教育を受けるだけである。

ツキバ村もアリギ村もそこそこ田舎なのでそれほど教育は重視されていない。それより家の手伝いや奉公に出る方が大切なのだ。

私としてはそのうちジョシュのような教師モンスターを量産して、貧乏人でもタダで授業を受けられる学校をツキバ村に作りたいなどと考えているが、実際にできるかどうかはまだ分からない。だって

現在いる教師モンスターはジョシュだけだ。こんな嫌味野郎がたくさんいる学校なんて嫌過ぎる。

しかし私の心配をよそに事態は進んでいく。

「えっと、おいらは前は学校行ってたんだけど、今はちょっと行っていないんだ。だから平気」

おいおい、少年。何言ってるんだ。

「おうちのお手伝いは？」

遊んで暮らせるほど余裕のある家はこの辺にはないはずだ。

しかしピール少年は首を振る。

「勉強するのも大事だって父ちゃんが」

なんてこった。さりげなく乗り気じゃないか少年。そしてなんて理解のある父親だ。くそう、忌々しいほど素晴らしい人格者だ。

「オキ兄ちゃんが一緒に勉強できるって言ったから……」

小動物のように小さく震えながら言う少年に、僅かばかりの罪悪感を覚える。っていうかこの子は悪くない。悪いのは考えなしの勇者サマだ。

そもそもの大前提として、確認したいことがある。

「少年、名前は？」

知っているが一応尋ねておく。

「ピールだよ」

「じゃあピール。ここがどこか分かる？」

私の質問にピールが不思議そうな顔をした。

「ツキバ村、だよね？」

私は大きくうなずいた。

「そう、ツキバ村。でもさらに具体的に言おうか。ここは誰が住んでいるか知ってる？」

何を隠そう、っていうかそもそも隠していないけど、ここは私こと空の魔王の住居である。普通、魔王の住居に近付こうと考える奴は

いないだろう。この近辺で考えてみても、魔王と住民が魔王の住処で頻繁に交流をしているのはうちと北の馬鹿ツプル魔王のところら
いなものだ。

しかしピールはきょとんとして言ったのだった。

「ソラノマオさんだよね？」

「……………は？」

予想外の答えに私は固まった。

私の様子を見たピールが不安そうな顔をする。

「えと、おいら間違った？」

間違つてない。それは紛うことなき私の本名だ。間違つてないからこそおかしい。

「…………ピール、その名前誰から聞いたの？」

「ヤト姉ちゃんから。ヤト姉ちゃんの友達なんだって」

何の曇りもない瞳に私はがっくりとうなだれた。

そういえばピールってアリギ村の子供だったもんね。そりゃヤトと知り合いでもおかしくないよね。ヤト姉ちゃんって呼ぶぐらいだからそこそこ仲はいいんだろうし、私の話を聞いててもおかしくないよね。

そこまで考えて私は首を振る。色々突っ込みどころが多すぎてもうどうしたらいいのか分からない。

「この前オキ兄ちゃんが薬用酒届けたって言ってたの。ヤト姉ちゃんに薬用酒を届けてるのはマオさんだって聞いたことがあるから、すぐに分かったよ」

ニコニコと笑う少年に頭痛を覚える。

わぁ、なんて察しのいい子供なんだろう。どうせならそのまま私がツキバ村の魔王だって察してくれたらよかったのに。

私は諦めずに質問を重ねる。

「ピールは今周りにいるこいつらのことをどう思う？」

そう言っただけの周りの周りにいるモンスターを指さした。

人型のジョシュウならともかく、それ以外はモンスターとまる分か

りな容貌である。野生動物に比べて大きいし、爪が長く尖っていたり牙が鋭かったり目つきが悪かったりする。まあ尖った爪は絨毯に引つ掛かるからちゃん切っているが。前に間違えて血管まで切って泣かれた。

それはさておき、モンスターたちは勇者サマが友達を連れてきたというので、いつもより五割増しの数がいる。私の部下だから知らないが微妙に迫力がないが、それでも魔王になる前の私だったらこれだけの数のモンスターに囲まれたら腰を抜かしていたかもしれない。

が、

「すつごくかつこいい。それに優しいね」

類は友を呼ぶという言葉をその時私は痛感した。

なんだこのど天然。ヤトだって初めてうちに来て歓待したがるモンスターたちにうつかり囲まれた時には顔色変えてたぞ。当然その後モンスターたちを私が殴り倒したけど。

なんだろう、答える求めが返って来ないとこんなにも脱力するものなのか。もうちょっとジョシユの授業中真面目に取り組んであげよう。これは切ない。

「うん、かつこいいかどうかは個人の感性だけど、ピール、こいつらモンスターだって分かる？」

「うん」

良い子の返事だ。

よし、この調子で行こう。

「このモンスターが私の言うことを聞いてくとも分かる？」

「うん」

「じゃあ私の正体分かる？」

「うん」

ピールは無邪気に言う。

「ソラノマオさんだよね！」

そうだけど違う！

「ピール、何言ってるんだ。魔王は魔王だろ」

今初めて勇者サマの尊大な態度をありがたいと思った。そうだよ私は魔王だよ。人々から恐れられる魔王だよ。支配下の住民とは友好的だけだね。

「うん、でもヤト姉ちゃんの友達だよね？」

……………もうなんか色々面倒くさくなってきた。こちらを信頼しきった顔に勝てる気がしない。

「そう、ヤトの友達だよ」

ため息をこらえて私は返事をする。

するとそれまで静観していたジョシュが眼鏡を押し上げながら言った。

「お茶の準備が整ったようですので、一息ついてから勉強をしましょうか」

人数分用意された茶器を見て私はたそがれた。

そうか、人数分用意してるってことは端っから私の考えが通る予定はなかったってことか。あれ、なんだか目から汗が出てくる。おかしいなあ。あははははは……

こうしてこの日からピールも一緒に勉強することになったのだった。

ああ、すぐに終わると思っていた勇者サマの教育係。なぜか教える生徒が増えたってどういうことだ。一体どこで間違ったんだろう。

第12戦 希望を無視したトントントン拍子（後書き）

多分最初から間違っていました。
今後はピールも出張ってきます。

魔王の手記 〵 紹介文（前書き）

今までの主要な登場人物を振り返るだけなので、飛ばしても大丈夫です。

魔王の手記 〵 紹介文

友達である人魚魔王のディーネから面白い話を聞いた。

なんでも最近、都会の方では紹介文を書いて交換するのが流行っているのだそう。家族や友人、恋人などの紹介文を互いに書いて交換するのだそうである。交換した紹介文を読んでその人と知り合いになりたいと思えば、仲介を頼んだりもするのだそう。

ディーネに要請されたので、私の周囲の人や人以外について紹介文を書くことにする。

紹介文

ヤト

アリギ村に住んでいる私の友達。金茶の髪に青い目。ちょっと病弱だけど、とても明るくて優しい。お菓子作りや裁縫など、女の子らしいことがとても上手。

年の離れたお兄さんと一緒に暮らしている。ヤト本人は気付いてないけど、結構同じ村の男の子にはモテているみたい。ただ、ヤト

のお兄さんが影でこっそり排除している。私も協力しているのでそのことはヤトには言えない。

勇者サマ

バークーロの勇者サマ。名前はオキ。現在はツキバ村にも所属している。

十歳ちよつと？ 茶色い髪に茶色い目。チビ。生意気。自己中心的。食い意地が張っている。とにかくすぐ調子に乗る。自信過剰。礼儀知らず。いつか徹底的に泣かしたい。

何故かモンスター受けが良い。モンスターと結構円滑に意思疎通を図っているようだけど、モンスター言語を理解しているのではない様子。野生の勘？

どんだけ暇なのか知らないけど、毎朝うちに来て朝食を食べ、夕方まで居座って夕食を食べてから帰る。

ピール

アリギ村の子供。勇者サマの友達。

金髪の癖っ毛。色白。女の子みtainな柔和な顔つき。勇者サマより年下のよう。十歳くらい？

どこかずれまくっている子供。両親は理解があるのかはたまたちやんと現状を理解していないのか、勇者サマと一緒にうちに勉強に来ることを賛成しているらしい。本人も勉強したがっているので一緒に勉強させている。

気が弱いようにも見えるのだが、うちのモンスター相手に全く怯

えない。

ジョシュ

勇者サマの指導を押し付けようとして私が合成した人型モンスター。どこかで色々間違ったらしく、私に対してもスパルタ教育を施そうとしてくる。

私と同じくらい非力だが、私の五倍は嫌味でひん曲がった性格だと思う。ものすごい鉄面皮で、滅多に表情を崩さない。しかしため息の種類だけは無駄に豊富。いつかあいつの髪の毛むしってやりたい。

トウイ

私にとっては先輩魔王かつ後見魔王。私が魔王試験を受けることになった原因。無精ひげを生やしたおっさんにしか見えない。本性なのか擬態なのかは知らない。

結構いい加減でルーズなところがあるけれど、そこそこ面倒見はよい。何故かツキバ村の村長と知り合いで、ツキバ村はトウイに紹介して貰った。結構偉い魔王らしい。

たまにうちに来ると、だらだらとソファに横になりつつ酒とつまみを散々飲み食いして帰る。

ハゲ

本名はオレン・トラリスト・テキシ、みたいな感じだったはず。私の支配するツキバ村の村長。トウイの知り合い。ハゲ。面と向かって言うところまで鬱陶しいので、本人に対してはオレンと呼んでいる。

不思議なことに奥さんは目茶苦茶ナイスバディな美人。家族間の愚痴をなぜかうちに言いに来る。私は相手にしていないので、モンスターに話を聞いてもらっている。

まあ村長としては悪い人間ではないと思う。

ジジイ

アリギ村の魔王。本名不明。初対面の時に聞いた時は「天上天下唯我独尊」と名乗っていたし、違う時に聞いた時は「チョー・カッコ・イーウ・エオチャメ・ナオ・ジサマ」とかぬかしていた。ぶっちゃけそれが名前でもいいなら、ジジイの名前は「イロボ・ケスケベ・ジ・ジイ」とかでいい気がする。

常に人間に擬態してあちこちふらふらしている。本性はドラゴンという噂だが、確認したことはない。人をからかうのを至上の楽しみとしている。

たまにうちにお茶を飲みに来る。私の胸を見ては必ずため息をつくのでそのたびに掴みあいの喧嘩になる。

オセロや将棋などの卓上ゲームを好むが、めちゃくちゃ弱い。そのくせ長考するし負けず嫌いで何度も勝負を挑んでくる。最終的にジジイが噴いた火によってゲームが灰と化したこともある。

自分で書いたものを読みなおして、しみじみと思う。
ヤト以外、まともな知り合いが少ないなあ、と。

なんで私の周囲はろくでもなし人口が多いのだろう。日ごろの行
いだらうか。

………うーむ。心当たりが多すぎてどの行動を改めたらいいの
か分からない。

まああれだ、明日から頑張ろう。うん、そうしよう。

第13戦 それぞれの思惑と価値観

話してみると勇者サマのお友達、ピールはいい子だった。

頭は悪くないし、自分の意見も弱腰ながらちゃんと言える。その上礼儀正しいし素直である。ブラボー、どこかの勇者サマとはえらい違いだ。

性格もいい上に見た目がそこそ愛らしいとあって、うちのモンスターたちの間では勇者サマ派とピール派が出来そうな勢いである。あんたたちホントに何なの。

ちなみに色々と話しあった結果、ピールは朝食を自宅で取ってからうちに来ることになった。アリギ村からこちらまで来るのに空きっ腹を抱えてくるにはキツイからだ。隣村とうちのごとく、ぶらり散歩気分で来れるほど甘い道のりではない。

帰る時はその逆で、うちで夕食をとってから帰る。空きっ腹を抱えて以下略。

もともと勇者サマもうちで三食食べているし、今更子供が一人増えたところで大差はない。ピールの帰る時間が遅くなりやしないかとちよつと気になるくらいである。

それにしても、私はまだ一応十代だというのになんで私は保護者みたいなこと考えてるんだろ。どれもこれも、ガキンチョ勇者サマとハゲブラザーズのせいだ。くそ。

まあそいつらに対する報復は今度にしよう。

結局のところ、ピール少年はうちが魔王城だと理解したようだった。私がツキバ村の魔王だということも。

しかしそれで怖がるかというとまたそれはそれ。この幼い少年は

頭のネジが何本か抜けているのか、はたまた類稀なる性善説の持ち主なのか、私やモンスターたちが自分たちを害するとは一向に考えていないようである。多少脅してみたが、怯えるそぶりもない。この子供の危機管理能力は大丈夫かと心配になる。

尾を振る犬は打たれないと言うが、まさに至言だ。ここまで無警戒に信頼されるとそれに報いようと思ってしまうのだ。

……私ではなくモンスターたちが。

ピール少年来訪初日ということである程度の今後についての取り決めが終わると、モンスターたちはここぞとばかりに張り切り、ピールと、そして遅くはなったが勇者サマの盛大な歓迎会を開催した。せめて私に許可を取ってからにしてほしいと思うのは間違いだろうか。豪華に飾りつけられた居間と豪華な食事を見て乾いた笑いが浮かぶ。

っていうかお前ら毎日勇者サマ歓迎してるじゃん。別に勇者サマの歓迎パーティーはいらないか？

ま、酒がたつぷり出てきたので私としてもそれほど文句はないんだけどね。私のご機嫌取りのためだと分かっているても酒が出てきたらまあいいかなと思ってしまう。ちょっと情けない気がしてきた。

ま、とにかく歓迎会なのだ。

本来、主賓は子供二人でもてなすのは家主である私の役割なのだが、何が悲しくて子供二人を歓迎せねばなんのか。個人的な思いとしては、さっさと家に帰って親の手伝いでもしてるところと思う。

ま、邪魔をするつもりはないが、好意的に迎え入れる謂れもない。

私は歓迎会のすべてをモンスターに丸投げし、ローテーブルにいくつかのつまみをおいて、ソファで酒を飲むことに徹した。ジョシュを始めモンスターたちには呆れた顔をされたが、知ったこっちゃない。

歓迎会と称するだけあって、テーブルの上には子供が好みそうな食べ物が目白押しだった。ハンバーグだのフライドポテトだのパスタだのコロツケだの、脂っこいことこの上ない。いや、私も好きだけどさ。デザートはプリンにケーキにシュークリーム。一体いつの間に用意したのか。

っていうか、もしかしてピールが来るってモンスターたち分かってたんじゃないか？　そういえば今朝はカメを見なかったし。あいつらこういうところは無駄に手回しがいい。

関係ないが、この前厨房につまみ食いに侵入した際、勇者サマ専用なる戸棚を発見した。魔法で鍵がかかっていたためぶっ壊して確認したのだが、中身は勇者サマの好きな料理のレシピや、勇者サマの苦手な食べ物とそれをいかに克服させるかの試行錯誤を記したノート、それに色々なお菓子の材料が入っていた。お前らは勇者サマの母親か！　と突っ込みたくなったのは記憶に新しい。

酒を飲みながら勇者サマ達の様子をちらりとうかがう。モンスターたちに囲まれた子供二人はジョシュの通訳を介して和やかに会話をしているようだった。会話というか、勇者サマとピールの会話にモンスターがやんややんやと言っているという方が正しいかもしれない。

ピールはこちらを気にしているようだったが、私は知らないふりをした。まあその辺はジョシュが上手いこと丸めこんでくれるだろう。子供は子供同士で仲良くやってればよいのだ。

そもそも私は魔王。勇者サイドの人間と仲が良いのはよろしくない。下手に情が移っていざという時に殺せなくなったら困る。

その後、ちよいちよいこちらにちよつかいを出してくる勇者サマを適当にあしらいつつおつまみを死守しつつ歓迎会は進んだ。

なんであの馬鹿勇者サマは自分の分があるのに私の皿から取るうとするのか。謎だ。

日が沈む前に歓迎会はお開きとなった。お子様二人はお土産も持たされて元気に帰っていく。私はそれを見送らずに私室へと引っ込んだ。

しばらくしてノックの音がした。入ってきたのは予想通り、ジョシュだった。

「で、どんな感じ？」

私が問えば、ジョシュはくいつと眼鏡を上げた。

「使えると思いますよ。もともと勉強熱心なようですし」

「そう。体の方は？」

「少し小柄ですが健康ですし、家の手伝いをしていることもあってそれなりに筋肉はついているようです。体力には自信があると」

主語を省いた会話は、先ほど家路についたピールのことだ。歓迎会の最中、ジョシュが熱心に通訳していたのも今後どのくらい使えるか探るためだと睨んでいたのだが、どうやら当たりのようだ。

ピールには悪いと思うが、私は魔王。使えるものは親でも使う。

……いや、自分の母は怖くて使えないかも。

とにかく、今後の勇者サマ教育にどれくらいピールが役立つかを調べておくのも大事なのだ。それによってジョシュのスパルタ加減も違っただろうし、巻き込まれる私の苦労も違う。特に後者は重要だ。ピールが優秀なら私はまるっと彼に投げたい。

と、思っていたのだが。

「もちろんお分かりでしょうが、魔王様には明日からも引き続き彼らと一緒に授業を受けてもらいますからね？」

ジョシュが聞き捨てならないことを言った。

「^{ピール}ご学友がいたら十分じゃないの？」

言外にサボりたいと主張してみたのだが、ジョシュは無慈悲にも首を横に振った。

「敵を知り、己を知らば百戦危うからずと言いますし」

兵法なんて私にはどうでもいい。平和に魔王してたらそれでいいのだが。

ふとジョシュの目つきが厳しくなった。

「そもそも私は魔王様の助手として造られたモンスターです。まさかお忘れじゃないですね」

なんか『そもそも』以降の部分をめっちゃ強調された。そう

いえばそうだったなあ。すっかり忘れてたけど。

「ベンキョウジョシュモンスターだもんねえ」

略してベンジョ、と言おうとしてジョシュの殺気を浴びた。怖つ。ジョシュってばそんなに嫌だったのか。いいじゃん、ベンジョ。レトロで。私は願ひ下げだけど。

それはさておき、私はジョシュの気迫に負けずに言い募った。

「勉強の助手っていうのは、あくまで勇者サマの勉強の助手であつて、私の助手としてっていう意味じゃなかったんだけど」

「勉強の助手なら、彼の勉強を魔王様が教えて下さるんですか？」

「まさか」

「ですが勇者教育を引き受けたのは魔王様です」

「配下のモンスターに仕事を割り振るのも魔王だよね」

「こればかりは配下に任せきりにしていいものではありませんよ」

「配下を信用してるのよ」

「その信用に答えますからぜひとも間近で見えて下さらないと」

お互い相手の台詞に食い込むように言葉を投げかけ合う。無言で睨みあうが、やがて私はため息をついて両手を挙げた。まあ、仕方ない。今回は譲っておこう。

それにしても面倒くさい。心の底から面倒くさい。

「授業に参加してもいいけど、ソファの上で寝っ転がって見てていい？」

本読んだりしながら、と言い終わる前にジョシュの鞭が唸った。痛い。

「私のモチベーションが下がるので却下です」

ジョシュのかよ。

「もちろん、彼らのモチベーションも下がるでしょうね。そもそも魔王様は、自分より幼い子供たちが一生懸命勉強に励んでいるのに、

自分一人がその傍で遊んでいて心苦しくならないんですか？」

ジョシュが実にトゲトゲした口調で言う。

私はジョシュの言う様子を想像して首を傾げた。

何かしら小難しいことを喋るジョシュ。一生懸命ノートを取る子供二人。その後ろでソファに寝っ転がって雑誌を読む自分。その状態は、

「すっごく気分いいけど？」

直後にジョシュの教育的指導が飛んだ。

その後、一時間ほど正座させられ説教を受けた私は勇者サマ達と一緒に勉強することを約束する羽目になったのだった。

前途洋々過ぎて涙が出そうだ。まったく！

第14戦 敵を知り己を知らばスパルタ（前書き）

今回は世界観とか勇者サマたちの属性とか能力値とかその辺の話です。

第14戦 敵を知り己を知らばスパルタ

ピールと一緒に勉強（というか正しくは勇者修行？）をすることになったので、一度勇者サマともども二人のレベルと能力値を計測しようということになった。

ここで簡単に説明をしておくと、個人のレベルと能力値というのは計測せずともある程度自覚できるものである。ちなみに私の母は「分かるわけあるか！」とよく言っていた。異世界人である母には関知できないもののようである。

当初、勇者サマの口から聞こうとしたのだが、彼奴は自分のレベルを999とか嘯いたので詳細は不明だった。なんでそんな分かりやすい嘘をつくのかあのガキンチョめ。

レベルの上限は1000だと言われているが、生きているうちにレベル800を超えることができた人間はそれこそ伝説の勇者ぐらいなもんである。伝説によるならその勇者がいたのは混沌とした暗黒時代、一步町から出れば凶暴なモンスターが際限なく襲ってくるような状況だったらしい。その当時は普通のモンスターが弱めの魔王ぐらいの強さ、すなわち最低でも私以上に強かったらしい。平和な時代に生まれてよかった。

現在レベル500を超えている勇者は旅の扉で繋がっている星すべてを合わせても、数えるくらいしかない。一般的な勇者は300前後、400を超えれば大体敵なしと言われる。弱めの勇者でも200ぐらいはあるんじゃないだろうか。一般人のレベルは大体二桁、屈強な町のおっちゃんなんかだと100から150の間くらいだろう。冒険者などは200ぐらいが平均である。

冒険者と勇者の平均レベルに差があるのは、勇者という職業特有の事情がある。

概して勇者はこき使われる。何しろ勇者は死んでも生き返る。つまり何度でもリサイクルできる。弱い勇者も何度も死ぬくらいの経験をしたら強くなる。一般人なら一回死んだら即終了である分、修行の仕方や経験の積み方にも自ずと差が出てくる。

で、勇者特有のアドバンテージがある分、普段ですら修行をしているというのに、ひとたび困難が起これば事件解決に駆り出される。それにより、あらゆる無理難題に挑む勇者たちの獲得経験値はちょっとしたものになるのだ。無論、かなり辛い目には遭うだろうが、勇者に依頼をする一般人にとっては他人事なので痛くもかゆくもないのである。

さて本題に戻ると、このガキンチョ勇者サマは新米勇者。経験つつたつておつかいと日々の勉強ぐらいなもんである。レベル99どころか、100あるかも怪しい。適性やら属性やらもチェックしておくことで今後の修行に生かすこともできるだろう。

と、いうわけで。勇者サマの実力や武器の適性をみるためにも、私は測定石を使うことにした。

測定石というのはその名の通り、指定した相手のレベルなどを調べる一種の魔法道具である。魔法を使えるなら同じ効果の魔法があるのだが、測定石を使った方が確実に精密である。私も疲れないしね。

測定は鍛錬所で行うことにした。勇者サマの測定結果を見ようとモンスターたちが詰めかけた結果である。

瞳を爛爛と輝かせて集まってくるモンスターたちは正直キモい。私は近くにいたピールに尋ねてみた。

「ピール、こいつらどう思う?」

「みんなオキ兄ちゃんのこと好きなんだね!」

そうだね。君に一般的な感想を求めるのが間違ってたね。

勇者サマが鍛錬場の中心で測定石を握る。測定石はこぶし大の水晶っぽい鉱物である。握ってしばらくすると、測定石の中から緑色の光が浮かび出てくる。やがてそれは上空に浮かび上がり、意味ある文字となる。

勇者サマは測定が初めてなのか、魂が抜けてるみたいな表情になっている。いつそのまま成仏したら私としても楽なただけだ。私は浮かび上がる文字に目を移す。

種族	人間
性別	男
レベル	82

体力	250
魔力	30

攻撃力	33
守備力	70
力	31
素早さ	82
賢さ	26
魅力	54
運	132

思ったより、っていうかかなりレベルが高い。勇者サマぐらいの年齢ならレベルは50ぐらいかと思っていたが。それに能力もなかなかのものだ。魔力と賢さが低く、攻撃力と力がやや平均より低い、それ以外は平均以上のいい感じになっている。あれか、もやしっ子かつ馬鹿だけど逃げ足は速いんですみたいな。

っていうか、運いいなこのガキ。

ちなみに能力値の上がり方というのは、体力魔力は別として、1レベル上がるごとに全体で1〜7値が上がる。子供のころはよきよき伸びるが、大人になると伸びにくい。勇者サマのレベルならば能力値が大体50前後ぐらいが普通である。やっぱり勇者だからだろうか。でも勇者にしちゃ魅力が低いな。勇者の売りは異様なまでの運の良さと魅力の高さのはずなのだが。

さらに緑色の光は文字をつづる。

属性 光・火・雷

いかにも勇者かつ隣村の人間らしい属性だ。
属性というのは大別して八つある。

火 水 雷 地 風 星 光 闇

属性はいくつか持つことが出来て、勇者は必ず光属性であり、魔王は必ず闇属性である。

そして両親の属性もさることながら、生まれ育った土地を支配する魔王にも属性というのは左右される。

何故かという、魔王というのはいるだけで魔力をある程度ばらまいてしまうからである。成長する際に周囲の魔力を吸収して属性がある程度決まると言われており、そのためその地域を支配している魔王のばらまく魔力に影響されやすいということだそう。

私の母に言わせると、「普通信仰する神様とか守護神とかに影響を受けるもんじゃないの？」らしいが、そもそも神と呼ばれる存在が人間の近くに姿を現すことは滅多にないのだから仕方ない。

そういうわけだから、勇者サマの出身である隣村はあの大蛇魔王ミーミヤンジャの属性（雷）の影響をかなり受ける。

火の属性は両親からの遺伝だろうか。それともご近所であるツキバ村の先代魔王か、はたまたアリギ村のジジイの影響かもしれない。ジジイは確か火の属性が強かった。当人もたまに火を噴くし。

さて、属性自体にはいくつかの特性がある。

まず、魔法関係。

適性のある属性の魔法だと、上達が早く威力が強い。また、属性同士の相性によって効果的な魔法とか無効になる魔法とか色々ある。ややこしいので割愛。

次に精霊関係。

私は見えないので何とも言えないが、世には精霊というものが存在するらしい。で、その人の持つ属性によって契約が結べるとか結べないとか。ぶっちゃけ結ぶ気はないのでどうでもよい。

さらに装備関係。

レアではあるが、魔法具というものが世の中には存在する。魔法具と一口に言っても測定石のような魔法道具から魔法の属性を帯びた武器防具などの装備まで色々である。その中にはある一定の属性

を持つ人物でなければ使用・装備できないというものもあるそうだ。ケチ臭い。ついでに言うと、世間一般で言われる勇者の装備って要するに光属性の人間しか装備できない道具だったりする。まあ勇者は必ず光属性だからあながち間違いでもないかもしれない。

そして最後に、性格。

まあ誕生日占いはりのこじつけだとは思うが、属性とは性格に影響を及ぼすというので属性による性格診断というのがある。

ちなみに勇者サマの属性で言うと、

光は正義感が強く、純粹なタイプ。

火は情熱的、プライドが高い、突っ走るタイプ。

雷は目立ちたがり屋、瞬発力が強い、飽きっぽいタイプ。

という感じになる。

光の項目の『純粹』を『単純』に置き換えるとまんま勇者サマだ。属性診断も捨てたもんじゃないな。大蛇魔王のミーミヤンジャもアリギ村のジジイも性格占いにはこれっぽっちもかすっちゃいないけど。いや、ミーミヤンジャは飽きっぽいしジジイはエロにかけては情熱的だな。突っ走るし。エロ方面だけだけど。一部は当たってるのだろうか。

そんなことをつらつら考えていると、測定石から放たれた光は徐々に霧散していった。

「次はピールですね」

それまで熱心にメモを取っていたジョシュがピールに測定石を渡した。

ピールは緊張した面持ちで測定石を握って鍛錬場の真ん中に立つ。

再び測定石から緑色の光が現れた。

種族	人間
性別	男
レベル	64

体力	220
魔力	110

攻撃力	48
守備力	42
力	52
素早さ	28
賢さ	52
魅力	37
運	18

こちらも思ったよりレベルが高い。それに魔力もたくさんある上に賢い。ピールは思っていた以上の逸材だったようだ。勇者サマと組み手をさせてもかなりいい勝負になるだろう。

……運が悪いのは、勇者サマに振り回されてる辺りで察しがつく。どんまい、ピール。

属性 地・水

ありや、意外だ。アリギ村の子供なのにピールには火の属性がない。むしろ水属性がある。

正直予想外だったが、地も水もどちらも回復魔法が使えるはずなので、大いに活用させてもらおう。それに相性悪い属性も試しといったほうがいいだろうし。

ちなみに性格診断で行くと地はマイペースで楽家タイプ、水は癒し系かつ穏やかなタイプらしいがこちらもやはりまんまである。

測定石の光が収束する。

ピールは満足げな表情で測定石を持っていたかと思うと、私のところにトテテと歩いてきた。

そして小首を傾げて、

「はい、次はマオさんの番だよ」

「……………は？」

言われたことが分からなくて首を傾げる。
するとピールはきょとりとした顔をした。

「だって、マオさんも一緒に勉強するんでしょ？」

「そうだぞ、僕たちだけ測らせて自分は秘密にするなんてずるいぞ！」

勇者サマがピールの尻馬に乗って言う。黙れ猪突猛進イノシシタ
イプめ。

私はやれやれとため息をついた。

「私は自分の属性ぐらいは知ってるからいいの。それに魔王の能力
値なんて極秘事項に決まってるでしょ」

そりや近隣魔王のごとく強大な力を持つならいくらでも教えてや
ってもいいが、私は弱小魔王。日々己の弱点を隠して防衛するしか
ないのだ。

「ずるいぞ魔王！ ヒミツシユギなんて生臭いぞ！」

「当初から私の能力値測定するなんて言っただけじゃないでしょうが！」

っていつかなんだ生臭いって。それを言うなら水臭いだろ。私は
ナマモノか。

「せっかく測定石があるんだし測ろうよ。ね？」

ニコニコと笑ってピールが言うが、そんな笑顔にほだされるほど
私は甘くない。でも私の後ろで悶えてるモンスターたちが無理やり
測定してきそうでやや怖い。

どうやってこいつらをかわそうか、はたまた逃げ出そうかと考え
ているとき、ジョシュがこほんと咳払いをした。

「魔王様の能力値は私が責任を持って測っておきますので、お二人
は休憩してきて下さい。お茶の準備が整っています。休憩が終わっ
たら今日は体力づくりをしますのでそのつもりで」

威圧感たっぷりと言えば、お子様二人はよい子の返事をしてうち
に戻っていった。先生の言うことは素直に聞けらしい。あいつらの
中で私の位置づけがどうなってるかちょっと気になる。知ったら多
分へこむだろうけど。

「ジョシュ、ありがと。助かった」

去っていく二人を見送ってお礼を言っと、ジョシュは目を瞠った。
「何をおっしゃってるんです、魔王様。測定はしてもらいますよ」
「え」

逃げようとするとなんかそれを読んでいたかの如く腕を掴まれた。これだから頭のいい奴は！

「教育するのは勇者サマでしょ！？」

私が身をよじって逃げようすると、ジョシュは相変わらずの無表情で私を見た。

「ええそうですと。ですが魔王様が彼よりレベルが低くなつては大変でしょう？ そのためには魔王様のレベルも把握しておかないと」

もつともな意見ではあるが、なんか私もスパルタでしごかれることになりそうで怖いんだけど。っていうか絶対しごかれる。

「大人しくなさってくださいね」

そう言っと、ジョシュは私に無理やり測定石を握らせた。

淡い緑の光が浮かび上がる。

種族 半有翼人

性別 女

レベル 168

体力 400

魔力 600

攻撃力	5
守備力	102
力	63
素早さ	96
賢さ	122
魅力	77
運	30

属性 闇・風・星

ああもう、いやだいやだ。久しぶりに見る自分の能力値はやっぱあまりよろしくない。宵っ張りの朝寝坊を続けたせいかレベルの割に力と攻撃力が一向に上がっていない。まあこれはぐーたら生活になる前からそうだったんだけど。それに体力もない。

他の項目は平均値より低めだし、なぜか昔から運が悪い。運が悪いからこそ魔王にまでなっちゃったのかもしれない。

属性の風は父親譲り。有翼族は基本的に風属性だ。星属性は生まれ育ったところの魔王の影響だ。

性格診断によるならば、闇は偏屈、狡猾、自己中心的なタイプ、風は気まぐれで社交的かつ面白がりなタイプ、星は大雑把、ロマンチスト、面倒見が良いタイプ、らしい。性格診断は当たらずとも遠

からず、か。

ちよつと話はそれるが、この診断だと魔王になった奴は全員閻属性を持つわけだから、魔王は全員偏屈で狡猾で自己中心的な奴らだということになる。思い返すと実にその通りである。ちよつと悲しい。

「……レベルが168ですか」

私が現実逃避に走っていると、地を這う様なジョシュの声が聞こえてきた。

「普通の冒険者でもレベルは200くらいありますよね？」

「し、四捨五入すれば200でしょ」

十の位をだけど。

私が屁理屈をこねると、ジョシュは深々と、そりやもう深々とため息をついた。

「今後の体力作りには、魔王様も参加していただきます。異論はありませんね？」

冷え冷えとした声で言われて、否やを言える奴がいるだろうか。いやいやない。

こうして私もジョシュによるスパルタ特訓の生徒になることが決定したのだった。

第14戦 敵を知り己を知らばスパルタ（後書き）

補足説明

レベルによる平均能力値の出し方としては、体力魔力を別にして、

20歳まで レベル×4÷7

20歳以降 レベル×3÷7

のようにすると平均能力値になります。

体力については20歳まではレベル×4くらいが目安です。

魔力は適性によります。

まあ今後この能力値が活躍する話はほとんど出てこないのをご安心ください。

第15戦 本気の遊び トレーニング

早いもので、ガキンチョ勇者サマと初めて会った日からすでに一カ月が過ぎようとしている。もうすぐ夏本番がやってくる。ピールはともかく勇者サマは今や私以上にうちに馴染んでいる気がする。ちよっと、いやかなり図々しいぞ勇者サマ。

それはさておき、ピールが来てからも復習を兼ねて勉強をさらっと最初からやってみたのだが、ピールが賢いこともあってあつという間に終わってしまった。

深く学問を究めるのもありっちゃありだと思うが、勇者に必要なのはどっちかって言うとな腕っ節である。それにいつまでも勉強を続けるなんて退屈すぎる。私が。

何しろ何故か勇者サマと一緒に勉強することを強制されている私である。あんまり深く掘り下げた内容になるとついていけない恐れも出てくる。ジョシュはちょいちょい確認テストなるものをして、その点が悪いと勇者サマの場合はおやつ減、私の場合はおやつ抜きになる。私の方が大人だから、という理由らしい。差別だ。

まあこれでも母から色々無駄知識込みの英才教育を受けた身である。ペナルティの割合は一割を切っていた。

だがしかし、それでも毎日勉強漬けだとうんざりしてしまうのが人情ってもんだろう。

せっかく能力値の測定もしたんだし、魔法とか体術とか教え込みたいと思うじゃないか。もちろん私は見学で悠々と高みの見物だ。

先日のジョシュの説教などきれいさっぱり忘れていた私は暢気にそんなことを考えていた。

そして現在私は子供二人と鬼ごっここの真っ最中だったりする。

「魔王！ 逃げるなー！」

「待ってよー！」

待てと言われて待つ馬鹿はいない。

私は背後から聞こえてくる声でお子様二人の位置を把握すると、彼らの死角を目指した。

体術を教えるにしろ、まず基本は体力作りである。

全身運動の一環として採用されたのがこの鬼ごっこ（正しくは勇者ごっこ？）だ。

鬼ごっここのルールは至って簡単。

彼らが私を捕まえられたら勝ち。制限時間まで逃げ切ったら私の勝ち。ちなみに制限時間は一時間。地味にキツイ。

現状レベルの差があるので、圧倒的に私の方が有利なはずである。そのハンデを埋めるためか、お子様二人はいかな手段を用いてもOKというお達しが出ている。

ちなみに、負けると地獄の宿題三倍増量が待っている。私は嫌だ。絶対に嫌だ。この年で宿題とかありえない。

身体能力は私の方が上だし経験の差が物を言うはず、と思っていたが甘かった。

二対一は思いのほか厳しい。

まず勇者サマは異様にすばっこい。気を抜くとすぐさま追いつ

かれる。それにピールも洞察力に優れているのか、私が死角に隠れた後もすぐさま居場所を突き止められる。その上粘り強い。勇者サマの追跡をかわしたところにピールが待ち構えているんだからたまったもんじゃない。

鬼ごつこのフィールドが限定されているのも面倒なものだ。

鍛錬場を中心に、端から端まで一辺が二百歩程の五角形に結界が張られている。それより外には逃げられない。隠れる場所は少ない上に狭い。

「ほらほら、鬼さんあっち行け」

私は一応魔王。それなりに魔法も使える。私に半分流れている有翼族の血が潜在的に高い魔力を持っているのだ。

というわけで、背後に迫ってきた初歩的な幻惑魔法を勇者サマに掛けた。

勇者サマは呆気なく魔法にかかったが、次の瞬間にはすっ転んで地面とこんにちは、すぐさま正気に戻ってしまった。ちっ、しぶとい奴だ。鼻赤くなってるぞ。

一瞬そんなことを考えていると、ふと背後に人の気配を感じた。さっと脇に避けると、後ろから近付いていたピールが見事に空振った。

「あー!」

ピールが残念そうな声をあげる。

「気配の消し方はあと一步、かな」

背後を取るまでは良いが、獲物に近付いたせいで緊張して呼吸が荒くなつては意味がない。

ん？ っていうかもしかして呼吸が荒いのは単にピールの体力がつきかけてるだけか？

距離を取ってから二人を見てみると、どちらも肩で息をしていた。

開始からすでに四十分だ。私は途中で魔法使ったりしていた（見物していたモンスターにブーイングを飛ばされた）から体力の消耗はそれほどでもないが、翻弄されまくりのお子様二人はすっかり疲れしているのだろう。

もはやこの勝負は私が勝ったも同然だ。

「そろそろ降参しとく？」

私は闘技場の中心でニヤニヤと笑っていた。我ながら大人げないいや、でも私魔王だし。

「するわけないだろ！」

私の言葉に勇者サマがムキになって突っ込んでくる。

私は背後の木立に逃げ込もうとしたのだが、

「そろそろ頃合いですね」

ジョシュの言葉とともに、さつと結界の範囲が狭まった。

私達のいた修練場の周りを結界が囲む。驚いた勇者サマが固まっている。ピールはのんびり周囲を見渡していた。マイペースだな、相変わらず。

「ちよつと、ジョシュどういこと！？」

私が思わず振り返ると、結界の外にいるジョシュはしれつとした様子で言った。

「ええ、残り二十分弱ですので、範囲を狭めてみました」

みました、じゃない。いくらなんでも狭すぎる。端から端まで五十歩くらいしかないぞ。

「あ、それから魔王様はこれ以降魔法を使わないでくださいね」

「はあ！？ そりやないでしょ、ジョシュ。あんたは私に負けるっ
ていいいの！？」

いくらなんでも二十分もの間、魔法なしで子供と追いかけてこ出

来る自信はない。すでに明日は筋肉痛だろうと確信してるほど動いてるのに。

「いえ、是非勝っていただきたいですよ」

ジョシユの声は嘘臭いぐらい爽やかだ。表情が相変わらずの欠如しているが。っていうかそれ皮肉でしょ。絶対に皮肉でしょ。

「頑張つて足掻いてください」

……こいつ、後でぶん殴つてやる。

三分としないうちに私は結界の際に追いつめられていた。勇者サマとピールがじりじりと近付いてくる。なぜ二人が慎重なのかと言うと、さっき二人同時に飛びかかったのを私が避けたせいで頭突きあいになったからである。かなり間抜けだった。笑ったらモンスターから非難轟々だった。いいじゃん別に。ゆっくりと距離を縮めてくる二人に焦る。山もりの宿題なんてしたくない。

「ふん！ ここで会ったが百年目だ魔王！ 観念しろ！」

勇者サマが高らかに宣言するが、多分その慣用句の使い方間違ってるから。会ってまだ一カ月だから。

「えっと、恨みはないんだけどごめんね」

ピールが申し訳なさそうに言う。しかし彼も宿題をやりたくないのはご同様らしい。

近付いてくる二人を見ながら私は脳内で計算する。

そして即座に結論を出した。

「悪いけど、私も捕まる気はない」

にやりと笑って私は体に力を込めた。
そして力強く空へと飛翔する。

「なっ！」

「すっごーい！」

お子様二人が呆然として私を見上げている。ふふん、いい気分だ。

「ずるいぞ、魔王！」

勇者サマが喚く。が、

「魔法は使っちゃ駄目って言ったけど、空飛んじゃ駄目とは言われてないしー」

それでも私は有翼族のハーフ。普段は羽を体内に収めているが、その気になれば空を飛ぶことが出来るのだ。

これぞ切り札。高みの見物だ。

「はっはっは、私を捕まえられるもんなら捕まえてみたら？」

上機嫌で笑うと、モンスターたちから大人げないという声がかかる。いいじゃん、魔王なんだから。獅子は兎相手でも全力出すっていうし、魔王が勇者相手に全力を出すことの何が悪いのか。いや、むしろ全力を出すことと礼儀！決して自分がペナルティ食らいたくないからとか宿題面倒くさいとかそんなもん子供にやらせるべきだとかそういう理由ではない。ないったらない。

当初は飛び回る私を追いかけまわしながら喚いていた勇者サマだが、残り時間が十分を切った時点で癪癪を起して地面に寝転がってしまった。

卑怯だなんだと言っているが、そもそも彼の戦う相手であるモンスターやら魔王やらが正攻法で来てくれると思っっている時点でおかしい。っていうか、空を飛べるモンスターや魔王が不利な地上戦を続けるわけがないだろうに。

逆に粘り強さを見せるのがピールだ。先ほどから修練場に転がっている石やら木製の武器やら投げつけてきたりしている。

全部かわしているが恐ろしい。ピールは意外と手段を選ばないタイプのような。誰だあいつを優しいとか言った奴。それとも小さい子供が虫の羽をむしるのと同じ感じなんだろうか。どっちにしろアレだな。

「オキ兄ちゃんも手伝ってよー。手が届かないなら届くようにしよう?」

眉を下げたピールが言っているが、やろうとしていることを考えると空恐ろしい。癪癪を起こしている勇者サマは嫌そうな顔をして断っていたけれど。届かないんならもう知らない!　だそうだ。ホント、お子様だな。

そういえば昔、母に似たような話を聞いたことがある気がする。なんだっけ、ホトトギスっていう鳥が鳴かない時にどうするかみたいな話だった。ピールは鳴かせてみせようの人のタイプだな。勇者サマは殺してしまおう、のタイプか。きっとその言葉を残した人は勇者サマに負けず劣らず我がままだったんだろうなあ。

残り時間が三分を切った。

以前として勇者サマは地面に寝転がっており、ピールは私を落とそうと物を投げつけてくる。いい加減、ピールの腕も痛いだろうに出来ることならそういったものが絶対に届かない場所を飛んでいたかったのだが、結界に天井があつた上にもう一つ切実な問題が浮かんできていた。

飛ぶのに疲れてきたのである。

通常の有翼族にとって、空を飛ぶというのは歩くことと同じだ。運動不足でなければ大抵は何時間だって飛んでいられる。

だが、半分人間の血が流れている私にとって、空を飛ぶというのは走ることと同じくらい大変なのである。奇跡的によい条件が重なれば二時間ぐらいいは飛べるかもしれないが、普通は一時間くらい。それも普通に飛んでいて、だ。

さつきからひっきりなしにピールが物を投げってくるのを避けていたせいで結構な体力を消費している。例えるならばそう、障害物競争と走り込みを一緒にしているようなもの。ばれないように必死で平静を装っているが、体力が底を尽きかけている。

徐々に高さを保てなくなっていた。今は私の身長二つ分くらいの高さをギリギリ保っている。残り三分なので何とか切り抜きたいのだが、ピールの追撃の手が緩まない。

「マオさんごめんなさいー」

申し訳なさそうな顔をしながらポンポン物を投げってくる少年にちょつと殺意が芽生えた。

「ごめんで済んだら魔王はいらないっつーの！」

いや、別に魔王はトラブル収束させるための存在じゃないけどね。

そして残り時間が一分を切ったとき、一瞬気が抜けた私は高度が下がり、ちょうど勢いをつけてジャンプしたピールに足首を掴まれ

てしまった。

「やったあ！」

ピールが歓声を上げる。

「うげ」

私は潰れたカエルよろしくぐもった声を上げた。ピールに足首を掴まれたせいでバランスを崩し、地面に墜落したのだ。痛い。

「やれやれ。どうやらピールの粘り勝ちのようですね」

「見りゃわかんでしょ！」

半ば八つ当たりで言えば、ジョシュは鼻で笑った。

「ええ、改めて言われると反骨精神が沸くかと思ひまして」

こいつが笑うときって大概ろくでもないなこんちきしょう。

そして奴は悪魔の宣告を下した。

「それじゃあ、ピール以外の二人には宿題を出しますから、明日には提出すること、いいですね」

なんてこつたい。

私は疲労困憊で立ちあがることすら出来ない。体中が痛いし、ペンを持つのだって苦勞しそうだ。ジョシュをぶん殴って逃走するのは言わずもがな。

しかし元気な奴がいた。

「なんでだ！？　なんで魔王は捕まったのに僕も宿題があるんだ！？」

先ほどまで地面と仲良くしていた勇者サマがジョシュに猛然と抗議している。

「それはあなたが魔王様を捕まえようとしていなかったからです。棄権していたのだからペナルティは当然でしょう」

ジョシュが呆れたように言う。今回は私もジョシュと同意見である。っていうか、私一人でペナルティ食らうとかいやだ。死なばもるとも、旅は道連れ地獄行き。

ジョシュの言葉に勇者サマはぐつと言葉に詰まった。

「ピールは諦めずに色々試して魔王様を捕まえられたのです。普通

の子供なら癪癪を起して諦めてもいいでしょうが、あなたは自分が勇者であるということをお忘れなく」

勇者が背負う使命は、往々にして重大な使命だ。

私が知っている猛者で言えば、穴が開いて今にも決壊しそうな堤防を自分の体で半日近く塞いだとか、男手が所用でいなくなっている村を襲ってきた盗賊を一人で討伐したとか、はたまた村にいきなり開いたとかいう大穴（結局巨大モンスターの巣だった）に一人つきりでもぐりこんだりとか。一般人なら到底耐えられるものじゃない。肉体的にも、精神的にも。

「困難にぶつかってしまったら簡単に諦める、そんなことでは何もできないということを肝に銘じておくことです」

そう言うジョシュは見物していたモンスターたちを解散させて去っていった。

後に残されたのはオロオロとしたピールと、悔しそうに唇をかみしめている勇者サマと、微妙に決まりの悪い私。

「……………オキ兄ちゃん、大丈夫？」

ピールが心配そうに勇者サマの顔を覗き込んでいる。

勇者サマはばつと顔をピールから逸らした。

「大っ嫌いだ！」

誰に対して言った言葉かは分からないが、勇者サマは言い捨ててジョシュが去って行った方向とは反対に駆けだした。おお、青春チツクだ。

「兄ちゃん、待って！」

「待つもんか！」

ピールの制止にも関わらず、勇者サマは我武者羅に走って行った。

そして思いつきり結界にぶつかった。

どうやら結界を担当したモンスターが解除するのを忘れていたらしい。今回の結界は壁タイプだったので、かなりいい音がした。だからピールも止めたのに。

勇者サマは気絶したのか倒れたのちはピクリとも動かない。やば、死んだか？ 村に送り返した方がいいもしれない。触るの嫌だしピールに任せようかな。

「オキ兄ちゃん！」

ピールが慌てて勇者サマに駆け寄っている。

私は面倒事になったら即座に逃げられるよう、結界解除の魔法を使った。私は関係ゴザイマセンって奴だ。

「よかった……寝てるだけみたい」

勇者サマの安否を確認したピールがホッと息をついている。

ピール、それ寝てるんじゃないから。気絶だから。もしくは意識不明だから。

私は顔を引きつらせてつつ周囲を見渡した。こんなことが勇者サマ大好きな過保護モンスターにバレたらひどい目に合うこと請け合いだ。私は悪くないのに監督不行き届きだなんだと言われるに違いない。あのモンスターペアレンツどもめ。

周囲にモンスターがいないのを確認してから私は勇者サマに近付く。勇者サマはそりやもう見事に目を回している。

「ま、マオさん。どうしよう……？」

ピールが今にも泣きそうな顔でこちらを見ていた。
ので、

「おやすみ」

魔法でピールを眠らせた。

子供二人を抱えて移動するのは骨だったが、数分後には二人を下生えの草が柔らかい木陰へと移動させることが出来た。これで勇者サマとピールを仲良く並べておけば、激しい運動の後に疲れて昼寝をするお子様の図の出来上がりである。

うむ。あくまで子供たちが疲れて寝ただけだ。勇者サマが気絶したとか知らない。私のせいじゃない。全部夢だ夢。

子供だし、起きたら寝る前のことなんて忘れてるだろう。うん、完璧な証拠隠滅だ。

しかしさすがに疲れた。二十分も飛んだ拳句に子供抱えてえっちらおっちら歩いたのだ。すやすやと眠っているピールを見ると眠気が襲ってくる。

五分だけ寝ておこう。どうせ後は宿題地獄だし。

一時間後、一向に戻らない私達を探しに来たジョシュに見つかり、私と勇者サマの宿題の量はさらに増えたのだった。

第16戦 ローレンハルトの悲劇

ローレンハルトの悲劇というのをご存じだろうか。

ローレンハルトの悲劇、それはかつて勇者たちに震撼を与えた事件である。

+++

昔々、ローレンハルトという少年がいた。

ローレンハルトは美丈夫で、腕の立つ剣士だった。

彼には美しい幼馴染のマリーという少女がおり、その少女と結婚を約束していた。

ところがどっこい、結婚を半年後に控えたある日、彼は突然勇者になってしまった。

この場合の勇者になるというのは、思春期特有の自分は特別であるという考えにとらわれたとかそういうわけではなく、単純に勇者の職業に任命されたということだ。

基本的に勇者というのはある日突然正体不明の何者かによって任命されるものであるから、彼はその何者かのお眼鏡にかなったのだろつ。

おりしも、彼らの住む地域を支配する魔王が暴れまくって被害が目余るようになったころ。彼は当然のごとく魔王討伐に駆り出された。

帰ってきたら結婚しよう、と恋人に約束して。

さて、彼は討伐に向かう途中、ある酒場で情報収集をしていた。と思つたら翌日、彼は見知らぬ女とベッドで素っ裸で一緒に寝ていた。

見知らぬ女はひどく醜い顔つきだったが、ローレンハルトに無理やり襲われたと言い、ローレンハルトに責任を取るように迫った。その事實は瞬く間に広まり、ローレンハルトはその女と結婚せざるを得なくなった。

愛し合つた恋人にも別れの手紙を送った。

信じられないような現実から逃れたいのもあつて、とにかく使命が先だと魔王を倒しに向かったのだが件の女のことと散々魔王にかかわれ、動揺した拳句に死んでしまった。かなり間抜けだが、勇者も人間なのだという証拠だろう。

教会で生き返つたローレンハルトの目の前にいたのは、手紙と行き違い彼を心配して駆け付けた恋人のマリーだった。この時にマリーに事情を打ち明けられていたならば、ハッピーエンドもありえたかもしれない。

が、事実上彼の妻となる女はマリーを押しつけローレンハルトにしなだれかかり、熱烈なキスをマリーに見せつけるようにしたとい

う。

当然のことながら、ローレンハルトは振られた。

さらに悲惨なことに、その翌日には彼は勇者でなくなっていた。唐突に勇者としての資格がなくなっただ。恐らくローレンハルトは勇者の資格を与えた何ものかに見放されたのだろっ、というのが一般的な見方である。

そうして彼は仕事も信頼も愛する恋人も失ったのだった。

その後、ローレンハルトが討伐する予定だった魔王は、なんとマリーを口説き始めた。マリーさえ妻になれば暴れないと言い、何がどうなったのかマリーもそれを了承した。

その噂を聞きつけたローレンハルトが魔王の元に乗り込んだところ、すっかりラブラブとなった魔王夫妻によってコテンパンにされて追い返されたのだそうだ。殺されなかったのは魔王夫婦の慈悲だったのか、はたまた生き地獄を続けさせるためなのか。

結局ローレンハルトに残されたのは妻だけだったが、この女が醜い上に実に悪妻だった。

そのためローレンハルトのその後の人生は、そして最期は実に悲惨だったと言われる。

これがローレンハルトの悲劇だ。

+++

この話にはいくつかの裏話がある。

有名なところでいえば、ローレンハルトに襲われたというのが狂言だったということ。適当に酔いつぶしてそれらしく装ったらしい。勇者というのは概して生活が保障されるので、妻となつて一生安楽な暮らしをと期待してとのことだ。

もうひとつ有名なのは、魔王は元々ローレンハルトの恋人であるマリーに懸想していたということ。これは結婚後ののろけ話でその魔王自身が語ったことである。マリーの結婚が嫌で暴れていたのだとか。といっても件の女はその魔王が仕掛けたわけではないが。

当時この話は勇者たちを震え上がらせた。

勇者というのはどの村でも確保しておきたい人材である。その上将来がかなり保障されている上に死んでも帰ってくるし生き返るしで配偶者としてはなかなかの好物件である。

ゆえに、どの勇者たちも多かれ少なかれ、その手のお誘いを受けたことがある。権力者の娘だの普通の村娘だの枚挙に暇がない。遊びから本気まで、そういったお誘いに乗る勇者も少なからずいることは事実だ。

しかしその責任を取らされた拳句勇者としての資格を失うなどという恐ろしい事態は、空前の出来事だったのだ。

逆に学者たちは非常に興味を持った。どういう要素が彼から勇者の資格剥奪に至らしめたのか。常に幸運に見舞われるはずの勇者がこのような悲劇の主人公となったのはなぜなのか。ローレンハルトが死んで一般人の記憶からこの悲劇がすっかり風化してしまったても、学者たちの間では今なお激しい討論がなされている。

学者たちの探究心はローレンハルト本人からしたら余計なお世話に違いない。というか、古傷をフオークでえぐられてる気分だろう。いや、本人もう他界してるけど。

ちなみにこの逸話は、魔王の間では抱腹絶倒の笑い話として広まっている。勇者を殺すには刃物はいらぬ、醜女一人がいればいい、と魔王総会の後の酒盛りなんかでは今でも言われているくらいだ。

で、そのローレンハルトの悲劇をなぜ今さら言つのかというところ、

「ある程度女性あしらいが出来ないといいようにされちゃうと思うのよね。あとそういう知識」

「まだ彼らには必要ありません」

「いや、でも世の中には小さい男の子が好きっていう趣向の女性もいるって言うし。エンガチヨ」

「なんですかその『えんがちょ』というのは」

「どうでもいいでしょ、んなこと」

勇者サマの教育プランについてジョシュと話しているからだっさりする。

「大体ローレンハルトだって女性経験がなかったからその女性の言ったことをうのみにしちゃったわけでしょ？　ちよっと経験だか知識だかがあればやったかやってないか」

「魔王様。女性がそのようなことを言うのは感心しません！」

私が皆まで言う前にジョシュが遮った。別に女性だろうと言うときや言うんだと反論しようとしたが、

「……ジョシュ、顔赤くない？」

「幻覚です」

「いや、赤いよね」

「魔王様の目に赤い紗がかかっているだけです」

こいつ言い訳のセンスないな。っていうかうるたえ過ぎだろう。目が泳いでる上に普段の鉄面皮がいささか崩れている。

私はジョシュが顔を赤らめているのを見ながら驚いていた。まさかこいつにこんな弱点があるとは。でもまあ納得できるところはある。見た目だけは大人だし知識もあるが、年齢的にまだ生殖も必要ないし。モンスター間では若い女の子やら男の子同士でやるような猥談もしないに違いない。形態が違いすぎるし。

「ジョシュもまだ若いもんねえ」

若いつていうかまだ0歳だけど。今で0歳1カ月か。若いつてレベルじゃないな。

「……………魔王様の品性が低いだけでは？」

ジョシュが不機嫌に私を睨んでくる。

しかし赤い顔で睨まれたところで怖くもなんともない。むしろニヤニヤしながらジョシュの顔を覗き込む。ジョシュはものすごく嫌そうな顔をして顔をそらした。

「そうかな？ 実際問題勇者はあちこちから引く手あまたでしょ。強硬手段に出ない人間がいなくとも限らないし」

それぐらい勇者という存在は一般人にとっては欠かせないものなのだ。あと必要性云々の前に、勇者は美形が多いっていうのも理由にあると思われる。うちに来てる勇者サマは微妙だが。いやでも成長期前だしな。

「ですがまだ早いと思いますよ。少なくとも、まだ彼は勇者として使える段階ではありません。最低でもあと一年は勇者として必要な技量を仕込む必要があります」

きりつと顔を引き締めたジョシュが言う。

……………個人的に、勇者には女に限らず人をたらしこむ技術も必要だと思っただが。そして適度にいらぬものは受け流す技術も。もしかしたら成長する中で勝手に育つかも说不定いけど。

だが、

「それもそうだね」

私は軽くうなずいてジョシュに同意した。

なんとなくだが、これ以上言い募ったら藪蛇になりそうな気がするからだ。逃げ道は適度に残しておいてやろう。

それに今回はジョシュの弱みを握れたのだ。大収穫だろう。私なんぞに言われたくないだろうが、心の中でこっそりつぶやく。

ありがとう、ローレンハルト。

第17戦 運はいいけど頭は悪い？（前書き）

能力値出てこないとか言っていました。が運の項目についてだけ若干補足的な話です。

第17戦 運はいいけど頭は悪い？

それは勇者サマの素朴な疑問だった。

「能力値の運って、どういう意味なんだ？」

勇者サマの言葉にピールが首を傾げた。

「運って、そのままの意味じゃないの？ ついてるかついてないかってことでしょうか？」

「でも変じゃないか？」

勇者サマがなおも言い募る。

「レベルが上がれば能力値は上がるんだろう？ ってことは、レベルが上がれば上がるほど運が良くなるって変じゃないか？ 運が良いつて、幸せになるってことじゃないのか？」

「別に変じゃないと思うけど……？」

ピールはいまいち理解できていないようだ。能力値は生まれたときから馴染みのあるものだから疑問に思ったことがないのだろう。

ちなみに私は勇者サマの言うことが理解できた。

というか、その疑問は母が昔幾度となく口にしていたものなのである。

「つまり勇者サマは、なんで経験積んだだけで他の人より『運』っていう身体能力じゃないものが良くなるのかって不思議なんだろう？」

私が言い直すと、勇者サマは大袈裟にうなずいた。

レベルが上がるといいうのを言いかえると、経験を積む、修行する

ということになる。

修行することによって攻撃力や守備力、力や素早さが良くなるのは当たり前だ。

経験を積むことによって賢くなったり、人間が磨かれて魅力が増すのもまあ納得できる。

が、運というのは能力云々が関係ない。人力が及ばないからこそその運なのだ。

とはいえ、「日本の科学力は世界一いい！」と言っていた母からすれば、筋肉量でなく能力値で強さが決まるということ自体が非科学的でおかしいと言っていたがそこは深く考えないようにしている。その辺は学者の仕事だ。

能力値について言えば私も色々な見解を持っているが、ここは先生に任せるべきだろう。

ジョシュへと視線を送ると、奴は真面目腐った顔でうなずいた。

「そもそも、運の項目が良いとなる状態というのをお教えしましょう」

そういつてジョシュは黒板に文字を書いた。

エイサ	レベル100	運50
-----	--------	-----

ホイサ	レベル100	運100
-----	--------	------

書き終わるとジョシュは小さく咳払いをした。

ちなみにエイサもホイサも過去の比較的有名な勇者の名前である。

「この二人がこれ以外の能力値が同じとき、レベルを上げるために

珍しい薬草を取ってくるようになりました。さて、どうなるでしょう」

あ、なんとなく想像ついたぞ。

「エイサは見つけるのに苦労するけど、ホイサはすぐに見つかると思う」

ピールが答えると、ジョシュが満足そうにうなずいた。

「その通り。しかし得られる経験値は二人ともほとんど変わりません」

「ええ！？　なんでだ？」

勇者サマが不満そうな顔をした。

気持ちに分かる。が、勇者サマは勇者である限りホイサ側の人間なのである。魔王がやさぐれて勇者に冷たくする理由も分かるというものだ。

「やることの難易度は変わらないからです」

事実というのは時に冷酷である。

「要するにー、苦労するのはこっちの勝手ってこと？」

私がいなりしながら言うと、ジョシュはうなずいた。

「この場合はエイサとホイサが運以外は同じ能力値という仮定です。で、苦労の有無にかかわらず同じ経験値になります。逆にホイサが足が悪い、目が悪いなどの条件があれば簡単に発見出来ようと経験値が多くなります」

「ずるくないかそれ！」

勇者サマは憤然としている。

「運というのはそういうものです」

「それじゃあ、レベルが上がると運が良くなるってというのはどういうことなの？」

私は話を戻した。個人的に運の能力値が低い人間としては気になるところだ。

「人間というのは、生きているのが幸運であるという前提があります」

……なんか哲学的なのが来た。

「レベルが上がるということは、それだけ経験を積んでいるということになります。レベルが上がれば上がるほど、より多く、より重い経験を積まなければなりません」

確かに子供のころはともかく、大人になっただけレベルが上がりにくいよなあ。昔はちよつと体を鍛えたくらいでレベルが上がったのに。

「レベルがたくさん上がるほどの経験をしても生きている。そこそ運がいいということですよ」

「もーちよつとギタイテキに説明してほしいぞ」

「それを言うなら具体的、です」

律儀にもジョシユは勇者サマの間違いを訂正していた。さすが腐つても嫌味でも陰険でも先生だ。

「そうですね、先ほどのエイサ達の話で考えてみましょうか」

そう言つてジョシユは黒板に人間らしきものとモンスターらしきものを書いた。ジョシユを今度から画伯と呼ぼうかどうか迷うくらいの素晴らしい出来だ。なんだろう、アバンギャルドな抽象画？

「……………先生、それ何だ？」

「オキ兄ちゃんっ、そういうのは言っちゃ駄目だって！」

実に正直な疑問を口に出した勇者サマの口をピールが慌てて塞ぐ。ちよつと遅いけど。

「……仮にエイサとホイサが同条件下で強いモンスターと戦うことになったとします」

なんとかスルーしたジョシュだが、心なしか元気がないようだ。
どんまい。

「運のよくないエイサは自分より強いモンスターに負けて死んでしまふことになります。運のないエイサの場合は自身の経験や力に大きく頼ることになるからです」

そう言ってジョシュはエイサの絵の上から大きくバツ印を書いた。
「しかし運のいいホイサは『運よく』攻撃を避け『運よく』モンスターの急所を突くなどして、『運よく』モンスターを退治することができてレベルが上がるという結果になります」

言いながらモンスターっぽいものの絵の上にバツ印をつける。そしてホイサの上に花丸を書いた。

「普通なら命が危険な経験を積んでレベルを上げる。レベルが高いほど運がいいというのは、そんな経験をしても生きていることが幸運だからです。死んでいてもおかしくないのですから」

「でも、運が悪くてもレベルが高い人って結構いるよね？」

ピールが首を傾げた。うん、知らないだろうけど私がそうだね。

そして君も将来的にはそのうちの一人になると思うよ。

「その場合は死なないというだけで、それ相応の苦労はするでしょうね」

運がないって救われないなあ。

って、待てよ？

「それってさ、例えば同じモンスターと戦って勝ったとしても運が良ければ軽傷、悪ければ重症ってこと？」

「その通りです」

うへ。嫌になるなあ。っていうか経験値が一緒なのがとても腹立たしい。っていうか私もそうなるのか。能力的に見て、私が一番運がないし。

「でも細かいシチュエーションの違いとかあるじゃん」

「その辺はまだ学者にも解明されていません。そもそも、経験値というものが主観に頼るところが大きいので」

ジョシュの言うように、数値で分かる能力値と違って経験値というのは数値化されない。なんとなく体感で『経験値を得られた』と知るのだ。ついでに次のレベルに上がるまであとどれくらいの経験値をといても体感でしか分からない。

どこぞのすごい神殿の神官なんかは分かるという噂だが、本当だろうか。

「最後に簡単にまとめましょうか」
と、ジョシュが言う。

三対の目がジョシュに注目するのを確認してからジョシュは実につきっぱりと言い放った。

「運も実力のうち、ということですよ」
「ってことは、僕は実力があるってことだな！」

間髪いれずに私が勇者サマを殴ってしまったのはしょうがなかったと思う。

第17戦 運はいいけど頭は悪い？（後書き）

調子に乗った人間は殴りたい、それが魔王クオリティ。

魔王の回想　　魔王試験（前書き）

真央たちのいる世界で話されている言語は限りなく日本語に近いナ
ニカということで認識しといてください。

魔王の回想　　魔王試験

夏が来れば思い出す　。

遙かな故郷や遠い空ではなく、魔王試験のことだ。

あれは三年前の、割と冷え込んだ夏のことだった。

春過ぎに母を亡くした私は住んでいた家も追い出され、さらには所持金も底をついて木の根を食べたり草を食べたりしてなんとか食いつないだ。

正直な話、当時の記憶はおぼろげである。母の死がショックだったというのもあるかもしれない。しかし一番の原因は空腹というか飢餓だろう。当時空腹のあまり幻覚が見えた。綺麗なお花畑と流れる川の向こうで手を振っている母が見えたこともあった。マジでくたばる５秒前的な状況の連続だったのだ。つくしなんかを食べると当時のしょっぱい記憶が沸き上がるので二度と食べたくない。私は調理済みの食材しか食べないのだ！　あと果物ね！

それはさておき、空腹のままに食物を求めてさまよっていた私は、気付けば『さまよう扉』をくぐっていたのだった。

空腹のあまり歩けなくなった私は地面に倒れ伏し、何か食材が口の中に飛び込んでこないかなと考えながらぼんやりしていた。

そしてその視界の中に、二本の足が見えた。

「おい、どうした？」

上から声が振ってきたが、その時私が考えていたのは「革靴って茹でたら食べられるかな」だった。飢餓ここに極まれり。

「おい、お前名前はなんて言うんだ？」

問われた私がなぜ名乗ったのかと言えば、多分条件反射である。思考回路はショート寸前。っていうか燃料切れでストップ寸前だったのだ。

「そら、の……ま、お……」

喉がからからだったせいで名乗りがえらく切れ切れになってしまった。

それを聞いた男 ええい回りくどい。実はトウイだったのだが、しばらく黙っていたかと思えば弾けるように笑いだしやがった。

その時私が考えていたことと言えば、やはりお腹空いたの一語に尽きる。笑うなら飯をくれ。

私の考えていることなど知る由もなく、トウイはしばらくして笑いが治まると、私を担ぎあげた。

「よしよし、本来ならあまりよろしくないが、お前さんの心意気に免じて特別に会場まで運んで行ってやるう。いやあ、そんなボロボロのなりでも虚勢はるたあ面白いじゃねえか」

カカカと笑いながらトウイの肩に担がれた私が考えていたことと言え、やはりお腹空いたの一点張りだった。

もしこの時にトウイが私の名乗りを「空の魔王」と聞きちがえていた上、彼の言う「会場」というのが、魔王試験の受験会場だと知っていたら私は全力で拒否していただろう。

が、空腹のあまり思考が鈍っていた私は食物以外に関心がなかった。貧すれば鈍する。っていうか後の祭り。

魔王試験会場についた後、トウイは会場のスタッフ（いるのだ。不思議なことに）にある程度の食べ物を用意させた。食べ物が視界に入った瞬間私はそれをつさって食べた。飢餓で死にそうだったのだ。割と本気で。

それをトウイは笑いながら見ていた。試験の説明などは一切なかった。

よって、胃の中に物を納めてひと心地ついた私はいきなり魔王試験の試験官たちの前に引きずり出されていた。

「えっと……………」

私は絶句した。

目の前には私の身の丈よりはるかにでかい凶悪な面構えの魔王たちがずらりと並んでいたからである。その数、十五人。試験官はベテラン魔王の持ち回り制である。私は向こう百年は担当しない。ラッキーだ。

ところで魔王試験に筆記試験はない。後に知った私は地団太踏んだ。筆記があればあんな寿命が縮むような思いはしなかったのに、と。っていつか合格すらしなかっただろうけど。

とりあえず見ず知らずの（知ってるわけがない）魔王たちに囲まれた私は恐慌状態に陥った。っていうかそもそも魔王試験の存在すら知らなかった小娘である。トウイも何も説明しなかった。トウイは私が魔王試験に参加希望だと思っていたからである。しかし単なる行き倒れだった私は倒れてたと思ったらどこかに連れていかれてご飯を貰えたけど目の前に魔王がいる状態でしかも魔王だと知らなかったなので凶悪なモンスターがいるとしか認識できなかったため、すわ餌として用意されたのかと疑ったのも当然のことだ。

そういうわけで、私はかなり怯えていた。というかテンパっていた。

「名前は」

重厚な声を発したのは赤い鱗を持つ巨大な半魚人だった。ドラゴンではない、半魚人だった。何でこんなのが陸上にいるんだといぶかる間もなく、またしても私は反射的に答えていた。

「空野、真央っ」

語尾が震えてしまったのは仕方がないことである。何しろ当時私は単なる有翼人のハーフだったのだから。

で、何が起るのかと戦々恐々だったのだが、唐突に空気が震えた。

それが魔王連盟でも随一の笑い上戸、ボシユヘルの笑い声だと知ったのはかなり後のことである。

何も知らなかった私は、何やら衝撃波が体を襲ってきたのでつい自分が食われるのかと思い、なんとか逃げようとした。

魔王試験の会場はちよつとしたコロシウム風になっており、青空が見えていた。

一か八かの可能性にかけて、私は大きく自分の翼を広げた。
のだが、

「つく」

誰かが嘖き出すのを皮切りに、

「あーはっはははははは！」

「ぎやはははは」

「ひっひっひっひ」

とまあ、色々な笑い声が試験会場に響き渡ったのだ。

「おまつ、どんな翼の色だよそれっ」

腹を抱えながら言ったのはトウイだった。

「まだ魔王にもなっていないのに二つ名決めてるわ、変な翼の色だわ、おいしすぎるやろっ」

ニヤニヤ笑いながら試験官の一人が言う。

未だこの時の勘違いが残っているせいで私は他の魔王から二つ名として「空の魔王」と呼ばれているのである。本名だというのに。っていうか魔王じゃない一般人が魔王名乗るわけあるまいに。私はそこまで向上心豊かじゃない。っていうか魔王目指すってむしろ下降してる気がする。

ところで、有翼人の翼は大抵が美しい色合いをしている。有翼人にとつての翼は、異性を引き寄せるチャームポイントの一つであるからだ。

ところがどっこい、なぜか私の翼の色は絵具バケツの水のような、もしくは土留め色のような、とかく微妙な色合いになっている。地球人の母とのハーフだからかもしれない。こんな色の翼に惹かれる人間がいたら私が引く。自覚しているので普段翼を出すときは魔法で色を変えている。が、その時はそんな余裕はなかったので地の色を見られてしまったわけだ。

色が変なのは自覚してはいることだったが、他人に言われると腹が立つ。

「うるさいっ！」

無謀なことに、私は件の試験官に向かって攻撃魔法を放った。普通なら擦り傷ができるであろうその魔法は、私が極限まで弱っていたせいでひよろひよろと地面に墜落した。弾けた色は私の翼と同じ色だった。ついでに言うとな私の人生と同じ色である。バラ色ではない悲劇。私以外には喜劇だろう。ちくしょう。

そのことが駄目押しとなったのか、試験会場は笑いの渦に飲み込まれた。

そして笑いが治まった後に一番偉い試験官はこのたまったのだ。

「面白かったから君、合格ね」

それでいいのか、魔王試験。

ちなみに、年に一回開催される魔王試験には本来魔王連盟に加盟している魔王から情報を聞き出し、試験会場まで自力で行くものらしい。基本的に五割は道中で死ぬというハイリスク。

私の場合、さまよう扉で行きついた先が魔王試験会場のすぐ近く（ついでに言うとなウイのサボリ現場近く）だったので参加できたのは100%運である。幸運か悲運かは判断がつけがたい。

こんな馬鹿げたノリで魔王試験に受かるのは一年に一人くらいらしい。合格枠としてお笑い枠が設置されているに違いない。毎年出るのかよこつという合格者という突っ込みは無粋というものだ。

とにかく、こうして私の魔王人生の幕が開けたのである。魔王ってどうやったらなるの？ というお子様の純粋な質問に心が痛むのは私だけのせいではない。

魔王の回想　　魔王試験（後書き）

お笑い枠でない魔王候補たちはガチバトル必至。そもそもたどり着くまでがかなり強くないとミツシヨンインポッシブルという難易度だったりします。

第18戦 魔法の練習

筋肉痛とはお友達となり二週間ほどが過ぎた。いい加減筋肉痛とは疎遠になりたいものだが、スパルタ陰険教師がそれを許してくれないのでマブダチ状態が続いている。くそう、日ごろの鍛錬って大事だったんだな。

時に勇者サマと張り合いつつ、時にずるをしつつ（そしてばれてジョシュに怒られつつ）修行した結果、お子様二人はレベルが上がった。ピールについては近日もう1つぐらいは上がるのではないかと睨んでいる。

で。体づくりと並行して勇者サマたつての希望で魔法の訓練も始めることにした。

原因はというと私である。修行の最中私が魔法でずるしているのを見て羨ましくなったそうである。勇者サマがそれについて熱弁をふるったせいでかなり説教をされる結果となった。本当に疫病神だなあの子供は。

ずるをする私が悪いなどと言われたが、適度な手抜きも人生には必要なのだということをあいつらは分かっていない。いつでも全力投球なんて疲れてしまうじゃないか。そんな熱血おバカは勇者だけで十分だ。

鍛錬場にお子様二人と私とジョシュが。その周囲には暇なモンスタ―たちが見物している。一カ月以上続くこの見世物状態にもはやすっかり動じなくなってしまった。慣れって恐ろしい。

「なあ。こんな杖で大丈夫なのか？」

勇者サマは小指程度の太さしかない杖を振り回して首を傾げる。
「ええ、初歩ですから。予備はないので壊さないようにしてくださいね」

ジョシュが私達に渡してきたのはいわゆる初心者向けの杖だ。壊れやすさはぴかー、安さもぴかーという品物である。といっても、うちのモンスターが作ったものだからただなのだが。ほんのちよっぴり魔力を込めているだけの簡易杖である。初心者が上等な杖を使うとトラブルを巻き起こすことが多々あるので、最初はこういうものから始める。

ちなみに私は杖を使うのは初めてではないが、普段は全く使わないのでなんとも違和感がある。

「魔王様は魔力を込めすぎないようにしてくださいね。折れますので」

「はいはい」

私は適当に返事を返した。

有翼人にとっては魔法を使うのは呼吸をするのと同じぐらい当り前のことである。ハーフではあるが私も簡単な魔法なら楽にできるので今更練習というのも実に面倒くさい。

っていつかなんで私が一緒に練習する羽目になってるのか疑問だ。

「それじゃあ一番初歩の魔法から始めましょう。杖の先に体の中の魔力を集めるようにイメージしてください。そして燃える炎を強く思い浮かべるように」

ジョシュがくいつと眼鏡を上げた。

「魔王様、お手本をお願いします」

「へいへい」

あらかじめ打ち合わせしてあった通りに私は魔法を使う。ジョシユはあくまで先生なので口を出すだけである。

「『焰よ、燃えあがれ』」

唱えて杖の先に魔力を集中させれば、小さな炎が杖の先に灯る。正直、呪文を唱えなくてもこれぐらいなら無詠唱で簡単にできる。

そもそも学者によれば、呪文というのは思い込みの集大成らしい。「この呪文を唱えるとこの魔法ができる」ということを大勢が信じ、その思いの集大成が魔法発動の補助をするようになったのだとか。みんなが白と言いつづければ、いつかは黒も白として認識されるだろう。たとえそれが徹頭徹尾黒だったとしても。

つまるところ呪文も同じで、本来ならばなかった呪文と現象の発現になかったはずの因果関係が長い年月と強い思い込みでもって出来てしまっただけなのだ。

で、この呪文の何がいったって、

「やった、できたよ！」

「僕も出来たぞ！」

思い込みの強い子供には効果てきめんなところである。杖の先にできた小さな火球にお子様たちは目を輝かせていた。

水属性であるピールと魔力の少ない勇者サマが成功するとは、いやはや、呪文恐るべし。

「二人とも、よくできました」

ジョシュが手を叩いて二人を褒める。

「……………いつも思うがせめて褒めるときぐらい笑ってやればいいのに。もしかして表情筋が未発達なんだろうか。

相変わらず無表情で声だけに感情が込められたジョシュの褒め言葉に、それでもお子様二人は嬉しそうな顔をしていた。

「ではそれを、あちらの的に向かってぶつけてみましょう」

ちらりと視線を向けられて私はうなずく。

「『疾く飛べ』」

火球はまっすぐに的に向かって飛んでいく。

見事的中した火球は小さな爆発を起こし、木と藁でできた的を黒焦げにした。

お子様二人から歓声が上がる。

「『とく飛べ』！」

「『疾くとべ』」

お子様二人の詠唱に従って火球が飛ぶ。

ピールの火球はゆっくりだが的に向かって飛び、的にぶつかって弾けるように燃えあがった。及第点だ。

問題は勇者サマである。

「あ、なんでそっちに行くんだ！？」

本人は不満そうに声を上げているが、彼の視線の先では悲鳴が上がっている。勇者サマの性格同様無鉄砲に飛び出した火球は目標か

ら逸れ、観衆であつたモンスター達の間飛び込んだのである。嗚呼、飛んで火が来る夏の昼下がり。南方であるという花火大会の事故のようだ。

「コントロールに問題があるようですね」

ジョシュが納得したかのようにうなずいている。仲間の心配しろよ。

その点ピールは大慌てで火球の飛んで行つた先に走っていった。いい子だ。もうこの子が勇者でいいんじゃない？

「もう一回だ！ 『焰を燃えあがれ』！」

勇者サマが呪文を唱えれば、再び火球が現れる。

「『とく飛べ』」

勇者サマが的に向かって放つた火球は、なぜかぐりつと曲がつて私の方に飛んでくる。

狙つたわけではなからうが、勇者が魔王に対して攻撃を仕掛けてきたならやることは一つ。

「おととい来やがれ」

片手で火球を払う。

跳ね返された火球は狙い変わらず勇者サマの手にぶつかった。私の放つた火球ならばそこその威力だろうが、流石は魔力の低い勇者サマの放つた火球、当たった途端しばむように消えた。

「あつつ、あつつ！」

それでも熱かつたのか、勇者サマが手を振ってはふうふうと息を吹きかけている。

「魔王様、大人げないですよ」

ジョシュが咎めるように言う。

「やられたらやり返す、これ当然」

私は舌を出した。

が、そうは思わなかったのが他のモンスターたちである。思いっきり白い目で見られた。いつの間にか戻ってきたピールもジトリとした目で私を見ている。どうやらモンスターたちに怪我はなかったようである。ま、あんなしょぼい魔法じゃね。

モンスターはわざわざ回復魔法で勇者サマの手当てをしている。あんなもん、舐めときゃ治るでしょうに。

その後も何度か火球を飛ばしたが、ピールはともかく勇者サマのは逸れに逸れた。

何やら考え込んでいたジョシュが、何かを思いついたような顔をした。

そして私に向かって言う。

「魔王様が的になればいいのでは？」

「は？」

眉を寄せて言う私に、ジョシュは悪びれもせず説明する。

「標的を魔王様にすれば、彼も集中力が高まるのではないでしょう。魔王様なら彼の魔法を無効化できますし」

すると勇者サマもぱつと顔を明るくさせた。

「そうだぞ、魔王になら絶対当てられるぞ！」

勇者サマはやる気満々だ。あんなへなちょこ魔法に負けることはまずあり得ないんだけど。

そもそもノーコンの勇者サマがいくら頑張ったところで私に魔法を当てられるとは思えない。立つてるだけと思えばいいだろう。

私はその役目を引き受けた。

「魔王、覚悟しろ！」

「はいはい」

勇者サマが杖を構えるのを私はのんびりと眺めていた。勇者サマの魔力と今まで使った回数からすると、魔力切れも近い。少ない回数で私に魔法が当たるとは思えなかった。

ところがどうしたことが。

「『とく飛べ！』」

勇者サマの杖から放たれた魔法は、十歩ほど離れた私のところにまっすぐ飛んでくるではないか。

危うく顔面に当たりそうになったそれをかき消すが、勇者サマはすでに次の魔法を放っていた。

私は次々に飛んでくるそれをうち払う。さっきまでの逸れっぷりが嘘のように、正確無比に私めがけて飛んでくる。

「あんた絶対狙ってやってんでしょ！」

「当たり前だろ！　魔王は的なんだからな」

そういう意味じゃないっつーの！

その後、魔力切れまでの短い間、勇者サマの攻撃はことごとく私に向かって飛んできたのだった。翌日以降の的が私に決定したことは言うまでもない。結界の使用は不可らしい。こんなひどい話があ

っていいものだろうか。

『勇者』は人々に安寧を与えるという。

しかし魔王である私にとっては、疫病神以外の何物でもないといつ
くづく感じる今日この頃だ。

第19戦 勇者にはペンより剣

初めての魔法を発動してから、お子様たちの間では私に攻撃魔法をしかけることがブームになったようである。なんというクソガキども。

腹が立ったので、攻撃をされはじめて三日目に勇者サマ達が持つ杖を二本とも破壊しておいた。私が海のように広く寛大な心を持っているからこそこの優しい処置である。もちろんお子様たちに一発ずつげんこつを食らわせることも忘れなかった。うん、我ながら最近丸くなって気がする。

杖を壊したことはすぐにモンスターたちにばれたが、今回ばかりは軽く注意を受けるだけで済んだ。さすがにこれで説教されたら自称穏健派の私も切れる。

それとお子様たちはジョシュを始めモンスター数体にお説教を受けたようである。例えるならばあれだ。授業中他の子に消しゴム投げちゃいけません！って感じ。多少不服ではあるが、お子様たちの魔法程度ならば私が食らってもダメージにはならないからしょうがない。実際問題、消しゴム程度の破壊力なのだから。

さて、話は変わるが最近ある問題が浮上してきた。

正直に言うとジョシュを作って三日後くらいには気付いていたのだが、私もジョシュもお互い問題を先送りしていたのだ。

勇者サマに武術を教えられる人間がいけないという問題を。

いや、人間でなくていい。モンスターでいいのだ。

しかし考えても見てほしい。私の配下のモンスターはほとんどが獣型である。人型はジョシュが初めてで、人型っぽいモンスターといえはセーターだけだ。どちらも武闘派ではない。あとはミルクちゃんのとこく獣型だけど二足歩行可、といったモンスターたちばかりである。

ツキバ村はかつて先代魔王が大暴れをしたせいで荒れていた。だがしかし、そうなる前までは至って平和な村だったのだ。よって、モンスターたちの攻撃スキルは至って拙い。まして剣を持って戦うなどと。

人型であるという点で考えるとジョシュが最適でないのかと思うのだが、奴の体力のなさは可哀想になるくらいである。ちよつと前から私が鍛錬を始めて筋力を取り戻したことによって、今や圧倒的にジョシュより腕力面では私の方が強くなった。それでもジョシュの振るう鞭に勝てないとは世の不条理を感じずにはいられない。技術力と体力は異なるとは知っていても。

「名選手じゃなくても審判は出来るって言葉があるでしょ。剣が使えるなくても指導はできるんじゃないの？」

勇者サマが帰った後、私とジョシュは話し合っていた。

「こちらにある書物ではその方面についてくわしく記されたものはこれしかありませんでした」

そう言つてジョシュは一冊の本を差し出した。

表紙には『調教用鞭講座』と書かれている。

「……………あんたの得物が鞭なのって」

「これを読んだからですが何か？」

何か？ じゃない！ 誰だこいつに書庫の本読んどけとか言つた奴。つかマジで先代魔王はどんな本を収集してたんだ。趣味なのか、先代魔王の趣味なのか。

「彼に鞭について教えるのはやぶさかではありませんが……………」

「やめときなさい」

そんな勇者やだ。しかも調教用ってなんだ調教用って。

「うーん……じゃあ徒手とか」

「モンスターと人では骨格からして違います。魔王様が教えてください。」

「なんで手の内見せなきゃなんないのよ」

私が出来るのは母から教わった地球流合気道と棒術。人間にはかなり有効だが、勇者が相手をしなくちゃならないようなモンスター相手にするには圧倒的に力不足だ。工夫次第で強くはなるかもしれないが、それほど強くもない私が自身の手の内をさらす愚を犯すわけにはいかない。

「ではやはり、誰か講師を呼ぶべきでしょうね」

私は頭を抱えた。

仮に勇者サマの魔力が高ければ魔法中心として鍛えることができるだろう。しかし現時点での能力値から見ると、勇者サマは魔法使いよりは戦士タイプ。素早さを生かすべく双剣や短剣、細身の剣なんかで戦う方がいいかもしれない。もやしっ子だし。それに加えてあの猪突猛進目立ちたがりの性格だ、弓使いとして後方で待機なんかできないに違いない。銃は可能性としてはありだが、殺傷能力が高すぎるので却下である。ある程度私が防げるものでなくてはいい。魔法を使えるようになったときと同じく、試し打ちで撃ち殺されてはたまらない。

なににせよ、この村にいる人間でそれらを教えられる人間がいない。モンスターもいない。

しかし武器が扱えない勇者など役立たずも甚だしい。勇者に押し付けられる問題というのは少なからずモンスターや賊の討伐というものがあるのだ。知恵で乗り切るといいう手がないでもないが、あのお子様勇者サマではまず無理だろう。だってガキだし。

教師役が見つかるまでは、もうしばらく体力づくり中心になりそうだ。

勇者サマもピールも素直なお子様である。

素直であるがゆえに、自分の欲求にも正直だったりする。

「なあ、明日ヤトさんの家に行つていいか？」

と、若干もじもじしながら勇者サマが言う。トイレなら洩らす前に行つてね。

「あ、おいらも行きたい！」

ピールもそれに賛成した。

ジョシユは私の方に目で問いかけた。

私自身も最近疲れてるし、久しぶりに友人に会いたいと思つていたところだ。否やはない。

「じゃあ今日の内にヤトに手紙届けておくから、了承もらえたら明日行こうか」

お子様たちが表情を明るくさせた。

そしてふといいことを思いついた。

「ヤト兄^{あに}がいるじゃん」

私の発言にお子様たちが首を傾げた。

「ヤト兄？」

「ヨト兄ちゃんのこと？」

ピールの言葉に私はうなずいた。

ヤトの兄ヨトは剣術が得意だったはずだ。今でこそアリギ村で武器や金物を扱う仕事をしているが、昔は冒険者を目指していたというし、ちよつと前には近所の子供に剣術を教えていたはずだ。お子様たちの教師役としては適任だろう。

そうと決まれば善は急げ。

私は大急ぎでペンを取ると、ヤトに宛てた手紙を書き始めたのだった。

翌日、私とお子様二人に加えてジョシュと一緒にアリギ村にあるヤトの家を訪れた。勇者サマの足だと時間がかかるので、鳥モンスターに運ばせた。足で掴むか嘴で加えたらいいんじゃないのと言ったのだが、モンスターから可哀想だと断固拒否された。勇者サマは普通に背中に乗っていた。残念だ。ついでに言つとジョシュも勇者サマと一緒にする方法だ。私は普通に転移魔法である。遠いのになぜわざわざ飛んでいくなんて面倒くさい。

玄関の扉を叩くと、ヤトが出迎えてくれた。ヤトは私達を見るとにつこり笑う。

「いらつしゃい、みんな。さあさあ入って」

ヤトの言葉に私を先頭にぞろぞろと家の中に入る。お子様たちは元氣よくお邪魔しますと挨拶をしていた。

ちなみに他人の家を訪れる際のマナー云々は昨日ジョシュがお子様たちに教えていた。勇者教育っていうか幼児教育じゃないのそれ。

それはさておき、通された部屋にはヤトが昨日約束してくれた通り、ヤト兄がいた。

ヤト兄は身長が高く、体格もがっしりした屈強そうな見た目の男である。ヤトと同じく明るい金茶の髪と青い瞳の持ち主だが、肌はヤトと違って日焼けしている。そしてさも自分は真面目ですと言わんばかりの真面目腐った顔をしている。

「こんにちは。お久しぶり」

私が挨拶をすると、ヤト兄は露骨にこちらを嫌そうな顔をした。

「ヤト、客というのはもしかしてこの女のことか？」

「兄さん、この女だなんて失礼なこと言わないで頂戴。真央は私の友達よ」

ヤト兄の失礼発言にヤトが怒る。そうだそうだ、もっと言ってやれ。兄さん嫌い！とか言ってやれ。絶対へこむからそいつ。

「騙されてるに決まってるだろう。相手は魔王だって分かっているのか？ 性悪で狡猾で怠惰な奴に決まってる」

「悪うございましたね、性悪で狡猾で怠惰な魔王で。残念ながら私は勤勉な魔王になるつもりはないからね」

怠け者上等。楽隠居上等。大体アリギ村の魔王だって似たようなもんじゃないか。

早くも陰悪な雰囲気になる私達の様子に、お子様たちやジョシユが目を丸くしていた。

何を隠そう、このヤト兄とは私がツキバ村の魔王だとバレる以前から仲が悪いのである。

見ればわかるだろうが、ヤト兄は考えていることが顔に出やすく、ついでに口にも出やすい。実直かつ直情型でクソ真面目な正義感の強い男なので魔王かつ怠け癖のある私とは反りが合わないのだ。

それともう一点、

「うちの妹に迷惑をかけるのは止める。お前の性悪が可愛い妹にう

つつたらどうしてくれる！」

この男、結構なシスコンなのである。もしくは妹命。両親がなくなっ
てから他に身寄りがない上にヤトは病弱。それゆえヤトは世間
知らずな面も多々あり、ヤト兄は過保護なのである。

「うつるわけないでしょ。何を根拠に」

「お前は魔王だろうが。勇者ならともかく、魔王をうちに招き入れ
るなんて……！」

はい、言質とった、っと。もうひと押ししところかな。

「ねえヤト兄。ちょっと剣術教えてくれない？」

ヤト兄の言うことをさらっと流して言えば、不審そうな顔で見ら
れた。

「お前にか？ 何をたくらんでるんだ？」

「いや、剣術教えてほしいんだよね」

「魔王なんかに教えられるわけないだろう」

「魔王なんかって何よ。じゃあ勇者だったら教えてくれるわけ？」

「ああ、勇者ならな！」

私はにやりと笑った。

「なら勇者サマの方よろしくね、ヤト兄」

「は？」

ヤト兄は間抜けた顔で私を見る。私が後方にいる勇者サマを指し
示すと、ますますわけが分からないといった顔をした。私はにやり
と笑う。

「この子、ツキバ村とバーク 口の両方に所属してる勇者なの。村
長たちから教育係任されてるんだけど、剣術教えるのをどうしよう
かって言ってたとこなんだよね」

「こんな子供が？ それに魔王が教育係って……」

信じられないものを見るような目でヤト兄が勇者サマを見た。

そりゃそうだ。私だって最初は信じられなかった。

「子供じゃないぞ！」

勇者サマが憤然として言う。そうやってムキになる辺りが子供で

ある。

「あー……悪い。失礼なことを言った」

クソ真面目なヤト兄は律儀にも勇者サマに謝っている。私は未だかつて謝られたことはないのだがなんだこの差別。

「悪いと思うんなら、勇者サマの剣術指導やってくれない？」

私がそう言つと、ヤト兄は改めてぎょつとしたように私の顔を見た。

「なんで俺がそんなことを……」

「だってさっき言ったでしょ。魔王は駄目だけど勇者なら教えてやるって」

「そ、そうは言ったが」

「何？ さっきの嘘だったわけ？」

たたみかけるように言えば、ヤト兄は分かりやすくうろたえてくれた。真面目な奴はこういうところに弱い。

「だが俺にも仕事がある」

「何も毎日って言うてるわけじゃないのよ。週に一度でも基本を教えてくれれば反復練習をこっちでさせることはできるし」

模擬演習をカメにでも記録させておけばこっちのものである。それを見つつ反復練習させればいい。

そういえば、武術での反復練習の大事さを母は熱弁していて私にもそうさせたが、魔王になってからほとんど鍛錬をしていない。死んだ母がそのことを知ったら何と思うだろうか。確実に木に一晩ぐらい吊るされそうな感じがする。

私はちよつとうすら寒い気持ちになりつつ考えを目の前のことに集中させた。

私の言葉にヤト兄は言葉を詰まらせた。さらにたたみかけようとヤトに目で合図をする。するとヤトは心得たとばかりにヤト兄の腕に手を置いた。

「お願い、兄さん」

じっと見上げてくる妹の視線に耐えかねたのか、ヤト兄の視線が泳ぎだした。あとちょっとだな。

そこで空気を読んだのがお子様たちである。

「ヨト兄ちゃん、おいらも剣術習いたいんだ。だめかな？」

「僕、勇者だから強くないといけないんだ！ 教えてくれ！」

妹プラス見た目いたいけな子供二人から迫られ、ヤト兄はすぐに白旗を上げた。

こうして、週に一度はアリギ村でヤト兄から剣術を教えてもらうことになった勇者サマだった。何故かピールにも教えてくれるらしい。魔王こと私には教えないということなので、私は勇者サマ達が頑張っている間ヤトとお茶をする約束をしたのだった。監督係としてジョシュが傍にいたので無責任でもないはずである。何かあったらそれはヤト兄とジョシュのせいだ。きっとそうだ。

家に帰ると、モンスターたちが楽しそうに勇者サマたちの修行用木剣を作っていた。こいつら根本的に間違ってる気がする。

第20戦 進歩はもろ刃の剣

早いもので、私が勇者サマの指導を引き受けてから二カ月がたった。長いようで短い二カ月だった。もう七月である。暑さで茹だる時期だ。

が、子供にとって暑さなんぞ関係ない。

「魔王、覚悟―！」

「邪魔」

木剣で切りかかってきた勇者サマを魔法で返り討ちにする。

剣術を習い始めた勇者サマはヤト兄にそそのかされたらしく、隙あらば私に切りかかってくる。お子様ゆえにその行動はバレバレで、日々私が返り討ちに行っているといった具合だ。ヤト兄の所業は今度ヤトに言いつけるつもりである。

勇者サマに対し、食事時に切りかかってきたらおやつ抜きと宣告してあるので今のところ食事時は平和である。あと授業中に木剣を振り回すとはジョシュの鞭が飛んでくるというのを五度目の鞭を食らった辺りから学習したようで自粛している。もうちょっと早く気付け。

暑さのせいで私のやる気は右肩下がりだが、ジョシュのスパルタっぷりなどはむしろますます磨きがかかっている気がする。鞭さばきが二カ月前よりも圧倒的に上達している。鞭が振るわれる主な相手が私と勇者サマだという事実是非常に不本意である。

暑さで気が滅入ってきたので、勇者サマをピールが止めているのを確認して簡易結界を張り、その中に魔法で冷たい木枯らしを吹かせた。熱い空気と適度に混ざり合い、心地よい温度になった。

「魔王様、その魔法をこの部屋全体に掛けていただけませんか？」
恨みがましい目でジョシュが言う。根性で顔には出していないようだが、ジョシュも相当参っているようだ。

「これ、部屋の中でしか使えない魔法だし、疲れるからあと一回ぐ

らしいか使いたくないんだけど」

嘘である。比較的簡単な魔法なので連発も可能だ。が、何故私が他人のために自分の魔力を使ってやらねばいかなのか。

今日の予定は午前中は座学、午後からは外での鍛錬。体づくりと魔法の練習のために夕方まで外にいななければならない。さらに言うなら今日は雲ひとつない快晴だ。対策をしないのではかなりきついだろう。

「……………」

ジョシュが無言で私を見る。私もジョシュが無言で見返した。そして、

「……分かりました、魔王様がその魔法をこの部屋全体に使ってくださるなら、今日一日は座学にしましょう」

「明日からも外での鍛錬は涼しい朝夕にしてね」

「前向きに検討します」

「確約しなさい」

「三日は確実に」

む。微妙な返答だがまあまあ成果が引き出せただろう。そろそろ他のモンスターたちの視線が恐いし。一人だけ涼んでるのが駄目らしい。

つつか、空気冷やす系の魔法が使えるモンスターは複数いたはずだが、あいつらどこ行っただと考えると思い出す。ツキバ村の方で新しく灌漑工事をするとかで作業効率を上げるために貸し出したんだっけ。くそつ、お酒を献上するなんていう甘言に釣られて全員貸し出すんじゃないかった。お酒はしっかり受け取っちゃったけど。

閑話休題、ジョシュから座学の約束を取り付けたので私は結果を解き、室内全体に木枯らしを吹かせた。

「すつごいや！ マオさん、おいらにもこの魔法できる？」

ピールが目をキラキラとさせながら私に尋ねてくる。私は首を振った。

「出来なくはないけど、ピールなら水属性の魔法を覚えた方が楽し

やないかな」

氷や水が部屋の中を動くだけでも涼しくなるものだし。多少家が傷むから除湿もしつかりすることはもちろん大事であるが。

「僕もできるのか!？」

勇者サマも期待に顔を輝かせて迫ってくる。鬱陶しい。

「冬場には活躍できるでしょ」

勇者サマの質問に素っ気なく返す。火の属性の魔法が使える奴がいればそれだけで薪いらすだ。冬場にはたっぷり働いてもらおう。そう考えてからふと考えなおす。

出来る限り、勇者サマには魔法道具を使わせた方がいいのではないかと。

魔法は実に便利なものである。

が、実際に魔力を持ち、なおかつそれを使える人間というのは割と限られている。一般人ならお子様たちが使った火球に毛が生えたくらいの魔法がせいぜいだろう。

そのためそこそこ高度な魔法が使える人々はいわゆる人間の魔法使いか、もしくは高レベルの冒険者、有翼族私のような人間とは異なった種族、そして勇者や魔王、モンスターぐらいなものだ。

魔法道具はそういった魔法が使える人間が作った道具で、その名の通り道具に魔法とそれを発動する魔力が込められている。大抵は日常生活に有用な魔法である。魔力を注げば繰り返し使うこともできるが当然ながら値段が高い。ぼったくりと称して言いほど高い。

そのため私が初めて魔法を使えるようになった時、それを知った母が言ったことは、

「まあ便利。じゃあそれで洗濯物を乾かしてちょうだい」

だった。我が母ながらひどい。

私がいろんな魔法を覚えるたびに、母はそれを家事に応用するよと言いつけた。小遣いやおやつにつられてそれを了承した私も悪い

のだが、母と子だけで生活していた時だったので日々の節約はとも重要だったのだ。

地球生まれ地球育ちを自称する母は、家事が不得意というか嫌いだった。特に洗濯と料理。前者は「洗濯機も乾燥機もないのが信じられない！」後者は「水道も冷蔵庫もIHも電子レンジもないなんて信じられない！」という理由だ。何やら話を聞くと、魔法道具のようなものがあつたらしい。しかも魔法道具を動かす魔力の代わりとなるものを各家庭に常に供給できていたのだとか。それに水も。それらを国中に張り巡らせていたというのだから日本という国は実に便利で快適な国だったのだらうと思う。

しかしまあそれらを作る技術力がこの世界にはことごとく欠如している。鋼の星とも呼ばれる工業惑星ハリツシュならある程度それに近いものが作りだされているのかもしれない。行ったことがないから分からないが。

とかく、今はない技術を羨んでも仕方がない。自分たちで実現可能な範囲で生活を向上させていくべきだ。

というわけで、私は私の魔法と配下のモンスターたちの魔法を生活向上に役立てているというわけだ。

夏は魔法で空気を冷やし、冬は魔法で空気を暖める。家事全般にも魔法を活用しているし、照明器具も基本的にモンスターたちが作った魔法道具だし、それ以外にも多々魔法道具を使っている。ツキバ村の人たちに魔法を使うモンスターの貸し出しも行っている。もちろん有償で。

こういった魔法の使い方や勇者サマに教えるかどうかは悩みどころである。あんまりやりすぎると勇者サマが所帯染みてしまう。それに勇者サマの魔力から考えるに、それほど魔法を覚える容量がなさそう。家事向けの応用魔法は魔法道具で代替し、本人には勇者向けの魔法を覚えさせた方が無難だらう。炎も雷も攻撃向けだ。

「……まあ魔法にも適性があるからね。勇者サマは難しいんじゃないかな」

「ええー！　なんでだ!？」

「なんでもよ」

私は勇者サマの抗議を適当に流すと、もう一度部屋の中に風を巻き起こした。適度に冷えた風が部屋の中をめぐる。

汗が引いたところでジョシュが無情に告げた。

「では、勉強を始めましょうか」

そういう約束だったんだんだけど改めて聞くとやる気が下がるな。

お茶の時間にピールが言う。

「この家にある魔法道具って、誰かに売ったりしないの？」

その質問は少なからずされたことがあるので私はいつも通りの答えを返す。

「売らないよ。ここ以外じゃ使えないから」

「どうして？」

「ケチ臭いぞ魔王」

子供は好奇心旺盛だ。そして勇者サマは失礼だ。私はため息をついた。

「あのね、世間一般で流通してる魔法道具にどんな魔法が掛けられるか知ってる？」

私の問いにピールは首を傾げた。

「うーんと、すごい魔法とか？」

「かつこいい魔法！」

うん、この子らは子供だ。

まあ今回に限っては私が分かりやすく解説してやろう。

私は紙とペンを用意すると、空野真央と漢字で書いた。母から教えられた日本の文字である。やたらと線が多いので、こちらの人間からすると絵のようだ。

「何だそれ。絵か？」

「何かの字？」

お子様たちが首をひねる。

「日本って国の文字。で、このペンを呪文、インクを魔力、紙に描いた文字が魔法の発動した効果とするでしょ？　で、魔法を使える私からすると、すぐそばで魔法を発動するのは非常に簡単なの。自分の手を動かせばいいんだからね」

そしてその紙とペンを勇者サマに渡す。

「でもこうやって呪文と魔力が魔法を使える私から離れると、魔法の発動は難しくなるの。私の手から離れたペンで同じ字を描くことはできないからね」

ペンを握りしめた勇者サマが私の字を真似て書こうとしているが、謎の文字となり果てている。諦めたのか最後に魔王のバカという文字を書き加えた。そういうことする子が馬鹿だ。

「同じ魔法を発動するためには、誰が使っても同じ効果をもたらす方法が必要になるの。私の字を真似て書けつつても誰でもすぐにはできるわけじゃないみたいだね」

勇者サマは文字を睨んで不服そうだ。

ピールはふんふんと興味深げにうなずいている。

「そこで魔法使いの人たちはやり方を変えるわけよ」

私は印章を取り出した。普段、魔王同士のやり取りで使う名前入りの印章だ。文字はそれぞれの魔王が自由に決められるので、私は日本語の名前の印章にしている。

私は勇者サマの手元にある紙を引き寄せ、その上に印章を押した。

空野真央という文字が紙の上に現れる。

「こんな風にあらかじめ形を作っておけばインク魔力さえあれば誰でも同じように魔法が発動できるってわけ」

「僕も押したい！」

「却下」

「ケチ臭いぞ魔王！」

「ケチで結構」

大事な印章を人に渡してたまるか。

と、それまで話を聞いていたピールが口を開く。

「つまり、普通の魔法より、魔法道具で発動する魔法の方がずっと手間がかかるってこと？」

しばしば思うのだが、こういうときピールがいてくれてよかったと思う。勇者サマだけだと際限なく話が逸れてしまうのだ。

「そういうこと。手間の他に普通の魔法とは違う技術も必要になるの。その上壊れにくくするにはさらに手間がかかるしね」

言うなれば魔法道具は飴細工で作った印章。簡単なものでも回数を使えば壊れるし、高度で細やかな魔法であればある程壊れやすい。でもここにあるのは魔法道具なんだろう？」

勇者サマが不思議そうに首を傾げた。

私は肩をすくめる。

「うちは魔法道具より魔法を使う方が多いよ。魔法道具も一応あるけど、手入れ出来るモンスターたちがいっぱいいるからね。モンスターが毎日調整をする前提で作ってるの。普通の人に売っても、その人がそこそこの魔法を使えなかったら全然使えない代物なの」

「……よく分からないぞ」

勇者サマが小さく唸った。分からないことを分からないと言えるという点は勇者サマの数少ない美点である気がする。

「うちの魔法道具は毎日作り直してるってこと」

私がかかり噛み砕いて言うと、勇者サマはようやく合点がいったようだ。

「つまり作るのが下手なんだな」

……………このクソガキ。

私が思わずこぶしを握り締めたとき、ジョシュが咳払いをした。
「魔法道具を作っているモンスターたちも日々研究しています。そのうち既製品に負けなくらいの魔法道具を作れるようになるでしょう」

毎日仕事してる方が怠け癖がつかなくてよいと思うのだけど。

とか言ったら私が毎日仕事をさせられそうなので黙っておく。沈黙は金だ。

まあどの道うちのモンスターたちはやたらと工作が好きだし凝り性が多いし、いいものが出来たら他の魔王たちに賄賂として渡すもよし、名義を隠して売り払うもよし。

実はうちのモンスターたちのレベルからすると、たとえポンコツであろうと魔法道具を作れること自体がすごいということを私が知るのは結構後のことだったりする。日々の努力と根性と粘り強さの勝利らしい。随分と汗臭いイメージのモンスターたちだ。でも有能な配下っていいよね。手柄はおおむね私のものになるわけだし。外道？ だって私魔王だし。

「そしたらそれがツキバ村の名物になるかもね」

ピールがニコニコと笑う。

魔王印の魔法道具？ 誰が買うんだそんなもん。

「そういえば、現在修行用の魔法道具を開発している最中だそうですよ」

ジョシュが思い出したかのように言う。そういえばそんな話があったなあ。

「面白そうだな。完成したら僕が一番に試していいか！？」

勇者サマが楽しそうに言う。

「ええ。あなたのための道具ですからね」

ジョシュは相変わらずの無表情で答えた。

勇者サマの言葉にやる気をみなぎらせたモンスターたちによって、修行用魔法道具は一週間後に完成した。

その頃には村に貸し出したモンスターたちが一部帰ってきていたので、私の「冷房が欲しけりや座学にしろ」という脅しは効かなくなってしまった。無念。

さて、鍛錬場に運び込まれた魔法道具だが、ぱっと見は力カシだった。それが十体程ある。

「これが修行用の秘密兵器なのか？」

勇者サマが首を傾げる。おい、誰がいつ秘密兵器だなんて言ったんだ。

「さっそく動かしてみましようか。魔王様、試されますか？」

「……いい。勇者サマからでしょ」

「分かってるな、魔王！」

勇者サマが胸をそらす。

いや、別にあんたのために断ったわけじゃないし。むしろ言いたい。ジョシュの後ろにいるびしょぬれな上にボロボロな姿になっているモンスターたちに疑問を感じないのか、と。

「まずは準備体操を兼ねてやりましようか」

ジョシュがそう言うのと、勇者サマを鍛錬場の真ん中に立たせた。

そして彼の背後に長い仕切りのようなものを立たせる。さらに勇者サマの前方、五歩程離れた場所に少しずつ間隔を開けて力カシを設置する。空から見ると勇者サマを頂点にして内角100度程の扇形になっているはずである。力カシの顔はすべて勇者サマの方を向いているので、力カシたちの視線の焦点に勇者サマがいるとも言える。力カシVS勇者サマ、といった見た目である。設置されているのは五体だけで、どうやら残りは予備らしい。もしかしたらレベルが上

がること使用する数が増えるのだろうか。

そして設置が終わったところでジョシュが咳払いをした。

「では、開始します。飛んでくる攻撃をすべて避けてください」

ジョシュの合図ともに。カカシたちの口に水球が出来る。水属性の魔法の初歩の魔法だ。

小さく空気を切る音がしたかと思うと、カカシの口からその水球が打ちだされた。それらは一直線に勇者サマに向かっていく。

「うわっ！」

勇者サマが小さく声をあげてそれらを避けた。

が、カカシ達はすぐに水球を作ると再び発射した。

勇者サマは思わず下がるが、背後に設置してある仕切りに触れた途端悲鳴を上げた。

「ああ、背後の仕切りに触れると雷魔法を食らうことになりますので、そこより後ろに下がらずに避けてください」

水に濡れた状態で雷魔法を食らうなど、かなりの痛手だろう。うわあ、スパルタ。実験台断ってよかった。

「ひどいぞ！ 鬼！ 悪魔！ モンスターー！」

「ええ、モンスターですが何か？」

ジョシュは相変わらず平然としている。まあジョシュだしな。

水球は一定時間ごとに発射される。勇者サマがその準備時間中に横に逃げようとするが、カカシが勇者サマを追いかけるようにグリンと一斉に動いた。恐っ。

水球は勇者サマに容赦なく当たった。水音というよりは肌を思い切り叩いた音と言った方がいいだろう。見るからに痛そうである。

「ちゃんと攻撃を見極めれば避けられます」

ジョシュはあっさりとそう言うが、今の勇者サマにそんな余裕があるのかどうか。

結局、カカシ達が魔力切れを起こした三分後（一度起動すると魔力切れになるまで止まらないらしい。迷惑な）には勇者サマはすっかりずぶ濡れになっていた。長袖長ズボンという格好なので分から

ないが、間違いなく手足にはあざができているだろう。

「……………これ、おいらもやらなきゃ駄目？」

いつもおっとりしているピールには珍しく、思いつきり顔を引きつらせている。心なしが青ざめているようだ。

「あ…………ピールは水属性だから、勇者サマよりはマシなんじゃないかな」

多分。きっと。多少は。

モンスターたちが力カシに魔力を注いでいる間、勇者サマはぐずぐずと泣いていた。

「泣き虫」

小さく呟くと、勇者サマがきつとこちらを睨みつける。

「泣いてなんかいないぞ！ 力カシの水だ！」

あんたの目から湧いて出るわけないでしょ。

しかしそんな突っ込みを入れると勇者サマの頭を甲斐甲斐しく拭いているモンスターたちから非難されそうなので口をつぐんでおいた。

さて、この修行、ピールの次は私の番なんだけど、どうやって逃亡しようかな。ピールはすでに刑を言い渡された囚人のごとくうなだれているので、逃亡騒ぎなどを起こすとは考えられないだろう。私が修行の脱走常習犯なのは皆の知るところなので逃亡防止措置がされていると思ってい。

いっそ力カシを破壊してしまおうか。しかし怒られるのは目に見えている。というか、下手に壊したらグレードアップした状態で返ってきそうだ。

私が悶々と悩んでいる間にピールが特訓を終わらせたらしい。気付けば全身水まみれでぐったりとしたピールが地面に倒れ込んでいた。余所の街から走ってきた伝令を迎える人のごとくモンスターたちがタオルやら飲み物やらを持ってピールに殺到している。

「では次は魔王様ですね。魔法で結界を張ったり飛んで逃げたりしないてくださいね」

ジョシュが無情に告げる。

私は半ばやけっぱちな気分でカカシの前に立った。

勇者サマの特訓を見ていたから分かる。カカシ達は発射の寸前まで目標の方に姿を向ける。が、発射の段階になったら一瞬だけ動きを止める。水球が放たれるのはどのカカシも同じタイミングだ。ならばかわせないこともない。

などと考えていた私だが、次の瞬間にはその認識が甘かったことを悟った。

風を切る音がした。かと思えば続けて二度三度四度五度。

「ジョシュ！？　なんで私だけ時間差なのよっ！」

「魔王様の方がレベルが高いので」

やっぱこいつは陰険だ！　きつとこの前ジョシュが寝てる時に顔に落書きしたこととかジョシュに無理やり絵を描かせて笑ったこととか愛用の鞭をこっそりツタにすり替えたこととかに対する報復に違いない。

しかし今そんなことを考えても仕方がないので、目の前の攻撃をかわすことに専念しよう。かわせてないけど。痛いけど！

この時嫌な予感がした私はこの特訓用魔法道具の開発を中止するよう言ったのだが、ジョシュにより却下された。部下に提案を却下される上司ってどうなんだろう。

その後ますますバージョンアップされていく特訓用魔法道具は、対象者が攻撃を避ける様子から『地獄の舞い』と名付けられることになる。姉妹版に『剣の舞』が生まれるのもそれからすぐのことだったりする。内容は字面で察してほしい。

魔法というものは便利なものである。魔法道具もとても便利なも

のである。しかし使い方を一歩間違えると非常に危ないものになるのだ。どうせなら上質お酒醸造魔法を開発してほしいものだ。

魔王の模索　　近隣の魔王と勇者

一日の長、ということわざがあるように、その道の先達には教わる場所が多いものである。

それは恐らく、勇者でも例外じゃあるまい。

「魔王様は勇者の知り合いはいらっしゃらないのですか？」

ある夜のジョシュの発言に私は顔を引きつらせた。

「ジョシュ、私を誰だと思ってるのよ」

「魔王様です」

ジョシュは当然のように言い放つ。そんな初歩的なことを聞いたんじゃないっつの。

「魔王と勇者は基本的に敵対関係にあるもんなの。友好関係築く魔王がいると思う？」

私が不機嫌な声でそう返すと、ジョシュは一つ瞬きをした。それから背後の壁の方を振り返る。その壁をいくつか越えた部屋には、時間が遅くなったのでピールともどもうちに泊まることになった勇者サマが寝こけているはずである。

ジョシュは背後をしばらく眺めてから再び私に視線を戻し、物言いたげにこちらを見ている。言いたいことは分かるけど言わなくていいからね。言ったら殴る。

しばらく黙っていたジョシュだが、わざとらしく咳払いをして口を開いた。

「ツキバ村とバーク　口に勇者が今までいなかったことは聞き及んでいます、アリギ村には勇者が在籍しているのですよね？」

私はその言葉に眉をしかめた。

アリギ村の勇者。知っている。知り合いではないし、話したこともないが話には聞いたことがある。

「いるよ。超ベテランが」

「なら彼に教授を請うてみるのも一つの手では？ 我々では教えられないこともあるでしょうし」

ジョシュが言う。

勇者教育を始めて二カ月以上が経っている。何しろ勇者サマが物を知らない子供だったということもあり教えることはまだまだ多いが、ジョシュが教えられるのは知識だけ。それも　ジョシュが生まれてからもそれくらいしか経っていないのでしょうがないことだが　本から学んだ知識がほとんどである。剣術や体術は現在アリギ村のヤト兄に教わっているが、それ以外が意外と難関である。戦術論は教えられても、実戦経験がない。さらに言えば、私含めうちのモンスターたちも勇者特有の現象に遭遇したことがないのだ。私だってちゃんと勇者に会ったのはあのガキンチョ勇者サマが初めてだ。

だからこそ、先達である他の勇者に教えを請うた方がいいと思うのだ。思うのだが。

「……………アリギ村の勇者が何歳か知ってる？」

私の心底嫌そうな声にジョシュが不審げな顔をした。この様子では知らないのだろう。

「ベテランと言うなら……………四十代ですか？」

私は首を横に振る。

「三十代？」

私は首を再び横に振った。

「……………五十代？」

ジョシュが愕然として呟いた。

しかし甘い。

「アリギ村の勇者サマはね」

言ったんそこで言葉を区切る。口にするのに抵抗がある年齢なのだ。ヤトから最初に話を聞いた時は冗談かと思ったくらいだ。

「御歳八十一歳だよ」

ジョシュが動きを止めた。元々表情がない奴なので分かりづらいが、一分経つても口を開かなかったのでジョシュの目の前で手をひらひらと振ってみる。

うん、こいつ固まつてる。さすがに思考停止したか。

「……………申し訳ありません、魔王様」

なんとか石化が解けたらしいジョシュがぎこちなく言う。

「どうやら聞き間違えたらしいので、もう一度言っていただけですか？」

諦めが悪い奴だ。

「だーから、八十一歳！ 勇者歴六十年！」

一般人なら隠居していてもおかしくない年齢だ。っていうかその歳で勇者をしてるのがおかしい。全力で間違ってる。

「何か人間以外の血が混ざっているとか……？」

ジョシュは耳にした事実が信じられないのであろう、目を白黒させている

「交じりつ気なしの人間だよ。見た目だけで言うならアリギ村の魔王と遜色ない老け具合。多分勇者サマと並べたらおじいちゃんと孫って感じじゃない？」

多分アリギ村の勇者は人間では最年長勇者じゃなからうか。大抵の人間は歳を食って体力が落ちると勇者としての資格を喪失してしまう。誰が判断しているのかは当然謎である。

「その歳まで勇者資格がなくならないということは、相当に強いんですか？」

知的好奇心がわき上がってきたのか、ジョシュの目がきらりと光る。思わず乾いた笑いが浮かんだ。

「強いらしいけどね。先生にはしたくないなあ」

「それはなぜですか？」

私は肩をすくめた。

「明日にでもアリギ村にカメをやって自分の目で確かめてみたら？」
モンスター

この時、私は別に他意があつてこう言つたわけではない。百聞は一見にしかずというし、私にアリギ村の勇者のことを教えてくれたのが魔王だつたということもあるので、もしかしたら違つているかもしれないと考えたからだ。

翌日の夜、真つ赤な顔をしたジョシュから猛抗議を受けた。

どうやらアリギ村の勇者サマはジジイから聞いた通り、ジジイの同類だつたらしい。

ま、要するに色ボケジジイという奴だ。若い女性の湯あみをのぞいたり、若い女性に抱きついたり、そうでない時は普通のご老人よろしく日向ぼっこをしたりしている。都合の悪い時はボケ老人のふりをして誤魔化するのだからタチが悪い。

で、アリギ村の勇者の一日をしつかりと記録したカメが、しっかりと記録しすぎたせいでうら若きお姉さんたちのあられもない姿も映していたらしい。鳥型モンスターであるカメはともかく、人型モンスターかつ低年齢であるジョシュには刺激が強すぎたようだ。低年齢つか初心？　しかし初心にしろ低年齢にしろ恐ろしくジョシュには似合わない言葉だな。

ジョシュの抗議はごくごく適当に受け流したのだが、アリギ村の勇者について「破廉恥だ」と評したのはなかなか面白かった。破廉恥で。お前は神に仕えて禁欲を貫く神官か。

そういえばアリギ村の勇者は傍目から見れば魔王と同類なのだが、同族嫌悪というやつか両者はひどくいがみ合っている。うっかりジジイに勇者の話題を振ってしまうと、それだけで最低でも小一時間

は勇者の悪口を聞くことになってしまふ。

アリギ村のジジイとも友好関係を崩したくない私としては、これ以上勇者たちに肩入れをして立場をまずくするのは避けたいところだ。

「アリギ村の勇者はなしとして、もう少しまともな勇者をご存じないんですか？」

ようやくジョシュの気が済んだらしく、まだ声が微妙に刺々しいが違う質問をしてきた。

それにしてもアリギ村の勇者が勇者の癖にまともじゃないとかひどい言いようだな。アリギ村の勇者は男としては間違ってるってうちの村長^{ハゲ}が言ってたぞ。ハゲが同じことしたら間違いなくタコ殴りだろうが。

そもそも自己犠牲の精神にあふれた勇者たちがまともな人間と言えるのかどうか私としては疑問である。勇者に面倒事を押し付ける気満々の（そしてそれを当然と思いこんでいる）連中のために死ぬような目に遭うのを覚悟で困難に挑むなど、正気の沙汰じゃない。これが魔王ならば無理な仕事はしないし、命の危険があるならば高額な報酬を確約させなければ絶対にそういった話は受けずに違いない。

話が逸れた。

「アリギ村以外の勇者ねえ」

私は頭をひねる。

私の支配しているツキバ村は規模の大きい村や町に囲まれている村である。

ツキバ村の東には勇者サマが住んでいる隣村^{バークロー}がある。魔王は大蛇。今まで勇者がいなかったたのでその線はなし。

西はジジイのいるアリギ村。ここの勇者はジョシュに駄目だしされたからもちろんだめ。

あとは北か南の二択である。

「南のチアーネはどうですか？」

チアーネというのはツキバ村の南にある海沿いにある港町だ。規模が大きく、災害もそこその数見舞われたはずだが、勇者がなんとか解決してきた。

だが私は首を振る。

「チアーネの勇者は性格がちょっとアレだつてディーネが言つてたから止めた方が無難じゃないかな」

「ディーネ様…….」といって、チアーネの魔王をされている？」

「そ。人魚の魔王」

数少ない女魔王仲間である。あちらの方がはるかに強いが。

「チアーネの勇者は見栄っ張りでカッコつけどから有事の際以外は役に立たないつてさ」

「例を言つていただいても？」

アリギ村の勇者の事があつたからだろう、ジョシュはやけに慎重にそう言つた。

私はひよいと肩をすくめると、ディーネから聞いたことをかいつまんで説明した。

「割とディーネがやんちゃで、商船から物資をちよるまかしたりするのね。で、それを退治に勇者が出てくるらしいんだけど、その勇者つてというのが水恐怖症で、ディーネが沖の方に行っちゃうと魔法を何発か放つてから『ふつ、今日はこのくらいにしておいてやろう』つて言つて帰っちゃうんだつて」

「…….使えないですね」

ジョシュが眉間にしわを寄せた。

「ま、壊滅的被害じゃないからねえ」

私は肩をすくめた。こんな話を聞けばさっさと諦めるかと思ったが、思いのほかジョシュは諦めが悪かった。

「しかしチアーネなら水害も多いはずですよ。港町ですし」

確かにジョシュの言うことは正しい。チアーネは過去数年で結構な回数水害に襲われた。

襲われたのだが、

「今チアーネにいる勇者は一年前に来たばかりだよ。前年までいた勇者は引退して、今は家族と一緒にもうちょっと南の方の島を買い取って余生を過ごしてる」

「では今水害が起これば？」

「勇者が死ぬ気で頑張るんじゃない？」

仮にも勇者だ、恐怖のあまりの心臓発作で死ぬこともあるまい。

ジョシュは私の回答を聞いて黙ってしまった。無表情なその顔からは心中が読みとれない。ま、予想はできそうだが。

しばらくしてジョシュは気分を切り替えたのか、眼鏡をすつと押し上げて口を開いた。

「では、北のクタカ村の勇者は？」

クタカ村か。あそこの魔王とは交流はあるが……

「無理だと思っなあ」

「なぜですか？」

関係ないが、ジョシュはもう少し柔らかな言葉づかいを学ぶべきだと思う。質問の前に一言「そうなんですか」というだけでも印象が違うというものだ。質問ばかりされるとうんざりしそうだ。日々お子様たちから質問攻めされても平気な顔をしているジョシュは心底すごいと思う。

ま、面倒くさくとも聞かれたら答えないわけにもいくまい。

「……あそこは勇者が巫女さんなのよ」

「巫女、ですか」

「んでもってご神木が魔王」

「……………はい？」

なんだ、誰か一人くらいモンスターがジョシュに説明をしてくれていると思ったのだが、思いのほかジョシュは周辺魔王について知らなかったようだ。じゃあ普段ジョシュと他のモンスターはどんな話してるんだ？ ああ、勇者サマのことが。

いい機会だし、クタカ村の魔王についても詳しく教えておこう。

私はジョシュに対してクタカ村の魔王と勇者について説明することにした。

クタカ村には代々ご神木信仰なるものがあつた。ご神木は村の中心にそびえ立っている樹齢千年と伝わる大木である。それに祈りをささげる巫女の一族がいた。

先々代のクタカ村魔王はごくごく普通の魔王だったと聞く。

普通の魔王というのも変な表現だが、うちの大陸では「むやみと支配下の人間を殺さない」という取り決めがある。大陸を統括する魔王の方針だ。支配というよりも共生・共存を目指している。それさえ守れば普通の魔王として認識される。ちなみにツキバ村の先代魔王はその取り決めに抵触していた。が、人死にが極めて少ないという理由で処分まではされなかった。何より魔王を倒す勇者が存在しなかったのは致命的だった。

それはさておき、先々代の魔王が訳あって死亡した後が問題だった。

後任の魔王が女好きだったのだ。いや、そこまでは問題なかったのだが見初めた女が問題だった。

ご神木を守る巫女さんだったのである。

もちろん巫女さん以外にも先代魔王は村中の女に手を出したのは言うまでもない。しかし巫女さんは巫女さんであるがゆえに唯一魔王の口説きに応じなかった。

クタ力村の教えによれば、巫女さんは巫女である間はご神木のみに尽くさなければならぬのだという。ではその巫女さんはどうやって決めるのかと言えば、ご神木からご神託が下るのだとか。

巫女さんが自由の身となった状態で魔王と恋するのは構わなかったかもしれない。だが彼女は巫女だった。

簡単になびかない女を（しかもそれが美人となれば）どうしてもモノにしたくなるのが女好きというものらしい。魔王の行動は日に日にエスカレートしていった。

それに痺れを切らしたのは誰であろう、ご神木だった。

正確に言うならば、ご神木に宿った精霊だ。

村を支配する魔王は必要悪である。しかしこのままでは大事な巫女を魔王に手箒にされるのではないか。そう危惧を抱いたご神木は思い切った行動に出た。

そう、魔王試験に挑戦したのである。

試験は一発合格だった。しかも本体であるご神木はクタ力村に残した状態で、である。

さらに驚いたことに、彼はその後にある領地決めてクタ力村を支

配する魔王に勝負を挑み、見事勝利して支配権を奪い取った。

そしてそれと時同じくして、村に残っていた巫女さんである女性が『勇者』となった。

そして現在、クタカ村の魔王はご神木である精霊、ククロであり、クタカ村の勇者は巫女である女性、リリなのである。

＊＊

一通り私が説明を終えると、ジヨシユは首を傾げた。

「つまり魔王様は、クタカ村の魔王と勇者は元から親しい間柄だからこちらの参考にはならない、と？」

「違う」

ジヨシユの言葉に食い込むように私は否定した。

「では……勇者が元巫女だというのなら戦闘に慣れていないから、とか？」

「それも違う」

「勇者になつて歴が浅いから？」

「違う」

ジヨシユの言葉を否定しながら口をとがらせた。

私の話を聞いたら少しは察してくれてもいいんじゃないかとも思うが、まあ無茶ぶりだと自覚しているのでこらえた。

「クタカ村の勇者と魔王はさ、仲がいいのよ。そりやもう熱烈に」
何しろ巫女さんのことを守るために魔王になるようなご神木の精霊である。

巫女さんも女だ。自分を守るために魔王を倒した相手を、しかも元々信仰の対象だった相手に対して悪い感情は持たない。

だから現在は、

「大陸中に評判が轟くほどの馬鹿ツプルになってるわけよ」

勇者と魔王、禁断の愛！ と一時期騒然となったそうだが、現在はまあ落ち着いている。何年経っても馬鹿ツプルが変わる気配がないからだ。

ふとジョシュの方を見ると、またぞろ固まっていた。頭の固い奴だ。

というか、

「ジョシュ、あんたククロに会ったことあるでしょ？ 二週間くらい前に来てたじゃん。散歩にーって」

あの魔王は何か楽しいのかわざわざツキバ村に来て森林浴をするのである。毎度思うが自分の村でやれ。っていうかご神木が森林浴ってなんでなんだ。自分自身の森林パワー浴びろよ。

「……セーターを拉致していった方ですか？」

思い当たつたらしいジョシュがはつとした様子で言った。

「そ。定期的にリフレッシュしたいんだって」

今まで何体のセーターが連れていかれたことか。連れていかれたセーターはそのままご神木専用の手入れ師にされている。

「しかし……勇者の方は？」

「会えるわけないでしょ。ククロの掌中の珠なんだから」

元々クタカ村の巫女というのは外部との接触が少ないのだ。ククロの伴侶となればなおのこと外部との接触は制限される。

「勇者サマも男だし、ピールも男だし、ジョシュも男でしょ？ 教えてくれて言ってもククロに一蹴されるんじゃないかな」

下手すりや痛い目に遭うかもしれない。

私の言葉にジョシュは頭を抱えてしまった。

「……つまりツキバ村の近隣にはまともな勇者がいないということですか？」

うめくような声に、私は肩をすくめた。

「うちの勇者サマ含めてね」

いつそ近隣の変わり種勇者に教えを請うて、イロモノ勇者に
しまつのも手かもしれない、と考えたが、そうなった場合責任はど
う考えても私に来るし、私の教育のせいで勇者サマがイロモノにな
ったという評判は不本意である。

その辺はジョシュも同じだったようで、周辺の先輩勇者に指導し
て貰おう作戦は企画段階で終了したのだった。

まともな奴いないのかなこの辺。

第21戦 禁忌を犯すなら（前書き）

今回は虫ネタにつき苦手な方は注意。

第21戦 禁忌を犯すなら

よく晴れた日のことだった。

魂が抜けたような状態のお子様二人をモンスターたちが『そこ』から連れだした。家の中に入れるにはいささか汚れていたので、私は遠慮なく魔法で出した水球をお子様二人にぶつけた。

気付けになるかと思ったが、それでもなお、お子様二人は呆然としたままである。

「だから入るなって言ったのに」

私がため息をつく傍らで、モンスターたちは忙しそうに立ち働いていた。

やってはいけないと言われるとやりたくなるのは人の性ってものだろう。

けれどもやってはいけないと言われるにはそれなりに理由があるわけで。

事の起こりは数時間前だ。

「なあ、あそこの小屋ってなんの小屋なんだ？」

修練が始まる少し前、勇者サマがそう尋ねてきた。

彼が指差しているのは魔王城からも鍛錬場からも微妙に離れた場所にある木造の小屋で、赤い屋根に白い壁、屋根には煙突と天窓がついている。出入り口である扉は小さく、可愛いドアノッカーがついている。

ちなみにテスハにおいて一般的なのは石造りの家である。ツキバ村周辺も例にもれず石造りの家が多い。屋根には傾斜がある。また、かまどやら暖炉やらを使っているためほとんどの家には煙突がつい

ている。かまどはともかく、この辺は冬に冷え込むために暖炉は必須なのである。

それはともかく、石造りの家しか見たことのない勇者サマにとって、件の小屋は珍しく感じたに違いない。この辺は物置ですら木造の小屋はない。

それにしても嫌なものに目をつけたなこのお子様。

「……あれはシルキーの家だから、入っちゃ駄目よ」

っていうかなるべくその話題には触れてほしくない。シルキーという単語を口にするのも個人的には嫌だ。ジョシュがいれば説明させたかもしれないが、ついてないことにジョシュは他のモンスターたちと次の鍛錬の準備のためにこの場にはいなかった。っていうかジョシュもシルキーについて知ってるかどうか怪しい。教えた覚えはないし。

「シルキー？」

勇者サマが首を傾げてピールと顔を見合わせている。二人とも知らないのだろう。

さらに質問してきそうな気配を察して、私は一気にまくしたてた。「あそこは決まったモンスター以外入っちゃ駄目な場所なの。入ると恐ろしい目に遭うから絶対に入っちゃ駄目よ！」

勇者サマが理解したかも確認せず、私はその場から逃げだした。シルキーたちのことは口にしたくもない！

よくよく考えなくても、自分が勇者サマぐらいの年齢の時に、「絶対に入ってはいけません」と言われた場所に入らなかったかといえどももちろん否なのである。むしろ危険とか恐いとか、そういった言葉は自身の冒険心を刺激するに十分だった。

まあそういうわけで数時間後、鍛錬と鍛錬の間の短い休息時間に、空気を裂くような子供の悲鳴が響いたのだった。そして冒頭に戻る。

ずぶ濡れのお子様二人をモンスターたちが拭いてやっている。

「……魔王様、彼らは何を見たのですか？」

ジョシュが不思議そうに尋ねてくる。私は肩をすくめた。

「シルキーに襲われたんでしょ」

「おそ、われた？ 彼らを襲う様なモンスターがいるのですか？」

心底びっくりしたようで、ジョシュには珍しく目をまん丸にしていた。

「まあ、襲うとかじゃれるというか……」

私はため息をついた。

うちのモンスターは凝り性が多い。よく言えば勤勉である。ただし自分の興味がある分野にだけ。

役に立つのであれば、魔法道具の開発、日用品の製作、料理、植物の栽培。役に立たないので言えばカタツムリレースの選手（現在第二十期生）育成、砂利で作った芸術作品、骨の収集などなど。何故か酒の研究をする奴がツキバ村に貸し出した奴以外いない。もつと増えればいいのに。

とかく、そういった凝り性のモンスターたちは信じられないくらい己の見出した道に手を掛ける。

さて、日用品を製作することに熱中したモンスターたちはそれぞれのやりたいことに分化した。

そんな中、ヨータと呼ばれるモンスターは日用品の中でも布製品を作ることに熱中した。羊を育てて毛糸を作るといのはすでにやっているモンスターがいたので、ヨータが挑戦したのは絹糸、つまりは養蚕だった。

現在テストハに存在している蚕というのは人の手がないと成長でき

ない虫と言われている。餌も自分で取れないし、木にまともに止まることもできないのだ。よって、人が小屋の中で餌を与えて育てなければならぬ。ついでに言うと、温度や湿度なんかも管理する必要がある非常にデリケートな虫なんだとか。

そういうわけで、養蚕に初挑戦だったヨータは非常に苦戦した。温度の調節を間違えて蚕が全滅したときもあるし、餌が足りなくて蚕が飢え死にしたときもあった。ヨータが蚕の数を増やした時には餌となる木が丸裸になってしまうとセーターと対立して熱いバトルを繰り広げたこともあった。

けれども苦心の結果、ヨータは無事に蚕を繭になるまで育て上げることができたのだった。

苦心の末だった。

苦心の末過ぎて、ヨータは蚕にかなり愛着を抱いていた。そりゃあもう、「こんな可愛い子たちを釜ゆでになんて出来ない！」と言いだすくらいに。本末転倒である。

結局、周囲からやいのやいのと言われながらも、ヨータは蚕たちをペットとして育てることにしたのだった。蚕は羽化すると割と早くに産卵して死んでしまうので、蚕二世、蚕三世とどんどん世代が変わっていった。それでもなお、ヨータの熱は冷めることなく、蚕たちを可愛がったのだった。蚕専用の可愛らしい小屋を作り、専用の餌用林をつくり、甲斐甲斐しく世話をした。

結果、ある時から蚕たちがモンスターになった。

これにはみんな驚いた。前代未聞である。

とはいえ、モンスターになった蚕たちは普通の蚕とさほど変わらなかった。違いと言えば、体のサイズと、繭をつくる前から太い絹糸を口から吐き出すようになったことと、寿命ぐらいなものだ。

名前について私はキヌちゃんて良いじゃないかと言ったのだが、

ヨータにより却下され、可愛いからという理由でシルキーという名前になった。可愛い名前は裏腹に、シルキーは元が蚕なのでかなり見た目がグロテスクである。名前詐欺もいいところだ。

で、そこまではいいのだが、問題はシルキーたちの習性だった。幼虫の時はまだ動きが鈍いからいい。

けれども、成虫になったシルキーたちは（ヨータ曰く）甘えん坊なので、近付いてきた人やモンスターたちにじゃれつくのである。想像してほしい、手のひらよりも大きい蛾が顔面めがけて飛んでくる様を。

それも一匹や二匹ではない。ヨータの丹精込めた世話により、シルキー達は常時成虫だけでも百匹近くいる。そのどれもが甘えん坊（あくまでヨータの言）なので、人でもモンスターでも小屋に入ってくる気配があるとそちらの方に一気に群がるのだ。幼虫のシルキーもシルキーで甘えん坊（個人的には認めたくない）なので、成虫よりはゆっくりだが這ってきてはこちらにぺたりと体を寄せてくる。想像しなくていい。気持ち悪いから。

知らずにシルキーの小屋に入ってしまった私は彼らの熱烈な洗礼を受けてしまい、絶叫した。半狂乱になりながら逃げだしたのだが、一週間近く悪夢にうなされた。未だにシルキーという名前を聞くと鳥肌が立つくらい恐怖だった。

だから私は誓ったのだ。シルキーの小屋には近付くまい、と。

「とまあ、そういうわけだから、勇者サマたちもシルキーに思いつきり甘えられたんですよ」

未だ鱗粉が取れ切っていない勇者サマ達はシルキー達に耐性がなかったらしい。あんな巨大な虫に平然としていられる子供も少ないだろうが。

「な、なんか、なんかペタって！ ペタってしたの！」

ピールがガタガタと震えながら言う。血の気が引き過ぎたせいで
もはや土気色だ。

「遊ぼうって言いながら襲って来たんだっ！」

勇者サマも震えながら叫んだ。

おや、勇者サマにはシルキーたちの言う言葉が分かったらしい。

「襲われちゃいないでしょ。噛まれてもいないみたいだし」

多少体に生糸や鱗粉がついていたりはあるが、二人とも怪我はしていない。

涙ぐんでいるお子様二人に私はやれやれと肩を落とした。

「要するに、あれよね」

「あれ、とは？」

ジョシュが私の方へ視線を向ける。私はひょいと肩をすくめた。

「事前の情報収集って大事だねってこと。行くなと言われる場所
に行くなら。分かった？」

私の遅すぎる忠告に、ピールはぶんぶんとうなずき、勇者サマは
恨めしげに私を睨んできた。

へっ。恨むなら自分の軽率さを恨むことだ。

十歳かそこらのお子様に言うのも酷な話だが、まあ私魔王だし。
それに勇者なんて何歳であろうと高潔で清廉で正義に則った行動を
求められるものだし構わないだろう。

余談だが、チャレンジ精神なのか何なのかその後にジョシュもシ
ルキーの小屋に入った。

十分後ぐらいに、いつも通りの無表情のジョシュが出てきたのだ
が、小屋から三步離れたところで立ったまま気絶してしまった。

どうやらモンスターであるジョシュにもシルキーの洗礼はきつか
つたらしい。

その日の勉強などはすべて中止となったので私としては万々歳だ。

とまあこんなわけで、お子様二人とジョシユは好奇心は猫をも殺すということわざの意味を痛感したのだった。

これからは行動を自重してほしいと願う。あいつらの性格からいって無理だろうが。

魔王の仕事　くもうすぐ総会

基本的に自己中心のかつ団体行動に向かないな魔王たちも、魔王になる限りは魔王試験に合格して魔王連盟に加盟しなければならぬ。

試験に合格せずとも勝手に魔王を名乗ることもできるが、その場合勇者以外からの攻撃でも死ぬし、歳も普通にとる（魔王になると老化しにくくなる）。また、試験合格後に魔王連盟に加盟しないでぶつちぎる選択肢もあるにはあるが、その場合支配する村が正規の手段で得られない。自力で他の魔王を排除して余所の町や村を支配するということも可能ではあるが、その代わりにこれ幸いと他の魔王から袋叩きにされる可能性がある。「他の魔王の領地を侵略してはならない」という取り決めは、魔王連盟に加盟しているときのみ有効だからだ。

どれだけその野良魔王が強かろうが、個人主義の魔王はそういう時に限って一致団結するため負けは必至である。過去の例を聞いてみると、一対百なんていうのもあったそうだ。いじめかつこ悪いという考えは魔王の中には存在しない。だって魔王だし。卑怯で何が悪い。

話が逸れた。

とにかく、魔王連盟に加盟している限りは様々な権利が保証される。それと同時に義務も発生するわけだ。

夕方、自室のソファに座る私の前に四つの幻像が浮かびあがっていた。

「今年の魔王試験と総会のうちの地域の役員は嬢ちゃんて決定じやな」

「賛成っ！」

「そうだな」

「ん」

「……今年のとていうか三年連続なんだけど私」

私の前に浮かび上がる四つの幻像、そこにはツキバ村の近隣の四人の魔王が映っていた。通信魔法の一種だ。上記の台詞は上からアリギ村のジジイ、チアーネのディーネ、クタカ村のククロ、バークロのミーミーヤンジャ、最後が私である。

さて、ツキバ村含めて上記の地域はクレハ地方と呼ばれているのだが、魔王試験と魔王総会においては各地方から一人ずつ役員という名の雑用係が招集される。今日はその役員を決める話し合いという名の決定通告である。去年もおとしも話し合った記憶なんぞかけらもない。

「今年こそ役員は公平にくじで決めようよ」

私が抗議すると、ディーネが笑う。

「なんだい、文句があるなら魔法勝負で決めてもいいんだよ？」

「拳で決めてもいいんじゃないよ」

と、ジジイも嫌な笑いを浮かべて言う。

「ワイ役員ガンバルー」

今更言うまでもないが、私は最弱である。恐らくは彼らが半分の力を出さないでも軽く虫の息になる自信がある。要するに絶対勝てない。

まあそういうわけだからクレハ地方での面倒くさい仕事は全て私に押し付けられるというわけだ。魔王に良心とか思いやりを期待するのは無駄なことである。だって魔王だし。くそっ。

「そういえば、空ちゃん子守の方ははかどってるかい？」

と、ディーネが面白そうに聞いてくる。建前上の話し合いが終わったのでここからは雑談である。ちなみに彼女の言う空ちゃんというのは、不本意な私の通称「空の魔王」を略したものである。

「……子守じゃなくて教育係ね」

私が嫌そうに訂正すると、ククロがびっくりした顔を言う。

「あれ、あの子たちって空の隠し子じゃなかったの？」

ちよつと待てククロ。あんた会話こそしたことはないけど勇者サマ達見たことあるはずでしょうが。

「私まだ十九だから！ あんなでかい上に生意気な子供いてたまるか！」

憤然として抗議すると、ジジイがおかしそうに笑う。

「いやいや、有翼族は恋多き種族というから、おかしくはないじゃろう。うむ、若いもんはいいのう。ああ、でも嬢ちゃんには色気がないから無理じゃな」

「何かにつけては家でだらしてるか食べてるか飲んでるかだものねえ。ちよつとはおしゃれして外に出たらどうだい？ そんなじゃすぐにウミウシみたいな締りのない体になっちゃうよ」

人の心に突き刺さる言葉を次々と放ってくる連中である。ミーマーヤンジャが話に加わらないのが不幸中の幸いだ。奴の場合、単にうとうとしているから話を聞いていないだけだが。

「最近はちゃんと運動してるし体も鍛えてるから大丈夫でしょ。余計なお世話っ」

「ふむ。嬢ちゃんが体を鍛えるようになるたあのう。子育てもやってみるもんじゃな」

感心したようにジジイが言う。だから教育係だっちゅうのに。

「しっかし空ちゃんも豪胆だね。勇者を育てるなんて最初に聞いた時は耳を疑っちまったよ。フグが自分の毒にあたって死んじまつたっていう方がまだ納得がいくってもんさ」

しみじみというディーネに、ククロが不思議そうに首を傾げた。

「あの子供、バーク 口の子供なんだろう？　なんでわざわざ空のが。バーク 口にも腕っ節の強い奴はいるだろうに。　やっぱり隠し子なんだろう」

「違うからっ！」

否定するも三人とも笑っていて話にならない。これはもう遊ばれているらしい。

私が唸っていると、部屋の扉が叩かれた。返事も聞かずに入ってきたのはトウイである。

「談笑中のところ悪いな。クレハ地方の役員はこいつだな？」

女の部屋にいきなり入ってくるな。

っていうかせめて役員は誰になったかって聞いてくれ。それじゃ最初から私に決まっていたみたいじゃないか。決まっていたけど。……悲しくなんかないやい。

「おお、トウイか。久しいの」

と、ジジイが言う。

この通信魔法は範囲内の人間なら映し出すため、他の四人にもトウイは見えているのだ。

トウイはおもむろに私の隣りに座った。オヤジ臭いから近付かないでほしい。

「空ちゃんに決まったよ。なんだい、総会までまだ日はあるのに急いでるねえ」

ディーネが呆れたように言うと、トウイは苦々しげな顔をした。

「お前らの誰一人として締め切りを守らないからだ。役員の決定通知すらこっちに出してこないんじゃないや、仕事が回せねえだろうが」

「仕事は部下にさせるもんじゃろ。わざわざお前さんが嬢ちゃんのところまで行く必要はあるまいに」

仕事を全て部下に丸投げしているジジイらしい言葉である。私が言えた義理じゃないが。

「仕事ついでに様子を見に、な。美味しい飯も食いたいし」

現在夕方である。長居するつもりかこのおっさん。

「それからお前ら、総会にはちゃんと来いよ。来なかったらこつちが絞られるんだからな。特にミーミーヤンジャ！ お前また寝坊したりすんなよ」

「……………ん」

かなり不安な返答である。

その後小一時間ほど井戸端会議的なことを喋ってから通信は終了した。ミーミーヤンジャはずっと寝ていた。

「さて、こつからが本題なんだが……………」

幻像が消えて静かになった部屋で、トウイが煙草に火をつける。

「お前、総会の間あのちびっこどうするか決めてるか？」

あのちびっこ、というのは勇者サマのことだろう。

魔王試験というのは魔王総会の開催中に行われる。いかに総会が白熱していようと試験官及び雑用係はそこから抜け出して仕事をしなければならぬ。

ま、白熱しているといっても単に乱闘騒ぎや小さな子供並みの口喧嘩だから、そういった騒ぎが好きな連中以外は構わないのだけれども。

ともかく、魔王試験に合格した新人魔王たちは、試験終了後に魔王総会へとすぐさま参加し、所信表明をしてから自分の支配する領地を決めるとというのが通例である。

私の時は、すでに魔王試験での事が伝わっていたらしく爆笑とともに迎え入れられた。そういう時は無駄に団結力があるのが魔王なのである。

なににせよ、魔王総会が終わるまでは一週間近くかかるという寸法だ。その間当然ながら私はツキバ村を空けることになる。

勇者サマのことをジョシュに任せるとい一手もあるのだが、それ

にしたって一週間だ。モンスターたちはあのお子様たちにやたらと甘いし、仕事から帰ってきたら私の城の主が勇者サマになっていた、なんてことも恐ろしいことにありうる。

ジョシュさえおいていけばなんとかなるかもしれないが、出来れば人語を話すモンスターを総会へ連れていきたい。魔王試験の受付係なんかだと人語を話せないと困るのだ。何しろ受験生たちはまだ魔王になっていないので、モンスター言語が分からない。それにこの世界で人語は共通語。普段人語を話さない種族などもモンスター言語は分からなくとも人語は分かる。ぜひともジョシュに受け付けの仕事を押し付けたいところだ。

「総会の間は休暇ってことにして、勇者サマは自分の村でくつろぐなりピールと遊ぶなりしておいてもらおうかと思ってるんだけど、何かあるの？」

「いやな……」

トウイは煙を吐き出しながら頭をかいた。なんとも困り果てた顔をしている。

「そのー、あれだ。お前さん、あのちびっこを総会に連れてくるつもりないか？」

「はあ!？」

思わず素っ頓狂な声が出た。

「ちよっと、トウイ! 何とち狂ったこと言ってるの? いつの間におっさんから耄碌ジジイに変わったの? それとも水虫で頭やられた?」

「俺は水虫じゃねえ! それからおっさんじゃなくてお兄さんと呼べ!」

ヤニ臭い無精ひげ生やしたおっさんが何をぬかすか。

「そんなことはどうでもいいけど、なんで勇者サマを魔王総会に連れてけなんて言うわけ?」

「どうでもってお前……!」

トウイがショックを受けたような顔をしているが、その辺は構ってられるか。

やがてトウイも言い争うことの不毛さに気付いたようで、一つ咳払いをして話を本題に戻した。

「あー……お前さん、週刊魔王自身って雑誌知ってるか？」

「購読してるよ。最近は忙しくて読んでないけど……？」

唐突な話題の変更に私は首を傾げた。

件の雑誌というのは、要するに魔王の間のみ流通する情報誌である。記者は某魔王の配下だそうで、魔王の役に立つ特集やら面白情報やらが書かれている。

私も愛読していたのだが、最近は勇者教育が忙しくて部屋の隅に積まれたままの状態だ。二か月分近いそれがうつすらほこりがかぶっている。

私の視線に気付いたトウイは立ち上がると、雑誌の山に近付き、その中から一冊を取り出した。

「前にお前さんとここに記者が来たろ？」

トウイに聞かれ、私はそこでようやく思い出した。

「来た来た、一カ月ぐらい前に。勇者を育てる魔王ってことで取材させてくれて。面倒だから断ったけど」

「お前さんはな」

そう言つて、トウイはぺらぺらとページをめくる。

そしてある記事を私に示した。

大きな見開きページには、得意満面の勇者サマの顔が映っていた。見出しに踊る文字には、

『魔王に教育される勇者「僕が魔王を退治してやる！」』

「あのちびっこは取材を受けたらしい」

トウイはひょいと肩をすくめた。

私はがくりとうなだれる。

あんっのお子様がつ！

かなりの脱力感が襲ってくると同時にふつふつと怒りも湧いてくる。なにこの矛盾をはらんだ感情。

頭を抱えて今後のことを憂いていると、トウイが私の肩を叩いた。「やつちまったもんはしょうがない。この記事もまあ……好意的だ」色々おかしいだろそれ。

と思いつつも記事を読んでみれば、確かに好意的だ。

こう、なんて言うんだろう。小さい子供が将来の夢を希望いっぱい夢いっぱい語ってる様を応援している感じというか……。記事の締めのも「今後の成長に期待」ってなってるし。これでいいのか週刊魔王自身。

「特に女魔王からの反応が良かったらしくてな。月一で特集組むことが決まったそうだ」

……頭が痛い。

「で、今回の総会でも余興としてあのちびっこを連れて来れないかって要望があつてな」

「嫌。絶対嫌」

即座に断ると、トウイは苦笑した。

「だろうな。あのちびっこにや早いだろうし」

「ってというか私がストレスで死ぬから」

ただでさえ気苦労の多い魔王総会、あの生意気な勇者サマを連れていくなんて考えるだけでも胃が痛くなりそうだ。

っていつかいつの時期だろうと勇者を魔王総会に連れていくなんて言語道断だ。そもそも魔王総会は魔王以外には秘匿とされているものである。日時も会場もそもそもその存在も。

「俺としても、あのちびっこは連れて行かない方がいいと思うぜ。大概の勇者つてのはほら、いい歳で正義感も強いし分別もついているが子供なら乗せやすいからな。学者肌の連中が研究したいってうるさいんだ」

やれやれとトウイが肩をすくめる。

私はうんざりとした気分になった。

「それって、連れていかなかったら私が文句言われない？」

魔王連盟の中でも下から数えが方が圧倒的に早い実力の持ち主だと自負している私である。他の魔王からの反感は買いたくない。

「ま、その時は俺が適当にフォローしてやるさ。肩書きつてのはこういう時に使うもんだからな」

トウイが力かと笑う。調子のいいおっさんだが、実力はぴか一だ。

「くれぐれもよろしくね。テスハの代表魔王様」

「おう。大船に乗ったつもりでどーんと構えとけ」

しかしちよつとばかり不安が残るのはどうしようもあるまい。

結局、勇者サマ達と会わないようにはしていたが、トウイはそのままうちで夕食を食べた上に泊まっていき、トウイの部下が連れ戻しに来た翌日の昼まで居座ったのだった。

代表魔王って実は暇なのか？

第22戦 中級魔法講座（前書き）

魔法についてのさらに詳しい説明。一部ダークサイド。

第22戦 中級魔法講座

勇者サマ達が魔法の練習を開始してから一カ月弱。日々の魔法の練習によって勇者サマもピールも随分と上達して来た。

当初は私的でないかと当てる事ができなかった勇者サマも、まだまだ外すことも多いが、今では近くの的ならある程度命中させることができるようになっていた。

ピールとは違って勇者サマの魔力が低いので、一日の練習量が増やせないのが悩みどころだ。あくまで勇者サマを鍛えるのが目的のため個別指導はしない。っていうか面倒くさい。ピールは力を余らせている状態だろう。逆に勇者サマは魔法の練習があまり進まないで欲求不満な状態が続いている。

とはいえ、魔力がなくても理論なら勉強できる。

「今日は魔法の種別について勉強しましょう」

「はい」

ジョシュの言葉にお子様二人が良い子の返事をする。

私は頼杖をついていたためにチョークが飛んできた。うるさい奴だ。

「魔法にはいくつかの種別があります。まず第一種と言われる魔法は、水や火などの本物に近い物質を作り出すものです。現在あなた方が練習している魔法は第一種の初歩になります。あれらはある程度時間が経過すると消失します」

ジョシュが黒板に文字を書きながら解説する。

ちなみに鍛錬の際に魔法で濡れになった後にモンスターたちがわざわざ体を拭いているのは、その魔法で出した物質が消えるま

でに風邪をひかないようにという配慮らしい。過保護だ。

「せんせー質問！」

と、勇者サマが元気よく手を挙げる。

「本物に近いぶっしつって何だ？」

「本物に近い物質です」

答えになってないからそれ。

不満そうな生徒たちの様子に気付いてジョシユはさらに説明した。

「……魔力が結晶化したものだと言われています。しかし、学者たちが研究しても本物に近いけれども一定時間経過すると消失する何かだとして分かっています」

無表情ゆえに分かりづらいが、ジョシユは微妙に困り顔のようである。

まあその気持ちもわかる。炎や雷、風なんかならともかく、消失する水や土って何なんだ一体という気持ちになる。魔法使いによっては宝石に偽物なども作れるのだそうだ。

反論がないことに皆が納得したと思ったのか、ジョシユは眼鏡を押し上げると説明を続けた。

「逆に第二種魔法は物質を固定化する魔法です。簡単に言えば、魔法でつくりだした物を本物にしてしまうということです。先ほどの水などでも、第二種魔法であれば本物にすることが可能です」

砂漠地方なんかだと水を作り出す魔法道具が飛ぶように売れるらしい。高いしそれほど水が出来るわけではないが。

と、今度はピールが首を傾げた。

「魔法で作ったお水も飲めるよね。それにお水だつて時間が経ったらおしっこになっちゃうでしょ？ それじゃだめなの？」

ごくごく素朴な疑問ではあるが、なかなかいい質問である。私が解説するつもりはないが。

ジョシュはその言葉に一つうなずくと、黒板に人間らしきものを書いた。最近ちよつと上達してきたのか、絵を見ると恐らく人間だろうと分かるぐらいにはなってきた。

「どんなものにも、抗魔力というものがあります。魔力に対しての抵抗力です。一般的には無機物よりは生物の方が強いと言われています」

ジョシュはさらに木っばいものと丸を黒板に書き、その間に比較記号を書く。大きい方から人間（っばいもの）、木（推定）、石（予想）となっている。それらに向かって幾本かの矢印が書かれた。さらに内部からの矢印も書いた。

「魔法を作用させるには、外からと内からの二つの方法があります。第二種魔法で作ったものは本物の物質なので抗魔力は関係ありません。しかし第一種の魔法の水を飲むのは外からの作用になります。体内に入ると」

言いながらジョシュは矢印を人の絵の手から（どうやら口だったらしいが）内部へと矢印を伸ばし、バツ印を書いた。

「外よりも中の方が抗魔力が強いため、吸収されることなく消失してしまいます」

「消えたらその水はどこに行くんだ？」

再び勇者サマが質問をする。子供って好奇心旺盛だな。

「本物に近い物質から魔力に戻るとされていますが、それを飲みこんだ人間に吸収されるかどうかは定かではありません。適性があるようです」

「てきせーっていうのは分かるのか？」

「分かりません」

一刀両断である。

不服そうな勇者サマに対し、ジョシュは眼鏡を押し上げながら無表情に告げた。

「何事であれ、分かることは限られています。ですから分かること

を知って自分で考えることが重要なのです。無知蒙昧はいざという時に自身や他の人を　殺します」

いきなりの重々しい言葉に、お子様たちはぴんと背筋を伸ばした。それを確認したジョシュはここぞとばかりにたたみかける。

「知は力です。たとえ力が劣っていても、体が小さくとも、それを知恵で補うことができます」

……まあ別に、適当にやっても何故かうまくいくのが選ばれし「勇者」って奴なんだけどね。

しかしここでその茶々を入れると勇者サマが図に乗る上にジョシュに目茶苦茶怒られそうなので止めておく。沈黙は時として金だ。

「では次に、第三種の魔法について説明します」

再びジョシュは本題に戻る。お子様たちの気合いもすっかり補充されたようだ。

「第三種魔法は空間、時空、生命に関わる魔法です」

カツカツとチョークの音が響く。

「空間の転移、召喚、通信、人工生命の作成、治癒などが主なものです」

箇条書きされる文字は綺麗である。文字は。ずっと絵を使わずに文字だけで解説すればいいんじゃないかなろうか。

「空間の転移は、離れた場所に短い時間で移動する魔法です。距離があるほど転移は難しく、また、既知の場所でなければ移動は難しいとされています」

「僕だったらどれくらい移動できるんだ？」

勇者サマがわくわくした様子で尋ねている。いや、あんたの魔力じゃ到底無理でしょ。

しかしジョシュは真面目腐って答えて、
「できません」

「なんでだ!？」

シヨックを受ける勇者サマに、ジヨシユはため息をつくこともなく無表情に説明する。

「第三種に限らず、魔法は一定以上の魔力がなければ発動しません。また、最初は大雑把なことしかできず、後から精密な調整が可能になります。よって、指一本分の距離の移動であっても、消費魔力を抑えられるのはその魔法を使いこなしてからということになります」

料理で言うところのあれだ、当初はレシピの通りにしないと作れない。そこから分量を減らして少量の同じ味の料理を作ろうとしても難しい、という感じ。魔法の細かな調整は、それこそ小さじどころか一つまみレベルの微調整だからだ。得意な連中は神がかったレベルでの微調整が可能だが、苦手な奴はトコトン駄目。料理オンチもかくやである。

「召喚できるものは最初は選べませんが、上達すると召喚対象を選ぶことができます。通信は簡易なものであれば声だけ、映像だけ、高度なものであれば幻像として自分と対象者を映し出すことができます。人工生命は高度であればある程寿命が延び、優れた能力を持ちます。治癒魔法はレベルが高ければ高いほど痛みなく傷を癒すことができます」

どうやら質問を挟まれる前に一気に説明したかったらしいジヨシユは、やや早口で説明を終えた。

「治癒っていうのは回復魔法と違うの？」

ピールが首を傾げた。

ジヨシユは眼鏡を押し上げた。

「回復魔法は第一種魔法と第二種魔法が混合したもので、一時的に怪我をした部分を魔法で作った血肉で補うものです」

「一時的？」

「はい。完全な第二種魔法ではないので、本来の体が回復し始めると、その部分から魔法で作り上げた部分は消失していきます」

うまく使えば拷問とかにも活用できそうだ。無限に肉をえぐられ

る痛みとか発狂しそうだな。

「治癒魔法は回復魔法では治すことのできない、毒、麻痺、病氣、体の内部の怪我などを治療することができます」

「馬鹿は治せないのよね」

無言で鞭が飛んできた。痛い。

「総じて、第三種魔法を使うには多大な魔力が必要となります。また、第三種魔法は知の魔法とも呼ばれ、知識の有無によって発現する効果が異なるとも言われています」

「別名キチガイ魔術師向け魔法、だよな」

私がため息とともに呟くと、お子様二人から訝しげな表情を向けられた。私は肩をすくめる。

「第三種魔法の中でも召喚魔法と人工生命の作成、治癒魔法は狂ったみたいに研究に没入する奴が多いのよ。召喚魔法で子供をさらって売り飛ばしたり、モンスターと人間を合成させた合成獣づくりだったり……………」

年に何回かはそういった手合いが摘発される。

そのたびに哀れな被害者が発見され、一層の警戒が呼びかけられるのだが、未だ加害者も被害者も途切れることがない。

「ひどい……………」

「とんでもない悪人だな！ 僕がせーばいしてやる！」

お子様二人が憤然としているのに、私は乾いた笑みを浮かべる。
「いつか勇者サマが強くなればできるでしょ」

私は言わなかった。そういったキチガイ魔術師たちはほとんどが人間で、大抵は権力者のお抱えであることを。摘発されるのは大抵トカゲのしっぽ切りであるということも。

希望的観測を述べるならば、いつか本当に勇者サマが強くなればきっとその勇者特性でもってそれらの悪人たちを成敗することも可能だろう。………… 背後にいる権力者たちがどうなるかは別として。

関係ないが、その日以降お子様たちの間で魔法ごっこが流行り出した。「空間転移！」とか言いながらそれどう見てもダッシュで移動しているだけでしょうなんて突っ込んではいけないのだろう。

第23戦 勇者サマの家庭事情（前書き）

シリ阿斯＋やや鬱話

第23戦 勇者サマの家庭事情

すったもんだはあったものの、魔王総会の間は勇者教育は中止ということになった。先生役のジョシュも連れていくからだ。

お子様たちには建前上「夏休み」と言っておいた。馬鹿正直に魔王総会に行くのだ、なんて教える奴はいない。魔王総会は魔王のみに伝わる極秘事項なのだ。

とりあえずお子様たちには夏休みと言い渡し、私自身はバカンスに出かけるということにしておいた。期間は未定。私が帰り次第そのことをモンスターがお子様たちに伝えるということにしてある。勇者サマはするいなんだと散々不平を鳴らされたが、その辺は無視だ。ピールが無邪気にお土産を頼んでくるものだから若干心がやさぐれた。仕事だっつ。せつかくだから数日遊んでこようかな。私が留守の間ヤトに勇者サマのことを頼んだが、さて、エネルギーなお子様が何日もつものか。一番迷惑をこうむるのはヤト兄だろう。いい気味だ。

魔王総会や魔王試験の最中、私はバークローに残してきた勇者サマの心配を まったくしていなかった。何しろ私は下っ端役員。魔王総会の最中は目も回るような忙しさ。押し付けられた仕事を片っ端からジョシュに押し付けたというのにそれでもなおてんでこ舞いである。下っ端だから。というか弱いから。他人の心配なんてしてられるか。

総会が終わってくたくたになって遊ぶ元気もなく帰って来た私を迎えたのは、なにやら複雑そうな面持ちのモンスターたちだった。ジョシュの方を思わず見てみたが、奴も事の原因を知らないように、無表情のまま黙っている。

とにかく報告を聞こうということで、家に入った私はソファの上

でふんぞり返った。座ってふんぞり返るのは魔王の基本スタイルだと思う。

留守を任せていたモンスターたちは、非常にばつの悪そうな顔をしてなかなか話しださなかった。終いにはお互い肘やら尻尾でつつき合って報告する役目を押し付け合いだした。

そんなヤバいことが私の留守中にあつたのだろうか。

不安で嫌な汗をかいていると、意を決したように1カメラ2カメラが飛んできた。そして私の目の前のローテーブルに着地する。続いてミルクちゃんがカメの記録した映像を映し出す水晶玉を持ってきてテーブルの上に置いた。

それではようやく思い出した。私の留守中、ジョシュの提案で勇者サマ達の私生活を隠し撮りさせていたのだ。ちゃんとバーク^{ミーミヤン}の魔王^{ジャ}には許可を取っている。樽一杯の酒を要求されたが。あのウワバミめ。いや、本当に蛇だけど。

普段生意気なガキンチョの弱みを掴んでやろうというのが私の目的で、生活パターンから課題を見つけたり、より思考パターンを把握たりしようというのがジョシュの目的だ。当然ながら前者は口に出していない。言わぬが花だ。

何かまずいものでも写してしまったんだろうか、と私は首を傾げた。

ややあつて映し出された映像は私の想像を裏切った。
もちろん、悪い意味で。

木剣背負った勇者サマが道を歩いている。遠目にぼろっちいつり橋が見えるから、恐らくはバーク 口からアリギ村に向かっているのだらう。ヤト兄のところか、ピールのところかだらう。

と、勇者サマの前方からバーク 口の子供たちがやってきた。勇者サマと同じ年か、少し上くらいの年齢の子供が五人だ。

それまで無邪気に笑っていた子供たちは、勇者サマに気付いた途端、その表情をがらりと変えた。

「ああー！ 捨てられっ子だー！」

五人の中では一番年少であろう子供が勇者サマを馬鹿にしたように指差す。

すると他の子供もクスクス笑って、

「本当だ、捨てられっ子だ」

「いらない子だ」

「うげえ、嫌な奴と会った、最悪う」

などと口々に言う。

勇者サマはいええ、拳を握ってうつむいていた。いつもの威勢の良さはどこへいったのかと思うほどだ。

「ほら、どっか行けよゴミ！」

一人が勇者サマに石を投げる。勇者サマはそれを黙って避けた。

「避けるなよ！ 捨てられっ子の癖に！」

そう言っつて別の子供が石を投げる。他の子供たちも次々に勇者サマに向かって石を投げだした。その顔には嘲笑が張り付いている。

ためらいがない。十中八九、常習だ。

苦ヨモギを口の中に突っ込まれた気分になった。口の中から頭の芯まで一気に広がる苦々しさだ。苦ヨモギだってアブサンにすれば苦味はあっても美味くはなるが、あれだって毒があるから飲みすぎ

ると体に悪い。

私の目の前で繰り広げられる光景はまさにそんな感じの、飲み下すのが嫌になるようなものだった。

「……………僕は勇者だぞ！」

悲鳴のように勇者サマが叫んだ。

しかしそれで子供たちの様子が変わることはなく、

「捨てられっ子の癖に、なーまいき」

「勇者だったら俺らに尽くすのが当然だろ」

相変わらず馬鹿にしたように子供たちは嗤う。

「う、う、う……………！」

恐らくは怒りだろう、顔を赤くさせた勇者サマは子供たちに突進すると、拳を振りかざした。

が、

「俺たち殴つたらお前なんか勇者じゃなくなるんだぜ！」

年長の子供の言葉に、振り下ろされかけた勇者サマの拳がぴたりと止まる。

「勇者じゃなくなったら本当に用無しだよね」

一人が心底愉快そうに笑う。子供らしい、むき出しの悪意だ。

「どっか行けよ、ばーか」

加減のされていない蹴りが勇者サマの腹に見舞われる。勇者サマはまともなガードもとらずにそれを食らい、地面に転がった。

子供たちはめいめいに勇者サマに石を投げたり砂を掛けたり、終いには唾を吐いたりしてその場を去っていった。

残された勇者サマはしばらくその場で倒れ伏していたが、やがてノロノロと起き上がってアリギ村の方へと歩き出した。出来の悪い人形を彷彿とさせる、不気味に表情が欠如した顔だった。

映像が途切れた。

なるほど、これは報告し辛い。

「……………あー、そういえば勇者サマの出自について全然聞いてなかったね」

視線が泳いでしまう。

興味がないという面もあるが、必要以上に知ろうとしなかったし
わ寄せが来たのかもしれない。ハゲも薄らハゲも勇者サマについて
村長 隣村村長
詳しい説明をしてこなかったのをもっと疑問に思っべきだった。

一応うちのモンスターもボンクラではないので、今回のことを知
ったらそこから勇者サマの周辺を洗うはずだ。モンスターたちはよ
っぽど自分たちの口では説明しなくなかったのか、あらかじめ用意
していたのだろう報告書らしこものをジョシュに渡している。

いや、そこは私に渡してよ。

心の中で突っ込みつつも、ジョシュの報告を待つ。

ジョシュはいつも通りの無表情であるが、かえってそれが恐ろし
い。

ややあつて、ジョシュは報告書から目を上げた。

「では報告します」

「疲れてるから簡単にね」

私が言つと、モンスターたちから非難がましい視線を向けられた。
しょうがないじゃん。仕事でくたくたに疲れて帰ってきたのに
長くて重たそうな話なんて集中して聞けないっての。

ジョシュもしばらく無言の圧力をかけてきたが、やがて諦めたの
か、ため息を一つついて口を開いた。

「詳しくは明日、改めてご報告しますが」

くそっ、一朝一夕で終わらない話か。

「彼は現在、バークー口の村長に世話になっているようです」

私は首を傾げた。

「世話になつて……ってことは、村長の子供じゃないの？」

あんな次期村長、私だったらまっぴらごめんだが。

「どうやら違うようです。彼の母親はバークー口出身で、彼自身もバークー口で生まれています。しかし父親は不明で、母親も彼が五歳のころに行方不明になっています」

「不明の理由は？」

「バークー口を出た母親が妊娠した状態で戻ってきたそうですが、父親の名前を決して明かさなかったそうです。母親は恐らく、新しい男が出来たから子供を捨ててバークー口を出ていったのだらうと元々男関係が……は、激しいという噂のあった女性だったようです」
なるほど、それで捨てられっ子というわけか。どうでもいいけど微妙なところで恥じらうな。こっちが恥ずかしくなるでしょ。

五歳といえば物どころもついているはずだ。母親の失踪前後のことも覚えているだらう。

「元々母親の方も早くに両親を亡くしていたこともあって、バークー口では少々浮いていたようです。そのため村を出て行ったそうですが、夫も連れずに妊娠して出戻ってきたと」

だとすれば、周囲の風当たりはさぞやきつかっただらう。未婚の女性の妊娠は忌避されるものだ。もしも身ごもっている女性が伴侶を亡くしたならば、子供が生まれるまでは喪に服することが通例だ。その母親が喪服でない服装で戻ってきたのならば、周囲の反応を予想することはたやすい。父と別れた後に私を身ごもったことが分かった母に対しても、周囲の感情はひどく悪いものだったし。

そもそも婚前交渉自体が、全惑星の人間の八割以上が信仰していると言われるクエナ教の教えに反することだ。未婚女性の妊娠などもつてのほかだろう。

「それに加えて母親が彼を一人残して姿を消したことから、彼は、その、そういった女性の子供であり、捨てられた子供であるという認識が広まったようです。身寄りがない子供は本来教会に預けられ

るはずだったのですが……」

そこでジョシユは言葉を切った。

その先は言わずとも分かる。鼻にしわが寄った。

「クエナ教会の教えに反した女から生まれた子供だからって拒否されたわけね」

勇者サマのためではない怒りがわいてくる。

宗教上の教えというのは神の意志というよりは、実生活に必要なルールを定めた物に過ぎないはずだ。集団を形成し、保つために必要なルールが集まって経典となり、実践される。神の御意志という言い方は、単に人民の反発心を抑えるための方便だ。その教えがつけられた時にはその必要性があり、意味があつた。

しかし時が経てばそれは形骸化し、多くの敬虔な教徒という名の生き人形たちはその教えの真の意味を理解しようとしてもしない。それどころか自分たちの都合のいいように捻じ曲げずらする。

私の怒りを感じてか、ジョシユはいささか戸惑ったようだが、静かにうなずいた。

「一時は孤児院に送られたそうですが、そこで問題を起してバークーロに出戻りとなり、村長宅に引き取りになったそうです」

五歳かそこらの子供がどんな問題を起したというのだろう。っていうか、一週間かそこらでよくもまあここまで調べ上げたものだ。バークーロの子供の様子からして、尋ねたら悪意たつぷりに嬉々として話してくれそうだが。

しかしふと気付く。

「確かバークーロの村長夫人って……」

私の言葉を遮るように、カメが鳴いた。

そして再び映像が映し出される。

最初に映ったのは金のかかった作りの玄関だった。恐らくはバーク口の村長の家だろう。

視点は移動し、家の裏手へと回り込む。

裏庭で、勇者サマが木剣を振っていた。まさか勇者サマが努力しているとは意外だった。子供というものは夏休みには遊び呆けるものだという先入観があったためにかなり意外だ。勇者サマなんて真っ先に遊びに行つてそうだし。

ともかく、勇者サマは一通り木剣をふると、汗を拭いて屋内へと入った。

カメはそれを窓の外から追つていく。

やがて勇者サマは食堂らしき部屋に入る。そこではすでに村長夫妻が食事を始めていた。つていうかこれ、食事終盤じゃないか？

勇者サマは他の二つより圧倒的にボロい椅子に座ると、すでに冷めていそうな料理を食べ始めた。

薄らハゲの方は勇者サマを多少気にしているようだが、声をかける気配はない。そして夫人の方は勇者サマを一瞥もしなかった。まるで勇者サマがいないかのように。

先に食事を終えた薄らハゲの方はさっさと食堂から出て、夫人の方は無言で食器を片づけていた。

勇者サマも無言で食事を終え、食器を片づけている。

その後も村長夫妻の家での勇者サマの様子が映し出されるが、それのどのシーンでも勇者サマが誰かに話しかけられている様子はなかった。

村長夫人は敬虔なクエナ教徒のはずだ。禁忌の子に自ら関わろうとするはずがない。

映像を見終わった後、私が思ったことは至って単純だった。

「色々と納得がいったわ」

胸の中のもやもやを吐きだすように息を吐きだしたが、気分は一向に晴れない。

なぜ隣村の勇者サマの教育係が私に押し付けられたのか。

なぜ遊び盛りの子供には楽しくないであろう勇者教育にめげずに毎日来ているのか。

なぜ勇者サマが朝早くから夕方まで、時には夜までうちにいるのか。

村長夫妻がこうなのだ。他の村の大人たちの反応も推して知るべし。

「どうなさいますか、魔王様」

気がつけば、ジョシュだけでなく他のモンスターたちも私を見ていた。

どうするって、どうもこうもないだろう。

「どうもしない。今までどおりでいいでしょ」

私の言葉にジョシュの眉がピクリと動いた。

眼鏡を指で押し上げると、ジョシュは平坦な声で言葉を投げかけてくる。

「お言葉を帰すようですが、魔王様。このままでは彼の情操教育上、あまりよろしくないのでは？」

ジョシュが言いたいのは、つまりはあれだ。勇者サマを本格的にうちで引き取ってはどうか、とか、隣村の村長に苦情を言うのはどうか、とかそういうことだろう。

馬鹿馬鹿しい。

「ねえ、ジョシュ。他のあんたたちも、今まで勇者サマから助けてって言われたことある？」

モンスターたちは互いに顔を見合わせていた。しかし名乗り出る奴はいない。

「ないでしょ？　なら、手を差し伸べる必要なんてない」

「しかし、彼はまだ子供です」

「子供にだって考えはあるのよ。プライドも」

ジョシュと睨みあう。

少なくとも、この件では譲る気はない。

「この件で私が動くつもりはないから。あんたたちも余計なことしないでね。くれぐれもいつも通りの態度を変えないように」

モンスターたちは不満そうではあった。

もしも従わないようならば、魔王の権限を使うつもりではあったが、

「……………承知いたしました、魔王様」

一番発言力がある（口達者とも言つ）ジョシュが折れたことにより、他のモンスターたちもやや納得がいかないうちはあるが、私

の意に沿うことを示した。やれやれだ。

中途半端に事情を知っている人から同情されることほど惨めなことはない。少なくとも私はそうだった。

勇者サマの生い立ちにまつわることは、勇者サマの人生の問題だ。勇者サマに自力で解決して貰うのがベストだろう。他人が横入りして解決したって当人の劣等感やら何やらが振り払われるわけではないのだ。私が自ら進んで助ける必要はない。勇者サマがつぶれてしまふというのなら、その時はその時。その程度の人間だったというだけだ。自分の人生は自分で切り開いてもらおう。

よしんばあの勇者サマを助ける必要があつたとしても、それは私と私の部下以外の存在であるべきだ。冷たいと思われても構わない。だって私魔王だし。

まあ、万が一勇者サマが自身の意思でこちらを頼ってくるというのなら、条件次第で助けることもやぶさかではない。

現在は私が教育係をしているから勇者サマはツキバ村とバークー口の二つの村に所属している勇者だが、本人の意志させあればツキバ村の方に定着させることもできるだろうし。事実上ツキバ村の勇者にしてしまい、バークー口に向かわせるときに貸出料でも報酬でもぶんどってやればいいのだ。

実質、天災人災などの被害を最小限に食い止められるのは勇者だけだ。その時は勇者サマにはせいぜい私の支配地の便利屋となってもらおう。外道？　だって私魔王だし。

第24戦 洞窟に眠る宝

洞窟の奥に何が眠っているのか。

伝説の剣か、金銀財宝か、それとも重大なる封印か。

洞窟というのはロマンを含んでいると思う。大概の人は成長につれそういった物への関心が薄れていくのだが、それらと切っても切れない縁がある人間がいる。勇者だ。

何故か非常時に勇者が必要としている重要なアイテムは沼の洞窟だの森の奥にある洞窟だの海底にある洞窟だの湖の底にある洞窟だの氷づけになった洞窟だの滝の裏に隠された洞窟だの火口付近の洞窟だのの最奥部にあることが多い。

また、洞窟よりは頻度は低いものの、神殿や塔、遺跡などとも勇者は縁が深いが今は割愛。

とかく、何故か洞窟に物を隠す人は多い。盗賊団じゃあるまいに、宝物庫でも蔵でも作って厳重に保管しておけばいいのに。落盤でもあつたらどうするのだろう。

しかしそんな心配があろうとなかろうと、勇者たちは必要なものをとりに洞窟へと潜らねばならない。下手に難解複雑な迷宮になっていると、数日どころか数週間も洞窟内で過ごさねばならないというのはなかなか気の毒である。私ならごめんこうむる。

ごめんこうむりたいんだけども。

「というわけで、今日からこの洞窟内で実技の勉強を行います」

うちからほど近い山の斜面にぽっかり空いた穴の前で、ジョシュが淡々と言う。眩しいくらいに日が照っているが、無遠慮に肌を焦がす光も洞窟の中までは入っていけないようだ。洞窟の入り口は私の頭がギリギリぶつからない程度の高さで、薄暗い中にもある程度中に入ると道が曲がっているのが見て取れた。やや下に傾いているから、地下に続いているんだろう。

うん、ちよつと待て。

「こんな洞窟あつたっけ？」

「作りました」

「作つたんだ」

どうしよう、突っ込みどころが多すぎて困る。

お子様たちは洞窟に興味津々の様子だ。入口付近から中をのぞき見ている。

「確かに勇者は洞窟でのサバイバルが多いとは言つたけどさ……

……」

これ、いつぐらいから作つてたんだろう。っていうかあんたたちやりすぎでしょ々と。

「もともと空洞が多かつたあたりを狙つて掘りました。まだあまり手を入れていないので入れるところは少ないのですが」

言いながらジョシュは洞窟の地図を配る。黄ばんだ紙に妙にそれっぽく書きこまれた地図を見て、お子様たちは大はしゃぎだ。こんなところを凝らなくてもいいだろうに。

「今日は先日の授業で言ったことを思い出しながら、この洞窟の奥にある宝箱の中身を取ってくるのが課題です。二人で協力して課題のクリアを目指して下さい」

「分かつたぞ！」

「はい」

お子様たちは嬉々として返事をする。遠足みたいな雰囲気だ。

「では、あそこから必要だと思う道具を一人三つ選んで持ってください。今回は乾燥した洞窟での探索です」

そう言ってジョシユは二十程の道具が乗った板を示した。

松明、ロープ、ナイフ、チョークなどの使えそうなものから、煙玉、なべ、鏡などの使うのか？ というものまで。

そういえば前日やら前々日に洞窟探索講座つていうのをやったなあ。

私は今回はさすがにいかなくてよいようなので、お子様たちがやいのやいのと相談しながら道具を決めているのを眺めていた。

地図を見た感じはぼ一本道だし、それほど大荷物を持っていかなくても大丈夫だろう。

迷いに迷ったお子様たちは、ジョシユの用意したお菓子というトラップにも引つかからず（勇者サマが引っかかりかけていたが、ピールが全力で止めていた）、そこそこ必要そうなものを選んでいた。

ヘルメット二つ、松明一つ、ナイフを一つ、万が一の時用の救急キット、そして食糧。それとは別に最後にジョシユから中にある宝箱の鍵を渡されていた。

初心者向けの洞窟ならまあ大丈夫だろう。あえて言うならピールは運が悪いからもう少し防御関連を充実させるべきだ。ピールは絶対落石に当たると思う。勇者サマが無傷であろうとも、ピールだけボロボロという可能性は大いにある。

といっても、実は洞窟内に暗視カメ（暗闇でもはっきり映像が記録できる）を忍ばせているので万が一の時は助けに行けるらしい。なんというかこんなにぬるい状況で良いんだろうかと疑問に思う。でもあんまり厳しくしようとするとモンスターたちの反感買うんだよなあ。まあこのくらいで妥協しておくべきだろうと思う。

ちよつと前までは私とジョシュ（含む他のモンスター）との教育方針の差は深刻だったのだが、最近はその溝も埋まりつつあった。

ジョシュが言うには勇者サマは褒めたら伸びる子なので少しずつハードルを上げていくべきなのだそう。そうして一つ一つ課題をクリアさせていくべきなのだ。私は逆に一度大きな挫折を味わわせて勇者サマに身の程……じゃなかった、実力を自覚させるべきだと思っていた。

そういった主張の違いから、モンスターたちのやり方はぬるいと思っていたのだが、勇者サマのバーク口での扱いを知って私も少々考えを改めた。

勇者サマのうちでのあの横柄な態度にはまあ、ある程度理由がある。生まれ育った村でのあの境遇だ。勇者サマ自身は常に自信過剰な発言をしているが、あれが虚勢なのだと言われると納得がいく。クソガキにはありがちな特徴なので見過ごしていたが、あれは自分に自信がないがゆえに過剰なまでに自分を大きく見せようとしていたのだ。ま、それが勇者サマの地という可能性も捨てきれないが。

そういう子供に下手に失敗ばかり重ねさせていると、嫌な方向に性格がねじ曲がる。まあ多少ねじ曲がってもその後のやり方次第ではまっすぐに育つかもれない。ただそれにはこちら側の多大な努力と根気もしくは愛情が必要になる。私にそんなもんはない。あるわけがない。よって、楽な方法を選びたい。すなわち、勇者サマ自身が成功経験を積み重ねていくことで自信をつける方法だ。もちろん、図に乗らせないように適度に失敗はさせるが、順当にいけば性格がそこまで卑屈になったりしないはず。

子育てに王道なしとも言っから、それが成功するかどうかはまだ分からないのだけれど。

……私まだ独身なのに、なんで子育てなんかで悩まなきゃいけないんだろう。くそ、村長^{ハゲ}のせいだ。今後モンスターたちに脱毛クリム開発させてハゲの頭にある微かな希望すらも奪い去ってやる。

さて、洞窟の中に恐々と入っていくお子様たちを見送って、私はモンスターに用意させたハンモックの上に寝そべった。暗視カメラから送られる映像を寝そべってみようという目論見だ。

が、ハンモックって仰向けに寝る分にはいいけど、ハンモックの上で体を横にするって難しい。しょうがないので頭の部分を上げてもらってカメラの映像が見えるようにした。モンスターたちからは呆れ顔で見られたが、こんな糞暑い日なんだから木陰でハンモックぐらいいいじゃないかと思う。

「中は涼しいんだろうなあ……」

私はカメラから送られてくる映像を見てため息をついた。

ジョシュが乾燥した洞窟と言っただけあって、洞窟の中はそれほど水気がないようだ。勇者サマの掲げた松明の灯りが煌々と洞窟の中を照らしている。

「ピール、遅いぞ!」

「待ってよオキ兄ちゃん。急ぐと危ないよ」

洞窟内で無鉄砲に進んでいく勇者サマに、おたおたとしながらピールがついて行く。

勇者サマは自分しか松明を持っていないことが頭にないのか、どんどん先に行つてしまい、足元が暗くてよく見えないであろうピールは派手に転んだ。

「大丈夫か？」

気付いた勇者サマが慌てて戻る。

そして慌て過ぎた勇者サマもピールの目の前で転んだ。馬鹿だ。

「痛っ」

「オキ兄ちゃん、大丈夫？」

勇者サマが声を上げると、ピールが心配そうに言う。いや、あんたも転んだでしょ。

「……………全然痛くなんかないぞ！ 僕は強いからな！」

いやいや、めっちゃくちゃ痛そうにしてこらえてたよね、今。

まあこのやせ我慢できる根性は良いとは思うが。

「僕は平気だけど、ピールは大丈夫か？ 痛かったら痛いって言うんだぞ」

「おいらはちよつと転んだだけだから大丈夫だよ。ありがとう、オキ兄ちゃん」

ピールがへらつと笑った。

ま、これは嘘ではないだろう。普段の行動からみるに、ピールは勇者サマよりも転ぶことに慣れているようだし。ピールは少々鈍いのに加えて運が悪いからなあ。

「でも、オキ兄ちゃんと離れちゃうと、おいらの足元よく見えなくなっちゃうから、一緒に歩いてほしいな」

ピールって本当にできた子供だ。私だったら松明を持って先に行かれた時点で間違いなく切れてるんだけど。ピールが怒ることってあるのか？

ピールの言葉に勇者サマはばつの悪そうな顔をした。

「……………分かった。一緒に歩こう」

ほんつとにこのお子様は、他人に謝るということをしないなあ。

それからしばらくはお子様二人は並んで歩いてた。奥に進むにつれ道がでこぼこになってきたため、ペースはゆっくりだ。

時折飛来する蝙蝠に身をすくめてはいたが、初めての洞窟探検を楽しんでいる様子である。勇者サマはスキップでもしそうな調子だし。

「宝箱って何が入ってるんだろっな？」

「何だろっねえ。お菓子かなあ」

「きつと金銀財宝だ！」

んなわけあるか。っていうかよしんば金銀財宝があってもお子様の手に渡るようなことさせるわけないでしょうが。

私は一人心中で突っ込みを入れてると、傍らから視線を感じた。

「魔王様、結局宝箱の中には何を入られたのですか？」

そう言えば、ジョシュに宝箱の中身を言ってなかったな。

洞窟が出来ていることは知らなかったが、勇者サマの課題用に宝箱の中身を用意したのは何を隠そう私である。

子供心くすぐる外観の宝箱にわくわくしたのは内緒だ。

「内緒。勇者サマたちの努力とか実力によって変わってくるかなーって感じ？」

「……美味しいお酒とかじゃないですね？」

疑り深い眼差しでジョシュが言う。

こいつは一体私をなんだと思っているんだ。

「でっ」

鈍い音が響き、勇者サマが妙な声を上げた。出っ張っていた天井の岩に頭をぶつけたらしい。ヘルメットをしているから大したことはないだろう。

「洞窟は天井も床も不規則だから注意しなきゃ」

と、ピールが注意を促す。

ピールは基本的に運が悪いしどんくさいが、必要な時には慎重になれる子供である。今のところ不運な落石以外の被害には遭っていない。

逆に勇者サマは運がいいしどんくさくはないのだが、慎重とか冷静とかいうものがすっぱり抜けている。

それでも大した怪我をしないのは勇者補正なのか。くそ、痛い目に遭えばいいのに。

超初心者向けコースというだけあって、面白くないほど二人は順調に洞窟の奥へと進み、小一時間経った頃には洞窟の最奥部へと到達していた。

最奥部にはそれっぽく光ゴケが群生しており、その薄ぼんやりとした灯りに照らされて木製の古式ゆかしい宝箱が存在していた。サイズはお子様たちが小脇に抱えられる程度といささか小さいが、し

っかりとした造りの物である。

うん、ロマンだ。そして幻想的な雰囲気である。

っていうか光ゴケってこの辺にあったっけ？ ツキバ村に来てから初めて見たぞ。

「すごい……」

「綺麗だねえ」

お子様たちは初めて見るであろう光景に見惚れていた。気持ちはよく分かる。

もうちょっと難しいコースにしてもよかったかもしれない。そうした方が感動もひとしおだったろう。

三分ほどその光景に見惚れていたお子様たちだったが、松明の火が揺らめいたことで我に返った。あまり長居していると松明が燃え尽きてしまいそうだ。見事な小細工である。

「ピール、一緒に宝箱を開けるぞ」

「うん！」

お子様たちは興奮で顔を上気させながら宝箱に近付いていった。まず勇者サマが鍵を取り出し、宝箱の鍵穴にさす。勇者サマの手は震えていた。

……そこまで緊張するものか？ いや、単に興奮してるだけか。鼻息荒いし。

ゆっくりと鍵を回すと、かちゃりと鍵の開く音がした。お子様二人は息を飲む。

私の背後に居るモンスターたちまで固唾をのんで見守っているものだから、ついつい乾いた笑いが漏れた。

……だからそんなご大層なもんじゃないってば。

そしてお子様二人は声をそろえて一緒に宝箱を開けた。
が、

「何にも入ってないぞ？」

「おかしいねえ」

宝箱の中身を見た二人は首をひねっている。

「入れ忘れたのかな？」

「絶対魔王の仕業だ！」

勇者サマが鼻息荒く怒る。

うん、実はその通りだ。あてずっぽうもたまには当たるものである。

「あ、宝箱の蓋の裏に何か書いてあるよ」

宝箱の中を覗き込んでいたピールが気付いて声を上げた。

「なんて書いてあるんだ？」

勇者サマも松明を近づけながら覗き込む。

「ええと……『この宝箱を開けるまでに得た経験と共に道を行く仲間こそが宝』だって」

「は……………」

勇者サマがぼかんと口を開ける。

「うーん、これってマオさんの字だね。なんか意外な感じ」

そう言っぺピールは笑った。ピールには珍しく、苦笑というやつである。

しばらく呆然としていた勇者サマだったが、やがてプルプルと震えだした。

「結局何にも入ってないのと同じじゃないか！ ひどいにも程があるぞ！」

勇者サマの声が洞窟内に響く。

「落ち着いて、オキ兄ちゃん。いい経験になったのは確かだよ！」

ピールが慌てて宥めるが、勇者サマの怒りはなかなか解けそうにない。頑張れピール。

私は私の周囲にいる冷ややかな眼差しを向けてくるモンスターの相手を頑張るから。

「魔王様？ あれは一体どういうことでしょうか」

凍りつきそうなほど冷たい声が傍らから聞こえる。言わずもがなだがジョシュだ。

「読んで字のごとくよ。勇者の試練の王道ってやつよ」

本当ならば幾多の命の危機をくぐりぬけた先にあるのが様式美というやつだが、今回は試練が軽すぎたので書いてある言葉もちよつとばかり説得力に欠けている。残念だ。

「まさか魔王様、中身を用意するのが面倒くさかったとかじゃないですよ？」

「はは、まさか」

ジョシュの指摘に私は笑う。

思ったけど。目茶苦茶面倒くさいと思ったけど。

「……次回からは私達が用意した方がいいようですね」
呆れたようにジョシュが言う。

くそ、ひどい言われようだが次回からは是非そうしてくれ。面倒くさいし。

「一応仕込みはしてあるんだけど。ま、それに気付くかどうかは勇者サマ次第なんだよね」

そこは勇者だし、どうなんだろう。

ある程度落ち着いたのか、勇者サマは怒鳴るのを止めた。

「魔王の性格が悪いのはいつものことだからな。知ってたけど腹が立ったぞ」

うるさいガキだ。私は魔王だからそういうもんなのよ。

「でもどうしようか、この宝箱。中身空っぽだよ？」

ピールが困り顔で言う。

課題の内容が『箱の中身を取ってくる』である以上、何かしら持って帰らなければならないことになる。

すると勇者サマはやにわに松明をピールに手渡すと、自分は宝箱の蓋を閉じて脇に抱えた。

「ならこれを持って帰るだけだ！ この中に僕が手に入れた宝物をこれから入れていったらいいんだ」

勇ましく宣言する勇者サマに、ピールは一瞬だけ驚いたがすぐに笑顔になった。

「そうだね！ せっかく最後までたどり着いたんだもんね。きつとすぐに中が一杯になるよ！」

実は一部始終カメを通して見ているわけだから何も持って帰って来なくても失敗とは断じないんだけどね。

帰りの道中はピールが松明、勇者サマが宝箱という担当になった。随分と慣れたようで、行きよりスムーズだった。

が、

「オキ兄ちゃん、大丈夫？ 疲れてない？」

ピールが心配そうに声をかける。

片道小一時間の洞窟だ。あとは帰るだけとはいえ見た目より重い宝箱を持つて移動するのは骨が折れるに違いない。

「全然疲れてないぞ！ 早く帰って魔王に文句を言ってやる！」

その意気やよし、だが足元がいささか危ないぞ。

「ならいいんだけど……」

ピールは心配そうにしながらも再び歩き始めた。

五分ほど歩いただろうか、勇者サマがぼつりと呟く。

「疲れた……」

「それじゃあちよつとだけ休憩しようか」

ピールが言う。ごくごく普通の提案だったが、何故か勇者サマは驚いたようだった。

「いいのか？」

心底不思議そうに言うものだから、ピールもきょんとしている。

「うん、いいに決まってるじゃない。どうして？」

純然たる質問に勇者サマは言葉に詰まった。

「……………うん、そうだな」

嬉しそうな、困惑したような、そんな表情を勇者サマが浮かべる。

……………なるほど、勇者サマって他人に面と向かって氣遣われることに慣れてないのかもしれない。

勇者サマはごめんなさいとかありがとうとかいう言葉を使わない。他人を氣遣うことも滅多にない。人間としての基本だろうに。

でもそれは、ひよつとすると教える人がいなかったせいじゃなかろうか。そういった基本のことを教えるべき親は勇者サマが小さいころからいないし、親代わりとなるべき村長夫妻からは冷遇されて

いる。友人となるはずだった村の子供たちからは迫害されている。弱者を助けるべき教会の人間ですら勇者サマを忌避しているのだ。

一体誰がこの子供を賤けるといふのだろう。

一体誰がこの子供に正しいことを教えてやるというのだろう。

改めて思う。

これ、勇者教育っていうか本気で子育てじゃない？ と。子育て魔王の異名が言いえて妙だったわけだ。

あれなのか、勇者としての必要知識に加えて本来親や大人が教えるべき道德教育からしなきゃいけないのか。すでにマナーですら大概時間を割いて教えているというのに。勇者サマが字が読めたのは僥倖だが、そういうえば読み違えたり書きちがえたりすることが多かった。物知らずなところも多かった。単に勇者サマが馬鹿なだけだと思っていたが、もしかしたらちゃんとした教育を受けさせてないからじゃないのか？

バークー口の薄ら^{村長}ハゲには今度改めて追加の報酬を請求しよう。決定だ。

私が考えを巡らせている間にお子様たちは休憩を終えたようだ。気付いた時にはお子様たちは再び歩き出していた。

その後も特に問題なく歩いていた二人は、あと少しで出口というところまで来ていた。

カメの映像を通して洞窟の入口が見えたときにはほっと息をついたのだが、

「 危ない！」

私は思わず叫んだ。

ピールの頭めがけて、大きな岩が落ちてきたのである。ヘルメットがあるうと怪我をするのは確実な大きさだ。

背筋が凍った。

が、大きな音が響いた後、画面に映ったのは転がるお子様二人の姿。

そう、二人。

「ピール、大丈夫だったか？」

「う、うん……………」

小石まみれになりながら二人が身を起こす。

どうやら勇者サマがピールに体当たりをして直撃を回避したようだ。地面を転がったせいであちこち擦り傷ができている。

私は今にも二人のもとに殺到しそうなモンスターたちを制しながら胸をなでおろした。致命傷にはいたっていないようだ。

地面を転がった松明の火は辛うじて残っていた。

「ごめんね、オキ兄ちゃんは大丈夫？ 怪我してない？」

「僕は大丈夫だ！ 勇者だからな！」

パンパンと力強く体を払うと、勇者サマは落とした松明を拾い上げた。

「ありがとう、オキ兄ちゃん！」

ピールは勇者サマにと無邪気な笑顔を向けた。

「た、大したことないぞ」

勇者サマはぶっきらぼうに言うと、視線をそらした。

そんなやり取りは割とどうでもいいんだけど、気になることが一

っ。

宝箱、どこ行った？

ピールを庇う直前まで勇者サマが持っていたと思うのだが。

大した怪我がないことを確認し合った二人もそれに気付いたらしく、地面をあちこち探している。

「……あ」

勇者サマが小さく声を上げる。その体が小さく震えた。

視線の先には壊れた宝箱。落下した石の直撃を代わりに食らったのか、蓋がひしゃげ側面にも大きな傷がついてしまっていた。

ピールもそれに気付き、泣きそうな顔になった。

「ご、ごめんね、おいらのせいで……！」

オロオロと自分と宝箱の間に視線を彷徨わせるピールに気付き、勇者サマは目を拭って顔を顔をあげた。

「気にするな、ピール。こんなのよりお前が無事だった方がよかったんだ」

自分に言い聞かせているような節はあるが、それでもすぐにこんなことを言えるのは立派なことだ。

「でも……」

「ともに道に行く仲間が宝物なんだから、お前が無事じゃなきゃ意味がないだろ！ ほら、行くぞ！」

勇者サマが促すが、ピールはまだ申し訳なさそうな顔で立ち止ま
ったままだった。

今にも泣き出しそうな顔を見て、勇者サマは困ったような顔を
した。

しばらく気まずい沈黙があつたが、やがて勇者サマは壊れた宝箱
を叩いて言った。

「とりあえず、これを持って帰るだけ持つて帰るぞ。僕がこれ持
つから、ピールは松明を持つてくれ」

普段はあれだが、勇者サマはこういう状況だと随分お兄さんにな
るようだ。そう言えばピールと知り合った時もこんな感じだった
け。

普段からこうだと私としてもありがたいんだけどなあ。

太陽の下に現れた二人の姿は随分とボロボロになっていた。

頭こそヘルメットで守られていたから大丈夫だったが、服はあち
こち破れているし、土まみれだった。あちこち血もにじんでいる。
勇者サマはほぼいつも通りの表情だったが、ピールはまだ泣きそ
うな顔をしていた。

「お帰り。首尾はどうだった？」

あえて二人のボロボロの姿には触れず、結果だけを聞いた。

「見たら分かるだろ！ 持って来たぞ」

と、勇者サマは壊れた宝箱を突きだした。

私はそれを一瞥してから尋ねる。

「宝箱の中身は？」

「空っぽだったぞ！ 魔王の下手くそな字で変なこと書いてあるだけだった！」

下手で悪かったなガキンチョめ。あんたよりは上手だからね。

「空っぽねえ？」

私がつめ息交じりに言うと、自分の言ったことが疑ったと思われるのか、勇者サマが憤然とした様子でひしゃげた宝箱の蓋をこじ開けた。

ふむ。

「ねえ、オキ兄ちゃん。それ、何か入ってない？」

はっと気付いたようにピールが言う。

お、気付いたようだ。

宝箱の底板は破損の時の衝撃のせいか傾いて斜めになって、その下にあるものが少しだけ見えていた。

勇者サマもそれに気付き、慌てて宝箱を地面に下ろした。
そして上げ底になっているそれを外す。

「わ、なんだこれ！」

「きれいだねえ！」

お子様二人が歓声を上げる。

中に入っているのは色とりどりの飴玉がつまったガラス瓶だ。
喧嘩しないように同じものを二つ入れてある。魔法で固定していた
ため、破損の衝撃でも無事だったようだ。ガラス瓶自体が特殊なガ
ラスでできているから大丈夫だとは思ったが、なんとか無事だった
ようだ。さすが私の魔法。

思わぬところから出てきたものに、お子様たちがきゃいきゃいと
はしゃいでいる。

「マオさん、これ貰ってもいい？」

「もちろん」

「これ食べられるのか!？」

「当り前でしょ」

再びお子様たちが歓声を上げる。

「……ありがたい格言が中身、というわけではなかったのですね」
無邪気に喜ぶお子様たちを見ながらジョシュがぽつりと言う。

私は肩をすくめた。

「散々苦労させられた拳句、腹の足しにもならない金言貰うなんて
馬鹿馬鹿しいでしょ」

といつても素直にご褒美をやる気にもなれなかったので、二重底にして隠してみたのだが。洞察力さえあればもつと早くに気付いたはずだ。

「しかし中身が飴玉ですか」

ジョシュがどこか呆れたように言うので、私はにやりと笑う。

「子供の宝物なんて大体はそういうものから始まるのよ」

模型とか蛇の抜け殻とかパチンコとかも考えたんだけど、見栄えがちよつとね。それにああいうのは自分で集めるからこそ価値が出るものだし。その点瓶詰めの飴ならカラフルで綺麗だし、何より食べられる。一石二鳥だ。何より金銀財宝に比べてお金がかからない。この方法であと何年かは誤魔化したいところだ。

「ひねくれた褒賞でしたね」

ジョシュが眼鏡を押し上げながらため息をつく。

ひねくれていて当然だ。だって私魔王だし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0754m/>

正しい勇者の育て方

2011年6月24日12時09分発行